

栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

# 栗林公園

2006. 3

香川県教育委員会

栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

# 栗林公園

2006. 3

香川県教育委員会



空から見た栗林公園（上が東）



栗林分間図（安政七年）（栗林公園観光事務所蔵）

卷頭図版 2



出水遺構（Ⅲ区 SX06・07）



礎石建物跡（Ⅳ区 SB02）



石敷遺構（V区）



御林御庭之図（延享二（1700）年）  
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

## 序 文

香川県高松市栗林町に所在する栗林公園は、特別名勝の回遊式大名庭園として全国に知られています。

このたび旧園内にあった栗林動物園が廃止されたことに伴い、この地区（東門周辺）の再整備のための資料を得るため、平成16年度に発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、江戸時代中・後期の掘立柱建物跡・礎石建物跡や取水施設と考えられる石組みの出水（ですい）跡などが検出され、この地区に庭園を管理する施設があったことが想定されるなど、江戸時代の栗林公園を考える上で貴重な成果を上げることができました。

本報告書が栗林公園の変遷や江戸時代の大名庭園を研究するための資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心を一層深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係諸機関並びに地元関係各位に多大なご援助とご協力を頂きました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 渡部 明夫

## 例　　言

1. 本報告書は、栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で香川県高松市栗林町に所在する特別名勝栗林公園（りつりんこうえん）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、予備調査を平成16年6月1日から6月30日まで実施し、本調査を7月1日から11月30日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

北山健一郎　佐々木和裕　武井美和

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

栗林公園観光事務所、東京都文京区教育委員会、東京都千代田区教育委員会、  
愛知県陶磁資料館、佐賀県立九州陶磁文化館

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

本報告書の執筆・編集は北山が担当した。

6. 報告書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。

高田嘉幸、宮崎智嗣、加藤元信、後藤宏樹、厚　秀雄

7. 本報告書で用いる方位の北は、世界測地系に基づくものであり、標高はT.P.を基準としている。  
また、遺構は下記の略号により表示している。

S B 碓石及び掘立柱建物跡　　S D 溝状遺構　　S E 井戸跡　　S K 土坑  
S P 柱穴跡　　　　　　　　　S X 不明遺構

8. 採図の一部に国土地理院発行の1/25,000 地形図『高松北部』『高松南部』を使用した。

# 本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 立地と環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	
第1節 予備調査	9
第2節 基本土層序	12
第3節 I 区の調査	16
第4節 II 区の調査	35
第5節 III 区の調査	47
第6節 IV 区の調査	110
第7節 V 区の調査	137
第4章 自然科学的分析	
第1節 栗林公園出土木製品の樹種同定	139
第5章 まとめ 調査の成果と栗林公園の変遷	141

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置	4	第47図	SK23出土遺物実測図	36
第2図	周辺の遺跡位置図	6	第48図	SX05断面図	37
第3図	予備調査トレント配置図および調査区設定図	9	第49図	SX05出土遺物実測図①	38
第4図	調査区全体図	11	第50図	SX05出土遺物実測図②	39
第5図	I・II区土層断面図	13	第51図	SX05出土遺物実測図③	40
第6図	IV区北壁土層断面図	14	第52図	SX05出土遺物実測図④	41
第7図	IV区東壁土層断面図	15	第53図	SX05出土遺物実測図⑤	42
第8図	I区這構配置図	16	第54図	SX05出土遺物実測図⑥	43
第9図	SB01平・断面図	17	第55図	SX05出土遺物実測図⑦	44
第10図	SK01平・断面図	18	第56図	SX05出土遺物実測図⑧	45
第11図	SK01出土遺物実測図	18	第57図	SX05出土遺物実測図⑨	46
第12図	SK02平・断面図	18	第58図	II区包含層出土遺物実測図	46
第13図	SK02出土遺物実測図	18	第59図	III区這構配置図	47
第14図	SK03平・断面図	19	第60図	SD02出土遺物実測図	48
第15図	SK05出土遺物実測図	20	第61図	SD03出土遺物実測図①	49
第16図	SK06平・断面図	19	第62図	SD03出土遺物実測図②	48
第17図	SK07平・断面図	19	第63図	SK24平・断面図	50
第18図	SK08平・断面図	21	第64図	SK24出土遺物実測図	50
第19図	SK08出土遺物実測図	21	第65図	SP51出土遺物実測図	50
第20図	SK09平・断面図	21	第66図	SE01平・断面図	51
第21図	SK09出土遺物実測図	22	第67図	SE01出土遺物実測図①	51
第22図	SK10平・断面図	23	第68図	SE01出土遺物実測図②	52
第23図	SK11平・断面図	23	第69図	SX06平・断面図	53
第24図	SK11出土遺物実測図	23	第70図	SX06出土遺物実測図①	55
第25図	SK12平・断面図	23	第71図	SX06出土遺物実測図②	56
第26図	SK13平・断面図	23	第72図	SX06出土遺物実測図③	57
第27図	SK13出土遺物実測図	23	第73図	SX06出土遺物実測図④	58
第28図	SK14平・断面図	24	第74図	SX06出土遺物実測図⑤	59
第29図	SK14出土遺物実測図	24	第75図	SX06出土遺物実測図⑥	60
第30図	SK16出土遺物実測図	24	第76図	SX06出土遺物実測図⑦	61
第31図	SK17出土遺物実測図	25	第77図	SX06出土遺物実測図⑧	62
第32図	SK19出土遺物実測図	25	第78図	SX06出土遺物実測図⑨	63
第33図	SK20平・断面図	25	第79図	SX06出土遺物実測図⑩	64
第34図	SK20出土遺物実測図	26	第80図	SX06出土遺物実測図⑪	65
第35図	SP16出土遺物実測図	27	第81図	SX06出土遺物実測図⑫	66
第36図	SP27出土遺物実測図	27	第82図	SX06出土遺物実測図⑬	67
第37図	SX01出土遺物実測図	27	第83図	SX06出土遺物実測図⑭	68
第38図	I区包含層出土遺物実測図①	29	第84図	SX06出土遺物実測図⑮	69
第39図	I区包含層出土遺物実測図②	30	第85図	SX06出土遺物実測図⑯	70
第40図	I区包含層出土遺物実測図③	31	第86図	SX06出土遺物実測図⑰	71
第41図	I区包含層出土遺物実測図④	32	第87図	SX06出土遺物実測図⑱	72
第42図	I区包含層出土遺物実測図⑤	33	第88図	SX06出土遺物実測図⑲	73
第43図	I区包含層出土遺物実測図⑥	34	第89図	SX07平・断面図	74
第44図	II区這構配置図	35	第90図	SX07出土遺物実測図①	76
第45図	SD01出土遺物実測図	36	第91図	SX07出土遺物実測図②	77
第46図	SK23平・断面図	36	第92図	SX07出土遺物実測図③	78

第93図	SX07出土遺物実測図④	79
第94図	SX07出土遺物実測図⑤	80
第95図	SX07出土遺物実測図⑥	81
第96図	SX07出土遺物実測図⑦	82
第97図	SX07出土遺物実測図⑧	83
第98図	SX07出土遺物実測図⑨	84
第99図	SX07出土遺物実測図⑩	85
第100図	SX07出土遺物実測図⑪	86
第101図	SX07出土遺物実測図⑫	87
第102図	SX07出土遺物実測図⑬	88
第103図	SX07出土遺物実測図⑭	89
第104図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図①	91
第105図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図②	92
第106図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図③	93
第107図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図④	94
第108図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図⑤	95
第109図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図⑥	96
第110図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図⑦	97
第111図	Ⅲ区整地層出土遺物実測図⑧	98
第112図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図①	100
第113図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図②	101
第114図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図③	102
第115図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図④	103
第116図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図⑤	104
第117図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図⑥	105
第118図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図⑦	106
第119図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図⑧	107
第120図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図⑨	108
第121図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図⑩	109
第122図	IV-1区造構配置図	110
第123図	IV-2区造構配置図	111
第124図	IV-3区造構配置図	112
第125図	IV-4区造構配置図	113
第126図	IV-5区造構配置図	114
第127図	SB02平・断面図	115
第128図	SB02出土遺物実測図	116
第129図	SD04断面図	116
第130図	SD04出土遺物実測図	116
第131図	SD05断面図	116
第132図	SD05内石組造構平・断面図	117
第133図	SD05出土遺物実測図	117
第134図	SK31出土遺物実測図	118
第135図	SK34平・断面図	118
第136図	SK35平・断面図	118
第137図	SK37平・断面図	118
第138図	SK43平・断面図	119
第139図	SK46平・断面図	119
第140図	SK47平・断面図	119
第141図	SK47出土遺物実測図	119
第142図	SK50出土遺物実測図	120
第143図	SK51平・断面図	120
第144図	SK55出土遺物実測図	120
第145図	SK56平・断面図	121
第146図	SK57平・断面図	121
第147図	SK57出土遺物実測図	121
第148図	SK58平・断面図	122
第149図	SK61出土遺物実測図	122
第150図	SK62平・断面図	123
第151図	SK64出土遺物実測図	123
第152図	SK65平・断面図	123
第153図	SK65出土遺物実測図	123
第154図	SK66平・断面図	123
第155図	SK68平・断面図	123
第156図	SK69平・断面図	124
第157図	SK70平・断面図	124
第158図	SK73平・断面図	124
第159図	SK77出土遺物実測図	125
第160図	SP81出土遺物実測図	126
第161図	SP84出土遺物実測図	126
第162図	SX10平・断面図	126
第163図	SX10出土遺物実測図①	127
第164図	SX10出土遺物実測図②	128
第165図	SX12出土遺物実測図	129
第166図	IV区整地層出土遺物実測図	129
第167図	IV-1区包含層出土遺物実測図①	130
第168図	IV-1区包含層出土遺物実測図②	131
第169図	IV-2区包含層出土遺物実測図①	132
第170図	IV-2区包含層出土遺物実測図②	133
第171図	IV-3・4区包含層出土遺物実測図	134
第172図	IV-5区包含層出土遺物実測図①	135
第173図	IV-5区包含層出土遺物実測図②	136
第174図	V区造構配置図	137
第175図	V区包含層出土遺物実測図	138

## 表 目 次

第1表	調査体制	3
第2表	整理作業工程表	3
第3表	周辺遺跡一覧表	8
第4表	予備調査トレーナー覧表	10
第5表	樹種同定結果	139

## CD-ROMについて

添付されているCD-ROMには以下の内容が収録されています。

- ・遺物観察表

1. 土器・陶磁器観察表
2. 瓦類観察表
3. 金属器観察表
4. 木製品観察表

- ・遺構写真

- ・遺物写真

- ・遺物量計測表

遺物量計測表について

遺物量については、包含層出土遺物を除くすべての遺構について、破片を対象に種類ごとにその数量および重量を記録した。記録にあたっては、A磁器・B陶器・C炻器・D土器に分類し、それぞれ產地・器種ごとに記載し、さらに底部・口縁部の残存率から個体数を推定し得る表を作成した。

これは、遺構出土の遺物破片から完形品の個体数を推定することを目的として、クリープ・オルトン氏の提唱する方法に基づき、東京都新宿区新宿内藤町遺跡において試みられた方式によっている。

※『数理考古学入門』クリープ・オルトン著、小沢一雄・及川昭文訳 1987年 雄山閣

※『放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 新宿内藤町遺跡第Ⅱ分冊<遺物篇>』1992年

東京都建設局、新宿区内藤町遺跡調査会

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

栗林公園は、16世紀末から17世紀の始め頃、当時の高松藩主であった生駒親正によってその基礎が築かれ、17世紀中ごろ讃岐へ入封した高松松平家によって整備された、日本を代表する回遊式の大名庭園として昭和28年に特別名勝に指定された名園である。

昭和4年から東門南側の地区は、動物園として長く市民の憩いの場となっていたが、動物園が廃止されたことに伴い、香川県では動物園跡地の積極的な活用計画を策定することとなった。

そこで、専門家による「栗林公園東門周辺再整備検討委員会」が組織され、平成15年3月に「特別名勝栗林公園保存並びに活用基本計画」が策定された。さらに、この計画に基づいて平成16年3月に策定された「栗林公園東門周辺再整備基本設計業務 報告書-1」には、整備の課題として動物園跡地については、「文化財価値に応じた保存・再整備を図ることを基本原則としつつ、当面の間公園としての快適性・利便性を向上させるとの観点から施設整備を図る」とし、また「既存の資料や発掘調査による資料にもとづき、江戸時代の作庭の精神を活かした整備とする」とされている。また、「現段階では既存の資料をもとに計画を作成するが、発掘調査結果により新たな資料が明らかになった場合は、これに基づき計画・整備の見直しを行う」と、地下遺構の保護と活用についての方針が定められている。

これらの計画等を受け、香川県教育委員会では関係諸機関との協議を重ね、当初平成15年度中に埋蔵文化財包蔵状況を確認し、栗林公園の保存計画策定の資料を得るために予備調査および本調査を計画したが、動物園内の施設の撤去時期が遅れたため、翌平成16年度に調査を実施することとした。

発掘調査は、対象地が特別名勝の指定範囲に含まれるため、文化庁に対し平成16年4月19日付け16觀交第6064号により、発掘調査のための現状変更の申請を行い、同年5月21日付け16委府財第4-112号による許可に基づき、実施した。その後、再整備計画における構造物の一部が東門内南側土壌部分と重なることが判明し、この部分の確認調査が必要となった。そこで当該個所の発掘調査を、同年10月5日付け16觀交第37409号による現状変更の申請ならびに同年10月29日付け16委府財第4-1095号による許可に基づき、実施した。

発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターが調査担当となり、平成16年6月に予備調査を実施し、関係諸機関との協議のうえ、本調査範囲を絞り込み、7月から11月末までの期間で本調査を実施した。調査面積は4,000m<sup>2</sup>である。

## 第2節 調査の経過

### 1. 予備調査

現地調査は、平成16年6月7日に着手し、6月18日をもって終了した。調査面積は、トレンチ16本分の約400m<sup>2</sup>である。調査の結果、南端の「萩御門」推定地で柱穴等の遺構を確認し、中央部で大規模な瓦溜り等を確認した。また北よりの部分で遺物を多量に含んだ整地層を確認したため、それぞれ本調査の必要があると判断した。ただし、桜馬場等の公園庭の部分については、明確な遺構は確認できなかつた。

また、50m プール跡地についてはプールそのものが遺構面を掘削して構築されていたため、調査は不要であると判断した。詳細は第3章第1節のとおりである。

## 2. 本調査

予備調査の結果をふまえ、南端のⅠ区から北部までのⅣ区の調査区を設定し、平成16年6月22日に関係諸機関との協議を行い、6月28日から現地調査に着手した。調査はⅠ区から着手し、Ⅲ・Ⅳ区へと展開し、最終的にⅡ区の調査で終了する計画で進めた。また、東門西側の土壘については、基本設計で構造物が構築される予定であるため、一部確認のための調査を実施した。これをⅤ区と称している。

## 3. 調査体制と調査方法

予備調査、本調査ともに香川県埋蔵文化財センターの直営によって実施し、調査員2名、調査技術員1名の3人1班体制で行った。調査体制の詳細は第1表のとおりである。

調査は前述のとおり、Ⅰ～Ⅴ区の5つの調査区に分け実施した。各調査区とも基本的に全面調査を実施したが、一部において旧動物園施設の基礎が遺構面よりも下層に及んでいる部分が検出されたため、このような部分については調査を行っていない。

公園内には基準点・ベンチマーク等が敷設されていなかったため、東側の国道から基準点を調査区内に打設し、調査の際の基準とした。基準点は国土座標第Ⅳ区に属する。

## 4. 整理作業

整理作業は平成17年度に香川県埋蔵文化財センターが実施した。出土遺物は土器・石器・金属器・木器合せて293箱にのぼる。整理期間は平成17年4月から8月までの5ヶ月間であり、整理作業の工程は第2表のとおりである。

なお、発掘・整理作業に携わった方々は、以下のとおりである。(五十音順)

### 発掘調査

飯間高子、糸瀬忠之、稲田寿子、川田朋彦、柴垣俊裕、諫訪芳美、十河節子、高尾司之、高木ミチ子  
塚原 進、土居 剛、中村大地、長山キミエ、西崎文子、西村和代、藤井サヨ子、松本悦子

松本和子、三谷恵子、宮地恵美子、六車ふみ子、村尾律子

### 整理作業

岡野雅子、久保真由美、馬場聰子、前田好美、森川理恵、矢野ゆかり

第1表 調査体制

香川県教育委員会 文化行政課											
	平成16年度						平成17年度				
総務	課長	北原 和利	課長	吉田 光成							
	課長補佐	森岡 修	課長補佐	中村 榎伸							
総務	主任	香川 浩章	副主任	河内 一裕							
	主任	堀本 由紀	主任	堀本 由紀							
埋蔵文化財	主任主任	八木 秀憲	主任主任	八木 秀憲							
	事務長	大山 真充	事務長	藤好 史郎							
	主任	山下 平重	主任	山下 平重							
	文化財専門員	松本 和彦	文化財専門員	信里 芳紀							
香川県埋蔵文化財センター											
	平成16年度						平成17年度				
総務	所長	中村 仁	所長	渡部 明夫							
	次長	渡部 明夫	次長兼総務課長	榎原 正人							
総務	総務課長	野保 昌弘	係長	松崎日出穂							
	係長	松崎日出穂	主査	塙崎かおり							
調査課	調査課長	藤好 史郎	主査	塙崎かおり							
資料普及課	文化財専門員	北山健一郎	調査課長兼資料普及課長	廣瀬 常雄							
	文化財専門員	佐々木和裕	文化財専門員	北山健一郎							
	調査技術員	武井 美和									

第2表 整理作業工程表

項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
接合・復元	■											
実測		■	■									
遺構図トレース				■	■							
遺物図トレース				■	■							
写真撮影			■	■								
編集				■	■							
入稿						○						
校正							■	■	■			
印刷										○		

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

特別名勝栗林公園は、江戸期には「栗林山荘」と称された高松松平家の別荘で、高松市栗林町に所在し、背後の紫雲山を借景とする日本を代表する回遊式大名庭園として全国的に也有名である。地理的には、高松平野のもっとも北端に近い部分に位置し、標高7m前後を測る。園内の6つの池はすべて地下の湧水によるもので、旧動物園の50mプールも地下水でまかなわれていた。このことからも、公園付近には豊富な地下水水源があることが推定される。

栗林公園の作庭以前は、現在は紫雲山の西側を流れる香東川が東側も流れしており、近世初頭に生駒家の家老である西鶴八兵衛によって香東川の大改修が行われ、紫雲山の東側が新たな開発の対象になった。

発掘調査の結果、標高5m前後には河川の氾濫原である砂層が厚く堆積していることがわかり、部分的には現在も湧水の激しい場所も確認している。以上の所見より、栗林公園及びその周辺は旧香東川の巨大な氾濫原であったと考えられる。



第1図 遺跡の位置

## 第2節 歴史的環境

### 作庭以前

第1節でも述べたとおり、栗林公園は旧氾濫原の上層に築庭されたもので、集落等の遺跡は周辺に所在しない。わずかに氾濫原の粗砂層中に須恵器や弥生土器が散発的に包含されているのみである。これらの土器は概ね、摩滅が激しく、栗林公園周辺に当該時期の遺跡が所在していた可能性は低いと考えられる。しかしながら、栗林公園の東側には県下屈指の規模を誇る高松平野が開けており、標高10m前後の地域に縄文時代から中世に至るまでの集落遺跡が多く分布している。

縄文時代には、晚期に属する居石遺跡や林・坊城遺跡から木製の農耕具と考えられるものが出土しており、該期にはすでに農耕が営まれていた可能性が高い。また、東中筋遺跡では赤色顔料が付着した櫛文土器が出土している。

弥生時代には、前述の東中筋遺跡や浴・長池遺跡で小区画水田が、上天神遺跡では堰跡が検出され、水田農耕の様子が明らかになりつつあるほか、天満・宮西遺跡では環濠集落が確認されている。太田下・須川遺跡や空港跡地遺跡では、鹿と思われる動物を線刻した土器片が出土しており、農耕と並行して狩猟も行われていたことがうかがえる。

古墳時代には、栗林公園の西側に広がる紫雲山を中心とする石清尾山山塊に多くの古墳が築造される。殊に古墳時代前期の積石塚古墳群は全国屈指の規模で、双方中円墳である猫塚、前方後円墳である姫塚、石枕付の削抜式石棺が露出している石船塚古墳、麓の神社に伝世していた破片と一致する方格規矩四神鏡の破片が出土した鶴尾神社4号墳等9つの古墳が史跡に指定されている。また、古墳時代後期の横穴式石室を持つ円墳も多く分布している。古墳時代の集落としては、太田下・須川遺跡で琥珀製の勾玉が出土した竪穴住居跡を含む住居跡群が検出されており、古墳時代にも集落が展開していたことがうかがえる。

奈良時代になると、栗林公園から西南西約4kmの片山池付近で寺院等に供給される瓦を焼成していた窯跡である片山池1号窯跡が営まれる。付近にあったと伝えられる坂田庵寺等へ供給されていたものと考えられている。また、松縄下所遺跡等では条里地割が認められ、道路の側溝ではないかと考えられる溝状遺構が検出されている。高松平野ではこのような条里地割が現在でも顯著に認められる部分があり、天平年間に作製された「弘福寺領山田郡田園」(多和文庫蔵)は古代の高松平野の様子を描いた絵図としてつとに有名であり、その比定地の調査では様々な角度から古代の条里制についての所見が得られている。

中世には、高松城跡(西の丸地区)や浜ノ町遺跡で掘立柱建物跡等で構成された集落が検出され、江戸時代以前から海浜部周辺に集落が所在していたことが明らかとなっている。

### 作庭以後

栗林公園は中世末期に現在の小普陀付近に佐藤氏が居を構えたのが緒とされるが、確実にそれを証明する史料等はない。その後、高松藩主として入府した生駒氏により、大規模な治水事業の結果、庭園としての体裁が整えられ、藩主の別荘としての位置付けがなされた。

生駒氏改易のあと、17世紀中葉に新たに高松藩主として入府した松平頼重はこの地を引き継ぎ、「栗林莊」なる別荘として利用した。その後、園内の整備は歴代藩主によって継続的に実施され、18世紀初



第2図 周辺の遺跡位置図 (1/25,000)

頭、五代藩主頼恭（よりたか）によって一応の完成をみ、現在の栗林公園の原型となった。頼恭は園内の池や丘を始め、建物等の名称を中国風に改め、元禄年間に作製された絵図にその名称を加筆している。いわゆる「御林御庭之図」（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）である。これによると、園内の池や丘等の基本的な配置や名称等は現在に引継がれていることがわかる。また、儒学者中村文輔に園内景勝地の名称変更の由来等を「栗林莊記」（延享二年）にまとめさせている。

その後、江戸時代末期までの栗林公園の様子を具体的に示す史料・絵図等は所在しないが、文化年間以降、いくつかの絵図が作製され、現存している。特に、「栗林分間図」（栗林公園観光事務所蔵）は正確な測量技術を用いて1/650の縮尺で作製されたもので、園内の様子を知る上で的一般資料である。また、弘化年間に作製された「栗林古図」（香川県歴史博物館蔵）は江戸時代末期の様子を示した絵図であり、これらの比較により、当時の様子をある程度復元できる。

#### 明治以後

明治維新後の廃藩置県等、新政府の政策により「栗林莊」は「栗林公園」として一時期松平氏の所有となり、その後香川県が所有・管理することとなった。文明開化の影響で園内の北半分である北湖周辺は西洋式の庭園に改築され、博物館（現商工奨励館）や美術館が建てられた。東門南側の南北に細長い区域は香川県により、西洋式花壇や動物園的な利用をされていたが、昭和四年より、民間に貸し出され、本格的な動物園「栗林動物園」として営業することとなった。動物園内には県内唯一の50mプール等も設けられ、長く県民の憩いの場として親しまれたが、平成十五年をもって、廃園となり、現在に至っている。

### 第3表 周初遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献	備考
1	東林公園	高松市東林町	近世	獨立柱建物跡・礎石建物跡・出土	陶磁器・瓦類		
2	浜町廻廊	高松市浜町	中世-近世	獨立柱建物跡・土坑	陶磁器・瓦類	1	
3	浜町城跡(西の丸町)	高松市浜町	中世-近世	獨立柱建物跡・土坑	陶磁器・瓦類	2	
4	高松城跡(北署)	高松市西内町	近世	土坑・柱穴・井戸跡	陶磁器・瓦類・木製品	3	
5	高松城跡(ホーロー)	高松市三溪町	近世	縄文	陶磁器・瓦類	4	
6	高松城跡(浜林氏居宅)	高松市三溪町	近世	礎石建物跡・米丸丸跡	陶磁器・瓦類	5	
7	高松城跡(歴史博物館)	高松市三溪町	近世	礎石建物跡・獨立柱建物跡・石塀	陶磁器・瓦類	6	
8	高松城跡(水手手門)	高松市三溪町	近世	深溝・水手手門台	陶磁器・瓦類	-	
9	高松城跡(三の丸)	高松市三溪町	近世	石垣	陶磁器・瓦類	7	
10	高松城跡(地久櫓)	高松市三溪町	近世	鶴台・土塹	陶磁器・瓦類	7	
11	高松城跡	高松市三溪町	近世	-	陶磁器・瓦類	-	
12	高松城跡(作事丸)	高松市玉藻町	近世	礎石建物跡・土坑・横状造構	陶磁器・瓦類	8	
13	無量寿院	高松市寺町	中-近世	横状造構・井戸跡・柱穴	陶磁器・瓦類	9	
14	松山大廟廻廊跡	高松市丸の内	近世	長屋門跡・土坑・道路遺構	陶磁器・瓦類	10	
15	高松城跡(西内町)	高松市西内町	近世	土坑・柱穴跡・横状造構	陶磁器・瓦類	7	
16	東町奉行所跡	高松市片原町	中-近世	礎石建物跡・井戸跡	陶磁器・瓦類	11	
17	片原町竪堀跡	高松市片原町	近世	-	陶磁器・瓦類	-	
18	新屋町道路跡(萬葉館)	高松市吉原町	近世	土坑・柱穴跡	陶磁器・瓦類	12	
19	新屋山塚跡	高松市山崎町	古墳	積石塚(前方後円墳)	石棺・土師器片	13	
20	石室塚古墳	高松市山崎町	古墳	積石塚(前方後円墳)	石棺・土師器片	13	
21	鏡谷古墳	高松市山崎町	古墳	積石塚(双方中円墳)	土師器片	13	
22	北大塚古墳	高松市山崎町	古墳	積石塚(前方後円墳)	土師器片	13	
23	猿塚	高松市山崎町	古墳	積石塚(双方中円墳)	鏡・壺瓶・筒形彌器	13	
24	姫塚	高松市山崎町	古墳	積石塚(前方後円墳)	鏡・壺瓶・筒形彌器	13	
25	鶴花神社4号墳	高松市山崎町	古墳	積石塚(前方後円墳)	鏡・土師器	14	
26	東中筋遺跡	高松市桜町	绳文-近世	自然石圓座・水田跡・獨立柱建物跡	縄文土器・弥生土器	15	
27	西ノゼタ番道跡	高松市西八七町	弥生-中世	獨立柱建物跡・水田跡・溝状造構	弥生土器・瓦類	16	
28	松並木中筋遺跡	高松市松並木	弥生-中世	自然石圓座・豎穴住居跡・獨立柱建物跡	弥生土器・石器	17	
29	天瀬・宮西遺跡	高松市松並木町	弥生-近世	豎穴住居跡・水田跡・環濠跡	弥生土器・石器	18-19	
30	境川遺跡	高松市松並木町	弥生-近世	獨立柱建物跡・水田跡・土坑	弥生土器・土師器	20	
31	下原遺跡	高松市松並木町	弥生-近世	獨立柱建物跡・水田跡・土坑	弥生土器・土師器	20	
32	松並木下原遺跡	高松市松並木町	弥生-近世	獨立柱建物跡・水田跡・溝状造構	弥生土器・須恵器	21	
33	キモンド一遺跡	高松市伏石町	弥生-中世	獨立柱建物跡・溝状造構	弥生土器・木製品	22	
34	上天神遺跡	高松市上天神町	弥生	整穴住居跡・溝状造構・溝跡	弥生土器・石器	23	
35	太田下-領川遺跡	高松市太田下町	弥生-中世	整穴住居跡・溝状造構・自然河川	弥生土器・須恵器	24	
36	鮮人遺跡	高松市伏石町	弥生-近世	水田跡・自然河川	弥生土器・石器	25	
37	高石遺跡	高松市伏石町	縄文-近世	獨立柱建物跡・祭祀跡	弥生土器・木製品	26	
38	井ノ東二遺跡	高松市伏石町	縄文-弥生	溝状造構	縄文土器・弥生土器	27	
39	井手山一・二遺跡	高松市伏石町	縄文-近世	獨立柱建物跡・溝状造構	弥生土器・木製品	28	
40	宍道丸山遺跡	高松市伏石町	弥生	水田跡・溝状洞跡	弥生土器・石器	29	

文獻一覽

- 1 沢ノ町道路 サンボート高校総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6署 香川県埋蔵文化財調査センター 2004  
2 京成城跡(の丸町) サンボート高校総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I・II・III 96香川県埋蔵文化財調査センター 2001~2003  
3 96香川県埋蔵文化財調査センター年報平成10年度 香川県埋蔵文化財調査センター 1999  
4 岩谷郡埋蔵文化財調査年報平成5年度 岩谷郡教育委員会 1994  
5 高松城東丸跡発掘調査報告書 香川県教育委員会 1987  
6 忍び城跡 香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香川県埋蔵文化財調査センター 1999  
7 史跡高松城跡(地久櫓跡・三の丸跡) 史跡高松城跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市教育委員会 1993  
8 亥根城跡(作丸) 亥根城古事記会事務所に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市教育委員会 1999  
9 高松城跡(無量院跡) 市街地再開発促進道路事業(高松御園跡)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1署 高松市教育委員会 2005  
10 高松城跡(松平大膳家上屋敷跡) 新ヨンダンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松市教育委員会、四笔ビジネス株式会社 2004  
11 高松城跡(東町奉行所跡) 同左住居跡(ゴトニア町並木パーキング跡)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松市教育委員会、高松零平電気株式会社 2005  
12 高松駅周辺 高松市埋蔵文化財調査報告 第65署 高松市教育委員会 2003  
13 鎮護高松石滝尾山石塚の研究 京都帝國大學文學部考古學研究報告 第12冊 京都帝國大學文學部 昭和六年~昭和七年  
14 鶴岡寺社 4号墳調査報告書 高松市石滝尾山石塚の伝承地前後円墳の調査 高松市教育委員会 1983  
15 中筋道路 郡市計画道路東港浜川・宮島町道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第一・二冊 高松市教育委員会 2004  
16 西ハゼ土居遺跡 郡市計画道路本太鬼無鬼無跡事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1署 高松市教育委員会 2005  
17 松北・中所遺跡 郡市計画道路町分寺坂御陵改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財センター 2000  
18 天王寺・宮西道路・落葉水・水田橋 - 天王寺2・3土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 高松市教育委員会 2002  
19 宮西道路・宮西道路～河原橋跡 - 上西原道路～第一歩道調査 - 太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊 高松市教育委員会 2004  
20 堀目・下西原道路 - 太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 高松市教育委員会 2001  
21 松原下道遺跡 - 太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 高松市教育委員会 2001  
22 キモンドー遺跡 太田第3土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 高松市教育委員会 1993  
23 上天神遺跡 高松東山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、建設省四国地方建設局 1995  
24 大田下道遺跡 高松東山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、建設省四国地方建設局 1995  
25 銀時跡 - 一級国道11号高松東山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 高松市教育委員会、建設省四国地方建設局 1995  
26 石庭遺跡 - 一般国道11号高松東山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊 高松市教育委員会、建設省四国地方建設局 1995  
27 井手東二遺跡 - 一般国道11号高松東山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊 高松市教育委員会、建設省四国地方建設局 1995  
28 手井東一遺跡 - 一般国道11号高松東山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 高松市教育委員会、建設省四国地方建設局 1995  
29 池波・手井東二遺跡 - 一般国道11号高松東山道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊 高松市教育委員会、建設省四国地方建設局 1994

## 第3章 調査の成果

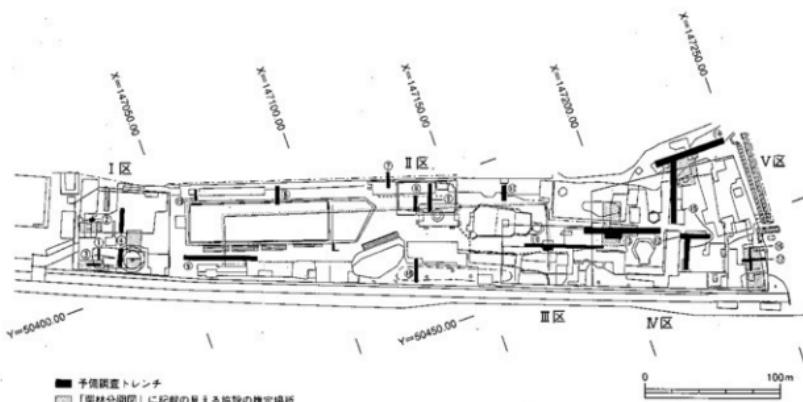
### 第1節 予備調査

地下遺構の状況を確認し、東門周辺再整備事業の実施計画を策定する際の資料を得るために、まず予備調査を調査対象地全域にわたって実施した。期間は平成16年6月7日から6月17日までの実働10日間である。トレントは重機により幅1.5mから2m、遺構面と考えられる土層面の検出とその下層の確認をした。個々のトレントの概要は第4表のとおりである。

なお、17・18トレントは北端部の既存建物（旧管理事務所）の撤去を待って実施したため、本調査と並行して行った。

予備調査を概略すると、南側については、近代以降に大規模な土地の改変が行われており、現地表下1~1.5m程は搅乱層が顕著であった。特に⑤トレントではプールを造るために掘削した土を周辺に盛り上げておらず、さらに上層に昭和20年の高松大空襲の瓦礫が堆積しており、遺構面そのものも確認できなかった。北側についても基本的な状況は南側と同様であるが、搅乱層の厚さ自体は南側ほどではない。むしろ、旧動物園の施設構築に際しての搅乱が際立っている。特にモンキー・ハウスや象舎、ライオン舎等は基礎が深く、調査は不可能な状況であった。

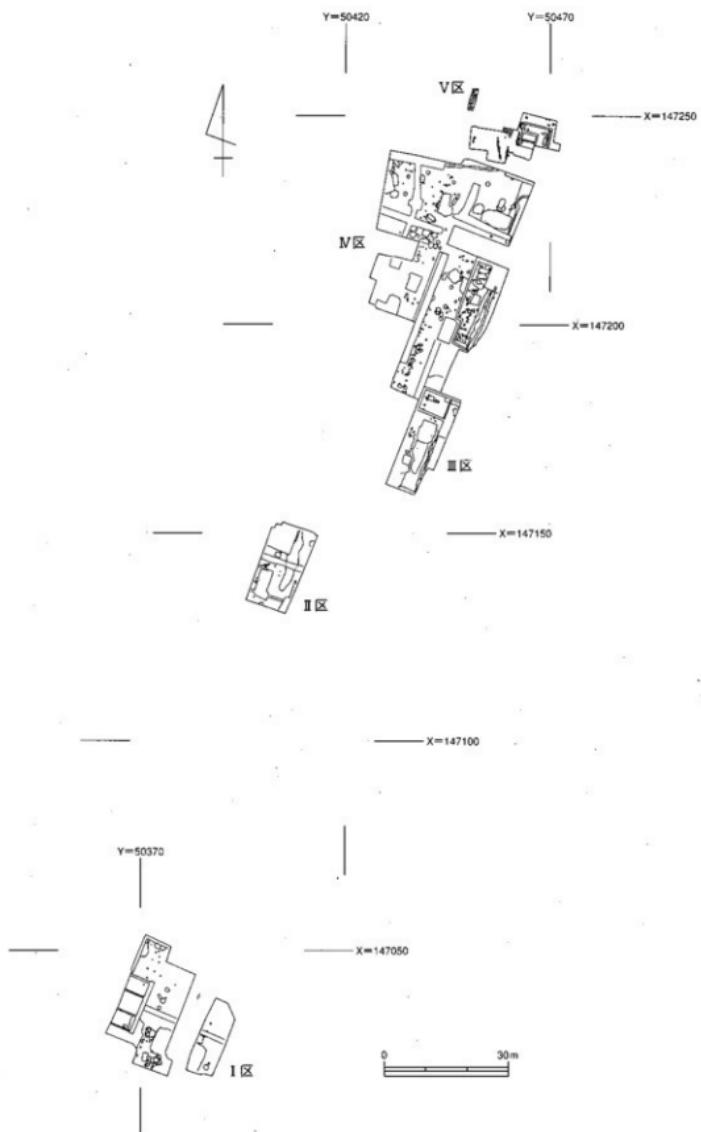
予備調査の結果、柱穴等の遺構を検出したトレントを中心に、基本設計の内容を勘案して、本調査の必要な地区を設定した。すなわち、調査対象地の南端部分は遺構を確認した②トレントを中心に、「栗林分間図」に見える「萩御門」推定地を含んだ地区をI区、大規模な瓦溜りを確認した⑧・⑨トレントを中心とした地区をII区、調査対象地の中央やや北寄りの部分で遺物を大量に含む大規模な整地層を確認した⑪トレントと「栗林分間図」に見える屋敷地と推定される部分にあたる、III・IV区である。また、東門を入ると南側に東西に延びる土壠部分のトレントをV区とした。



第3図 予備調査トレントおよび発掘調査区設定図 (1/1,800)

第4表 予備調査トレンチ一覧表

番号	幅(m)	長さ(m)	遺構	遺物	所見
①	1	5	土坑	陶磁器片	現地表下80cmまで搅乱がおよぶが、その下層で淡青褐色細砂層を確認。この面で土坑1基を検出。
②	1	9	土坑	刀装具	現地表下1mまで搅乱。その下層で淡青褐色細砂層及び基底砂礫層を確認。この面で土坑1基を検出。
③	1	10	土坑・ピット	陶磁器片	現地表下80cmまで搅乱。その下層で淡青褐色細砂層及び基底砂礫層を確認。この面で土坑・ピットを検出。
④	1	16	なし	陶磁器片	現地表下30cmまで搅乱。搅乱下層で明黄茶色砂質土を検出。砂質土層の下部30cmで基底砂礫層を確認。
⑤	2	30	なし	陶磁器片	現地表下25cmで高松大空製の瓦礫層を検出。その下部1.1mまで搅乱。搅乱の下層で基底砂礫層を確認。
⑥	2	5	なし	陶磁器片	現地表下80cmまで搅乱。搅乱の下層で基底砂礫層を確認。
⑦	1	4	なし	陶磁器片	現地表下60cmで明黄茶色細砂層を確認。細砂層の50cm下層で基底砂礫層を確認。遺構確認できず。
⑧	2	9	なし	陶磁器片	現地表下40cmで明黄茶色細砂層を確認。細砂層の40cm下層で基底砂礫層を確認。遺構確認できず。
⑨	1	12	瓦溜り	瓦類・陶磁器	現地表下30cmで明黄茶色細砂層を確認。細砂層上面より大量の瓦・陶磁器類を投棄した遺構を確認。溝状に南北に広がる。
⑩	2	8	なし	瓦類・陶磁器	現地表下80cmまで搅乱。搅乱の下層で基底砂礫層を確認。
⑪	2	28	整地層	瓦類・陶磁器	現地表下60cmで明黄茶色細砂層を確認。細砂層の落ち込みを埋めるように炭化物や瓦類を多量に包含した整地層を確認。(深さ20cm)
⑫	3	46	ピット	瓦類・陶磁器	現地表下70cmまで搅乱。搅乱下層で明黄茶色砂質土及び粗砂層・基底砂礫層を検出。砂質土層上面でピット2基検出。
⑬	6	8	ピット	陶磁器片	分間図に記載されている建物推定位置。現地表下40cmで基底砂礫層及び明黄茶色砂質土を検出。これらの上面でピット状の遺構5基を検出。
⑭	2	24	なし	陶磁器片	現地表下80cmまで搅乱。搅乱下層で基底砂礫層及び粗砂層を確認。遺構確認できず。
⑮	2	27	なし	陶磁器片	現地表下50cmまで搅乱。搅乱下層で基底砂礫層及び粗砂層を確認。遺構確認できず。
⑯	1	5	礎石建物跡	瓦類・陶磁器片	既存建物の下部。現地表下30cmで礎石列を検出。その他の遺構は確認できず。
⑰	1	10	礎石建物跡	瓦類・陶磁器片	既存建物の下部。現地表下30cmで礎石列を検出。その他の遺構は確認できず。
⑱	2	8	なし	瓦類・陶磁器	現地表下60cmまで搅乱。搅乱下層で細砂層を確認。その下部19cmで基底砂礫層及び粗砂層を確認。遺構確認できず。
⑲	1	5	なし	なし	現地表下60cmで明黄茶色細砂層を確認。細砂層の50cm下層で基底砂礫層を確認。遺構確認できず。



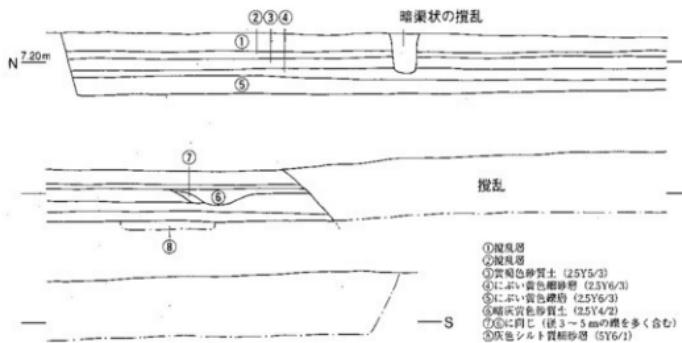
第4図 調査区全体図

## 第2節 基本土層序

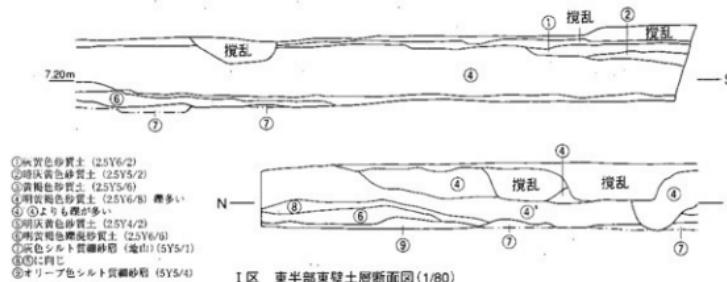
今回の調査対象地における基本土層序については、第5～7図のとおりである。図に示したとおり、動物園跡地内では近代以降の土地の改変が著しく、近世以前の土層が良好に確認できた範囲は少ない。特にゾウ・キリン・ゴリラ等の大型獣の糞舆は基礎が厚く、近世以前の遺構面を完全に破壊していると考えられたため、調査地区から除外した。また、50m ブール周辺についても、予備調査の結果、ブル建設の際に掘削した残土を周辺に盛って整形し、さらに、昭和20年の高松空襲の瓦礫を処分した土層も認められたが、近世以前の土層が確認できなかつたため、調査範囲から除外した。

近代以降の搅乱を除く、基本土層序については、大きく細砂層を中心とするものと粗砂層を中心とする2つのグループに分けられる。調査対象地の南側は概ね、細砂層を中心とし、北側は粗砂層を中心とする。また、高松平野に多く見られる黄褐色の粘土層については所在せず、これらのことは調査対象地が大なり小なり、河川の氾濫源であったことを示している。南側は比較的緩やかで、北側はある程度の流水量があったと推定される。特にⅢ区からⅣ区にかけては細砂層と粗砂及び小疊層が交互に南東から北西方向に帶状に堆積し、流路がこの方向であったことを示している。この氾濫源の土層中からは弥生土器や須恵器が少量出土しているが、いずれも細片でしかも摩滅が著しいことから調査対象地に該期の遺構が所在する可能性は極めて低いものと考えられる。

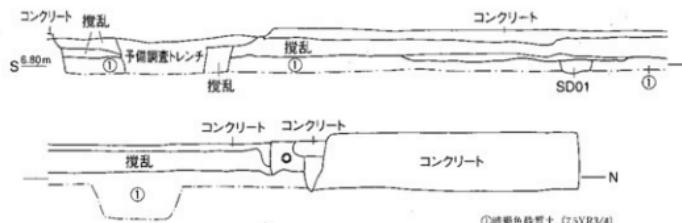
以上のことから、調査対象地は河川氾濫源を治水事業によって更地化し、豊富な湧水と自然の借景を利用して園地化されていったものと考えられる。



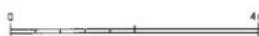
### I区 西半部東壁土層断面図(1/80)



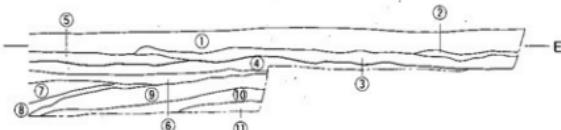
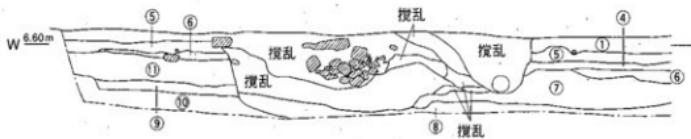
### I 区 東半部東壁土層断面図(1/80)



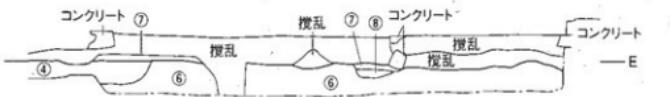
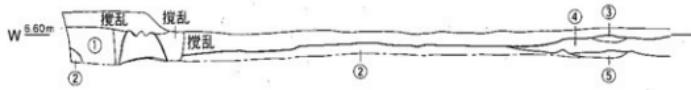
### I区 西壁土质断面图(1/80)



第5図 I・II区土層断面図



- ① 深色土質 (5Y7/4)
  - ② 深褐色砂質土 (2.5Y7/4)
  - ③ オリーブ褐色泥質砂質土 (5Y6/3)
  - ④ 黄褐色砂質土 (2.5Y6/1)
  - ⑤ 喀氏黃褐色砂質土 (2.5Y4/2)
  - ⑥ 明赤褐色砂質土 (2.5Y4/6)
  - ⑦ 灰白色粗砂質土 (2.5Y8/2)
  - ⑧ 黄灰色シルト質砂質土 (2.5Y5/1)
  - ⑨ 黄褐色塊状砂質土 (2.5Y8/2)
  - ⑩ ⑪ に見上
  - ⑫ 明赤褐色泥質砂質土 (5YR5/6)
- M-1区 北壁土層断面図 (1/80)

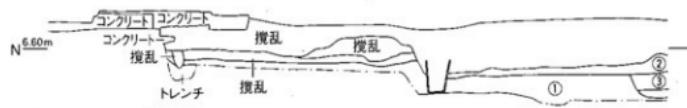


- ① 深褐色シルト質砂質土 (5D6/1)
- ② 深褐色細砂質土 (2.5V7/4)
- ③ 黄白色粗砂層 (2.5Y7/1)
- ④ 黄褐色砂質土 (2.5Y8/1)
- ⑤ 深褐色塊状砂質土 (10YR3/2)
- ⑥ 黄褐色砂質土 (5YR5/1)
- ⑦ 黄褐色砂質土 (2.5Y7/4)
- ⑧ 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)



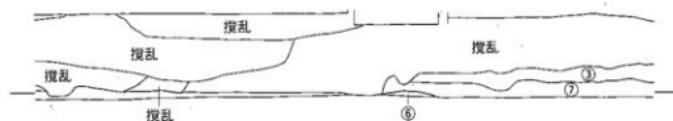
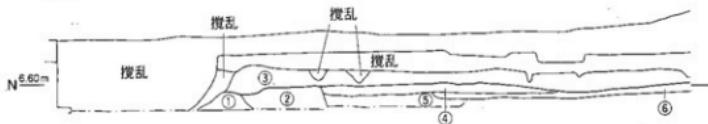
M-2区 北壁土層断面図 (1/80)

第6図 IV区北壁土層断面図



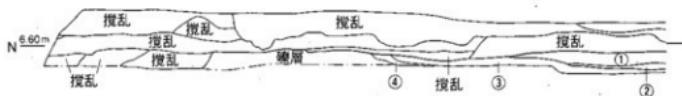
M-2区 施工断面图 (1/80)

- ①灰白色纏混粗砂層
- ②①に同じ（疊少ない）
- ③浅黄色粗砂層（厚い, 5Y7/4）
- ④灰白色シルト質細砂層（7.5Y7/1）
- ⑤灰白色粗砂層（7.5Y5/1）
- ⑥砾層
- ⑦粘土



M-4区 東壁土壠断面図① (1/80)

- ①褐灰色砂質土 (10YR4/1)
- ②灰褐色雜泥砂質土 (7.5YR5/2)
- ③灰黃色砂質土 (2.5Y6/2)
- ④にぶい褐色雜泥砂質土 (7.5YR5/2)
- ⑤明褐色シルト質砂砾土 (7.5YR5/2)
- ⑥暗褐色シルト質砂砾土 (7.5YR4/2)
- ⑦灰褐色雜層土 (7.5YR4/2)

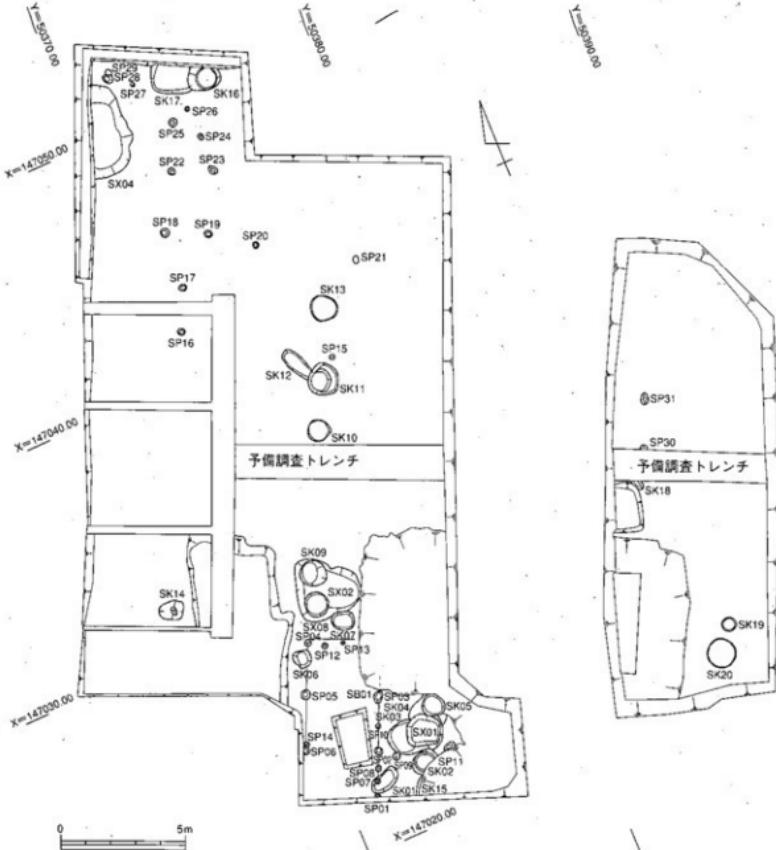


M-4区 東壁土層断面図② (1/80)

①黑褐色砂質土 (2.5Y3/1.整地層)  
②黑褐色砂質土 (2.5Y3/2.整地層)  
③褐色砂質土 (2.5Y2/1.整地層)



第7図 N区東壁土層断面図



第8図 I区構造配置図 (1/200)

### 第3節 I 区の調査

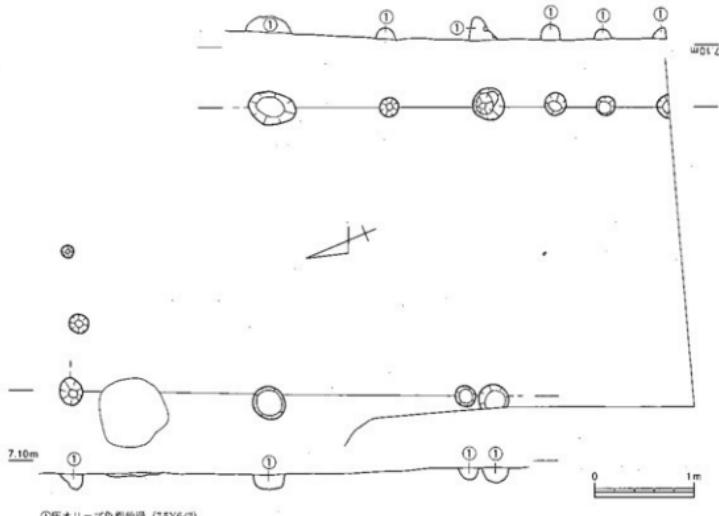
I 区は動物園跡地内で最も南側に位置する区画であり、「栗林分間図」において「萩御門」が所在していた地区に該当する。調査対象面積は930m<sup>2</sup>であるが、調査区中央に大規模な取水装置による擾乱(200m<sup>2</sup>)があるため、遺構面を確認できた範囲は700m<sup>2</sup>である。

以下、遺構別にその概要を記す。

#### SB01 (第9図)

I 区の最も南側で検出した掘立柱建物跡である。主軸方位はほぼ南北方向を示す建物跡である。南側の柱列は調査区外へ延びると考えられるため、全体の規模は不明である。北東隅の柱穴跡については、現代の井戸を構築する際の擾乱によって破壊されていた。桁行1間、梁行3間以上で桁行は約3m、梁行は約2mの柱間距離で6m以上を測る。柱穴跡はいずれも残存状況が芳しくなく、最も深い柱穴跡で約35cm、平均で約20cmの深さを示す。柱穴跡の直径は平均して約30cmを測る。出土遺物は少なく、わずかに土師質土器や陶器片の破片が出土したに過ぎない。

したがって、出土遺物から時期を特定することは困難である。検出した位置関係からみて、「栗林分間図」の「萩御門」西側の南北棟の建物である可能性が最も高いが、元禄年間の「御林御庭之図」にも園内南東隅に掘立柱建物が2棟描かれており、こちらの可能性も考えられる。これについては、第5章に触れている。

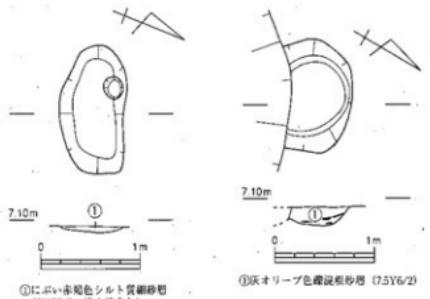


第9図 SB01 平・断面図 (1/50)

SK01 (第10・11図)

I 区の南端で検出した土坑である。形状は楕円形を呈し、規模は長径1.3m、短径0.6m、深さは7cmを測る。出土遺物は細片が多く、図示できるものは少ない。

1は陶器の碗である。釉が灰白色を呈しており、京焼の碗であると思われる。



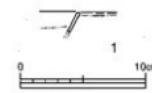
SK02 (第12・13図)

I 区の南端で検出した土坑である。形状は円形を呈していたと考えられるが、東側が現代の擾乱によって破壊されているため、全体の規模は不明であるが、直径1.1m程の土坑であったと考えられる。周辺には同様の規模・形状を呈する土坑が多く検出され、大型の素焼きの壺の底部もしくは破片が多く出土することから、壺を据え付けていた土坑であると考えられる。

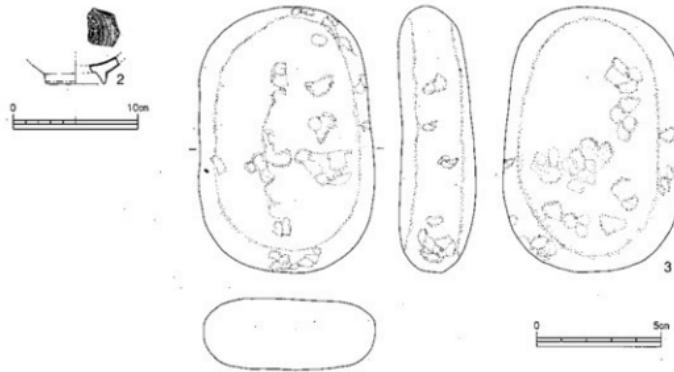
遺物は陶磁器等が出土している。2は陶器の碗の底部である。暗茶色の釉薬の上に刷毛による白色の釉が見られることから肥前系、おそらく唐津産の刷毛目碗であると思われる。3は石錘もしくは磨石と考えられる石器である。砂岩製である。

第10図 SK01平・断面図  
(1/50)

第12図 SK02平・断面図  
(1/50)



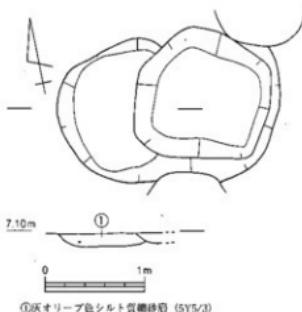
第11図 SK01  
出土遺物実測図



第13図 SK02出土遺物実測図

### SK03 (第14図)

I 区の南側で検出した土坑である。形状は円形を呈していたと考えられるが、他の土坑2つと重なっており、全体の規模は不明である。直径約1.4m程の土坑であったと考えられる。やはり、大型の甕が出土していることから、これを据え付けていた土坑であると考えられる。遺物は細片以外は出土しなかった。



第14図 SK03平・断面図 (1/50)

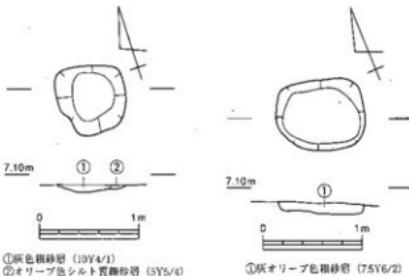
### SK04・05 (第15図)

I 区の南側で検出した土坑である。SK03と重なり合っており、全体の規模は不明である。おおよその規模・形状から見て大形の甕を据え付けていた土坑であると考えられるが、SK04・05が廃棄されて後にSK03が掘削されたものである。

SK05からは土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。4は土師質土器の高杯の杯部である。底面中央部に凹部があり、ここに脚が付くものと思われる。精緻な胎土できめ細かい。また、焼成後に墨で絵を描いている。杯に、輝く宝珠がのっている構図である。5は土師質土器の甕、6・7は備前産の捕鉢、8は備前産の徳利である。9は陶器の徳利である。10は陶器の燭台と思われる。11は染付碗の底部、12・13は染付碗である。いずれも肥前系と考えられる。14は大棟の飾り瓦の一つ、小菊瓦である。15は巴文軒丸瓦、16は丸瓦の広端部である。

### SK06 (第16図)

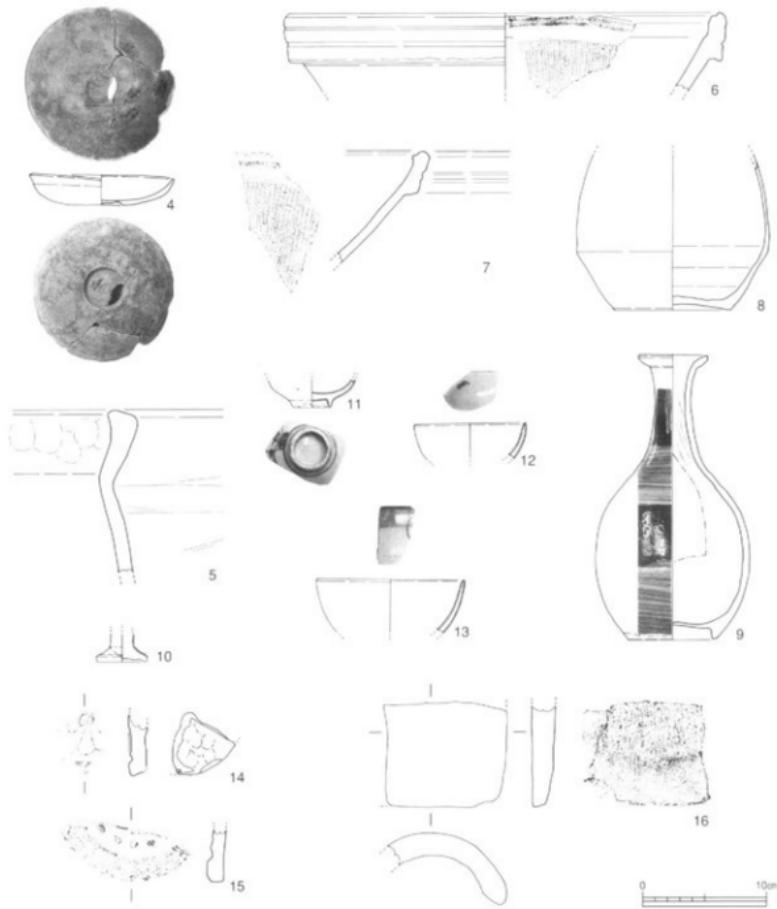
I 区の南側で検出した土坑である。形状はほぼ円形を呈し、直径約0.7mを測る。SB01の西側の柱穴ラインと重なっている。柱穴とは同じ埋土であるが、遺物が全く出土していないので、前後関係は不明である。



### SK07 (第17図)

I 区の南側、SB01のすぐ北側で検出した土坑である。形状はやや歪な円形を呈する。長径0.9m、短径0.7mを測る。深さは10cmと非常に浅く、遺物は出土しなかった。すぐ北側に同様の形状・規模を呈するSK08があり、似たような機能を持つ土坑であると考えられる。

第16図 SK06平・断面図 第17図 SK07平・断面図 (1/50)



第15図 SK05出土遺物実測図

#### SK08（第18・19図）

I区の南側で検出した土坑である。SK07のすぐ北側に位置しSK09と並んでいる。形状はほぼ円形を呈し、直径約1mを測る。深さは約25cmで土師質土器や陶磁器が出土している。

17は土師質土器の杯の底部である。18は染付の酒杯の体部、19は染付碗の体部である。外面には松の文様が描かれている。

### SK09 (第20・21図)

I 区の南側、SK08のすぐ北側で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径約1.1m、深さは約20cmを測る。土師質土器や陶磁器が出土している。

20は土師質土器の小皿である。21・22はいわゆる焰縁と呼ばれている瓦質土器の鍋である。23は陶器の人形と思われる。出土した部分は右手と衣の一部でその様子から見て布袋を象ったものと考えられる。24は陶器の碗である。外面に草木文が認められ、唐津産であると考えられる。25は陶器の碗である。黄色の釉が掛かり、京焼と考えられる。内面に焼成後に描いたと思われる草木文があり、高台内部には「小松吉」という刻印が認められる。26～29は染付の碗である。28の外面には松葉文が認められる。いずれも肥前産と考えられる。30は丸瓦である。いわゆる玉縁式で内側に布目がわずかに認められる。31は砥石と考えられる石器である。長期にわたって使用されたものらしく、中央部がかなり磨耗している。

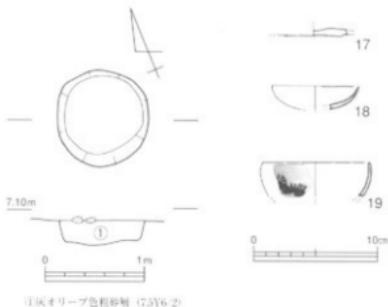
### SK10 (第22図)

I 区のはば中央部で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径約0.9m、深さは約25cmを測る。遺物は団化し得るものは出土しなかったが、土師質土器の破片が出土している。

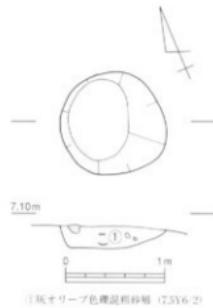
### SK11 (第23・24図)

I 区のはば中央部、SK10の北側で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径約1.3m、深さ約30cmを測り、SK12の東部を破壊している。土師質土器や陶磁器の破片が出土している。

32は陶器の大皿の底部である。白色の化粧土が見られることから、唐津産と考えられる。33は青磁である。形状からみて、香炉の口縁部と思われる。



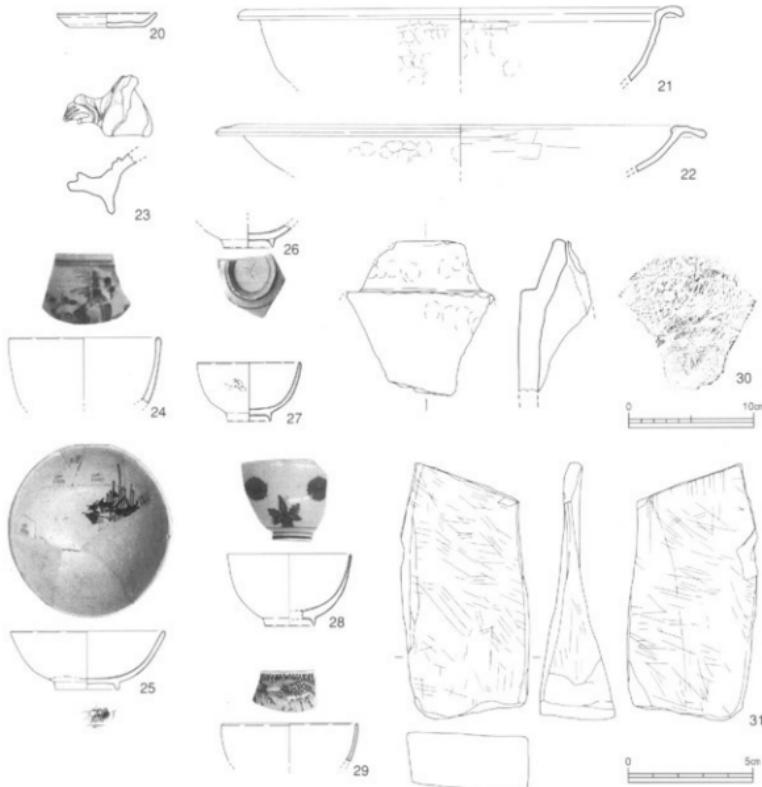
第18図 SK08平・断面図 第19図 SK08  
(1/50) 出土遺物実測図



第20図 SK09平・断面図 (1/50)

### SK12 (第25図)

I 区のはば中央部で検出した土坑である。SK11と重なりあっている長楕円形を呈する土坑である。南側をSK11によって破壊されているため、全体の規模は不明であるが、幅は約0.6mを測る。深さ約25cmで土師質土器や陶磁器の破片等が出土しているが、団化し得るものはなかった。

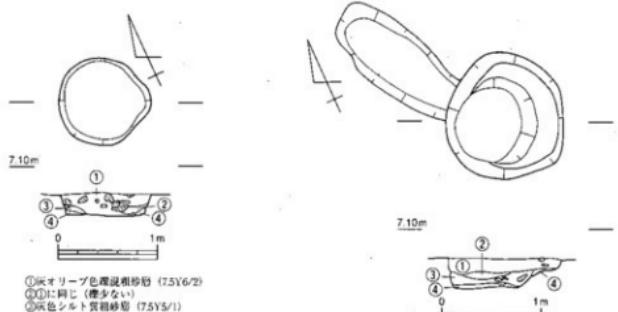


第21図 SK09出土遺物実測図

#### SK13（第26・27図）

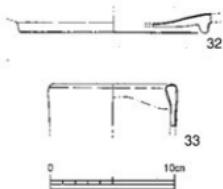
I区のほぼ中央部、SK11の北側で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径約1.1m、深さ10cmを測る。非常に浅い土坑であり、素焼きの大型の甕の破片が出土していることから、甕を据え付けた土坑であると考えられる。

34は陶器の灯明受皿である。胎土・焼成から見て備前産と考えられる。35も備前産の灯明皿と考えられる。36は肥前産と思われる染付碗の口縁部である。37は鉄製の釘と思われる。

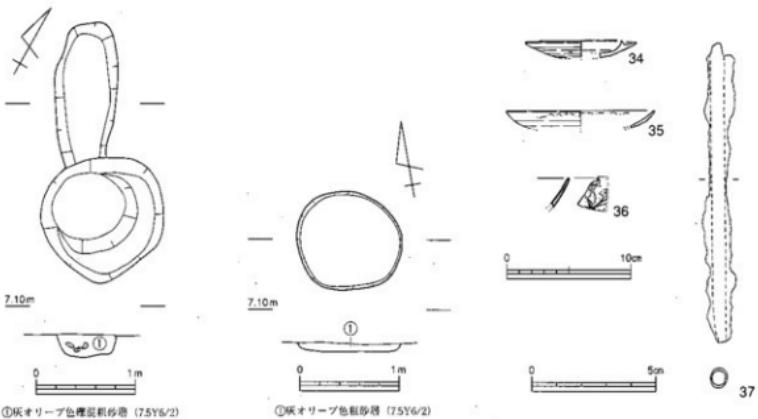


第22図 SK10平・断面図 (1/50)

第23図 SK11平・断面図 (1/50)



第24図 SK11出土遺物実測図



第25図 SK12平・断面図(1/50) 第26図 SK13平・断面図(1/50) 第27図 SK13出土遺物実測図

SK14 (第28・29図)

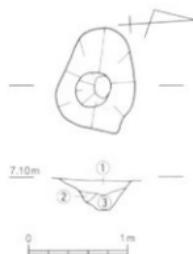
I区の西側で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径約1m、深さ30cmを測る。土師質土器や陶磁器が出土しているが、大型の壺の破片が認められることから、壺を据え付けていた土坑と考えられる。

38は染付の碗である。39は白磁の皿である。40は円碟である。全体に擦痕が認められる。41は釘と思われる鉄製品である。

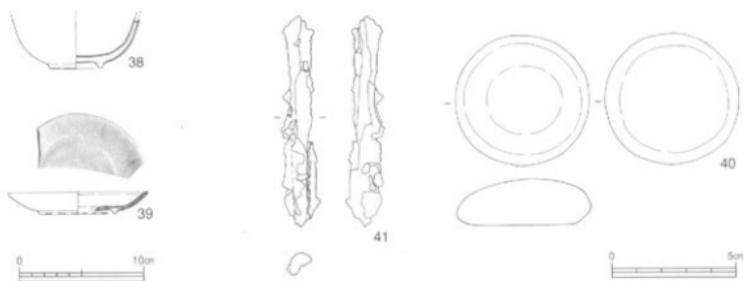
SK16 (第30)

I区の北端で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径1.2m、深さ40cmを測る。他の土坑と同じく、大型の壺の破片が多く出土していることから、壺を据え付けていた土坑と考えられる。

42は土師質の大壺の口縁部である。



第28図 SK14 平・断面図 (1/50)  
 ① 染付青色釉ト質粗粒層 (25N4-2)  
 ② 白磁白釉色 5丁目細砂層 (25Y4-6)  
 ③ 細灰色シート質粗粒層 (25E-1)



第29図 SK14出土遺物実測図

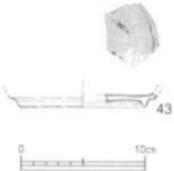


第30図 SK16出土遺物実測図

### SK17 (第31図)

I 区の北端で検出した土坑である。東側はSK16、北側は調査区外へ延びるため、全体の規模は不明である。土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。

43は染付の皿の底部である。肥前産と考えられる。

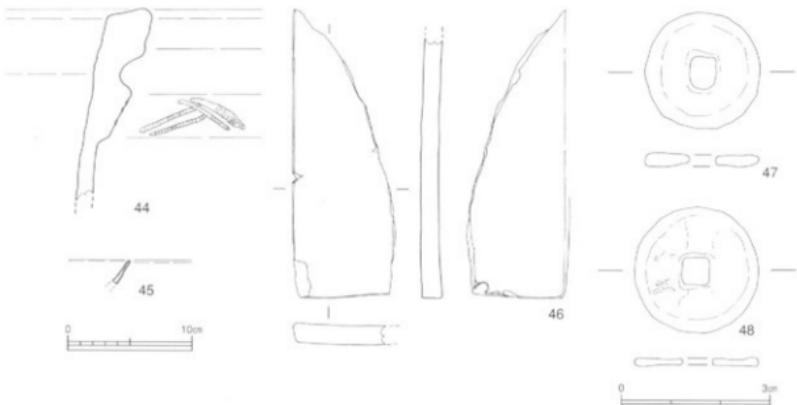


第31図 SK17出土遺物実測図

### SK19 (第32図)

I 区の東南隅で検出した土坑である。大型の土師質の甕が残っていた。埋土中からは土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。

44は甕の口縁部である。45は陶器の碗の口縁部である。46は平瓦の一部である。47・48は錢貨である。判読し難いが、いずれも寛永通宝であろう。

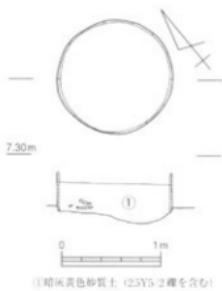


第32図 SK19出土遺物実測図

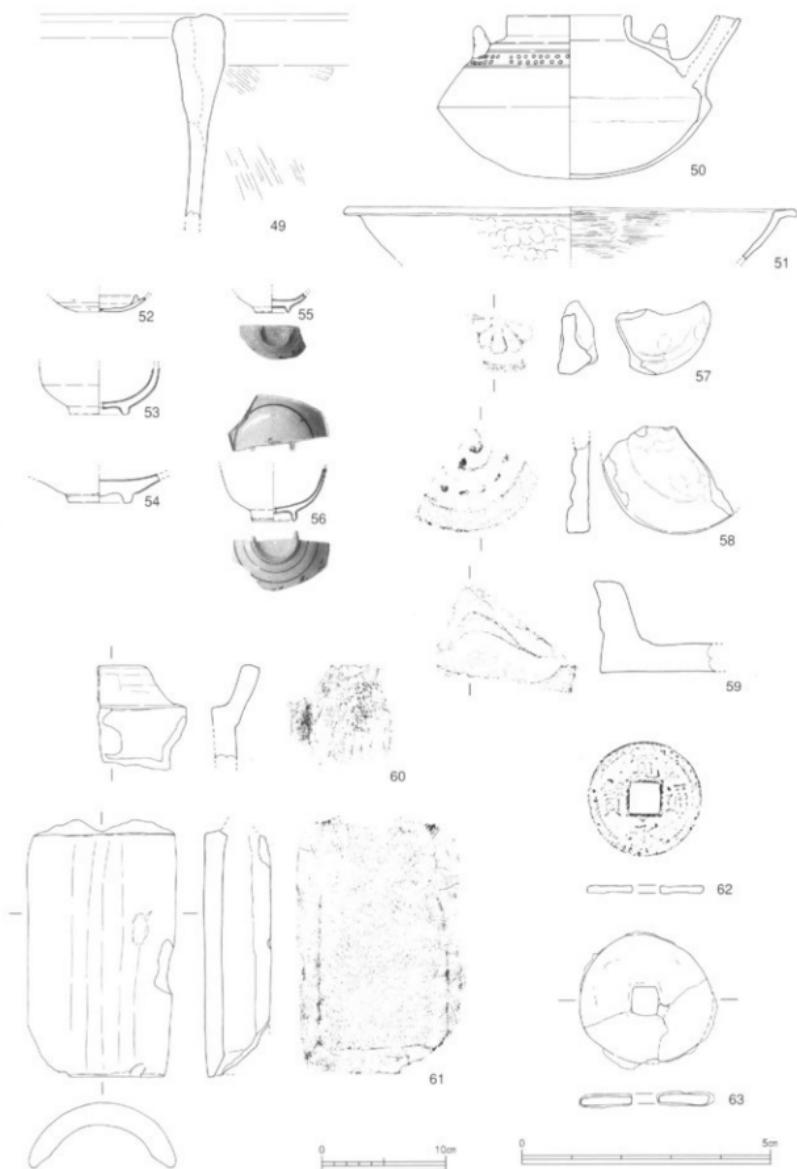
### SK20 (第33・34図)

I 区の東南隅、SK19の南側で検出した土坑である。SK19よりも大きな甕を据えていたもので、この甕も残存していた。埋土中からは、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。

49はこの甕の口縁部である。50は瓦質土器の土瓶である。51は瓦質土器の鍋、焙烙である。52は備前産の灯明受皿である。53は陶器の碗で唐津産と考えられる。54は陶器の皿で唐津産であろう。55・56は染付の碗の底部である。いずれも肥前産と考えられる。57は大棟の飾りに使われる小菊文瓦、58は巴文軒丸瓦である。59は鬼瓦の一部で60・61は丸瓦である。いずれも有段式のもので60は内部にヘラみがきが認められる。62・63は錢貨で62は寛永通宝であるが、63は判読不能である。



第33図 SK20平・断面図  
(1/50)

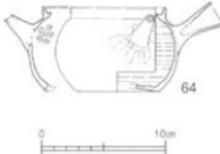


第34図 SK20出土遺物実測図

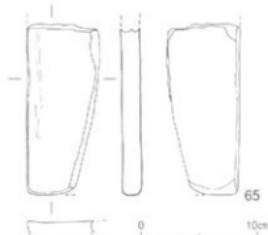
### SP16・27 (第35・36図)

I 区の西北部で検出した柱穴である。これらはほかにも十数個の柱穴を検出しているが、明確に建物を構成する柱穴は確認し得なかった。これらの柱穴は「栗林分間図」中では南端の建物域と園地、「藪・畠」を区画する部分にあたり、柵もしくは塀のような施設を構成していた可能性も考えられる。柱穴から出土した遺物はほとんどが細片であったが、2点ほど図化した。

64は陶器の急須である。明るい橙色を呈する釉が前面に掛かり、吉金窯跡や谷遺跡等東讃地域で生産されたものではないかと考えられる。65は平瓦である。



第35図 SP16出土遺物実測図



第36図 SP27出土遺物実測図

### SX01 (第37図)

I 区の北東隅で検出した不明遺構である。不定形を呈するが、底の断面形も安定しておらず、人為的な遺構であるかどうかの判断がつかかねる。

埋土中からは土師質土器や陶磁器、瓦等が出土している。

66は染付の皿の底部である。いわゆる蛇の目凹型高台を持ち、19世紀後半以降の所産と考えられる。



第37図 SX01  
出土遺物実測図

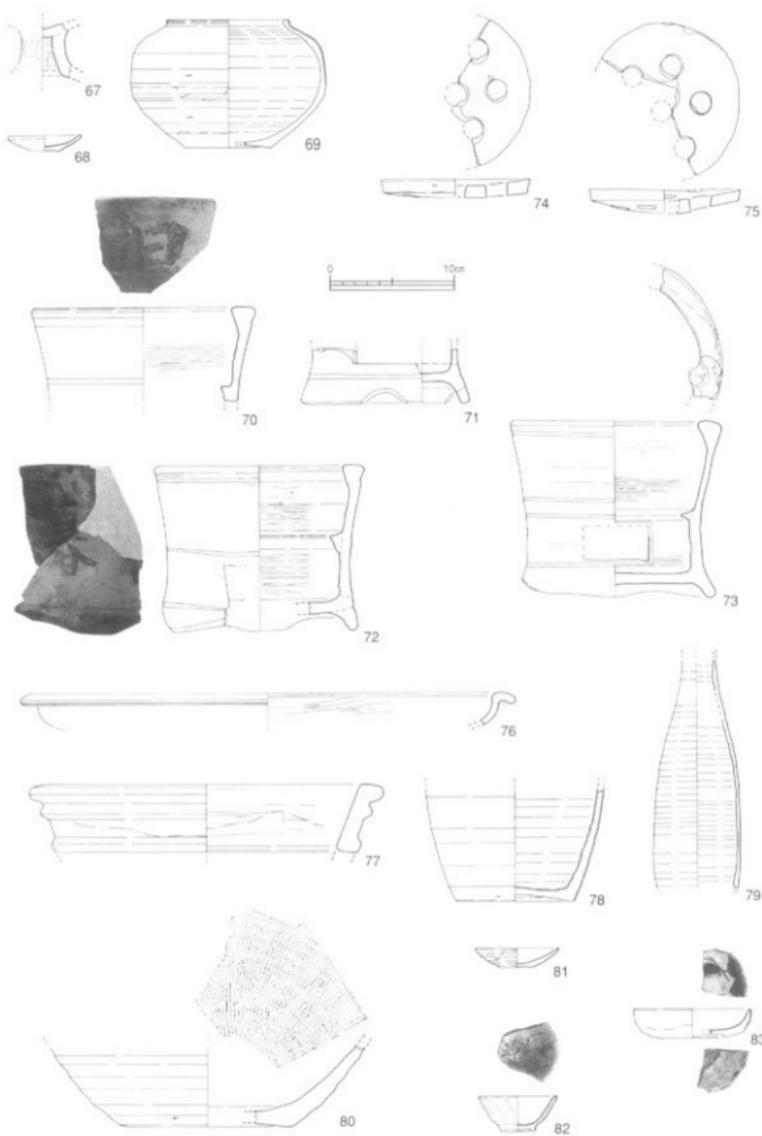
### SX03

I 区の南西部で検出した石組の遺構である。やや歪な長方形を呈するが、中央部の上部がコンクリート基礎にあたるため、一部しか調査し得なかった。安山岩の自然の板石を組み合わせて、積上げおり丁寧な造りをしている。長さは約3m、幅は約2m、深さは1m以上で、北側は階段状になっており、その他は基本的に垂直に近い状態で石材を積上げている。埋土は黒褐色の粗砂混土であり、埋土中からは陶磁器や瓦のほか、ガラス製品等多量の遺物が含まれていた。ガラス製品には明治以降のものと確認されるものもあり、埋没時期は新しいと考えられるが、構築時期はこれよりも遡るものと思われる。構造的には後述するⅢ区のSX07とよく似ており、取水機能をもった遺構と考えられる。「栗林分間図」にはこのような遺構の記載はないが、Ⅲ区のSX07も同様に記載がなく、一概に新しい遺構であると断定はできない。ここでは、構築時期は近世後半まで遡るものと考えておきたい。今後、類似遺構に関する情報の集積に期待したい。

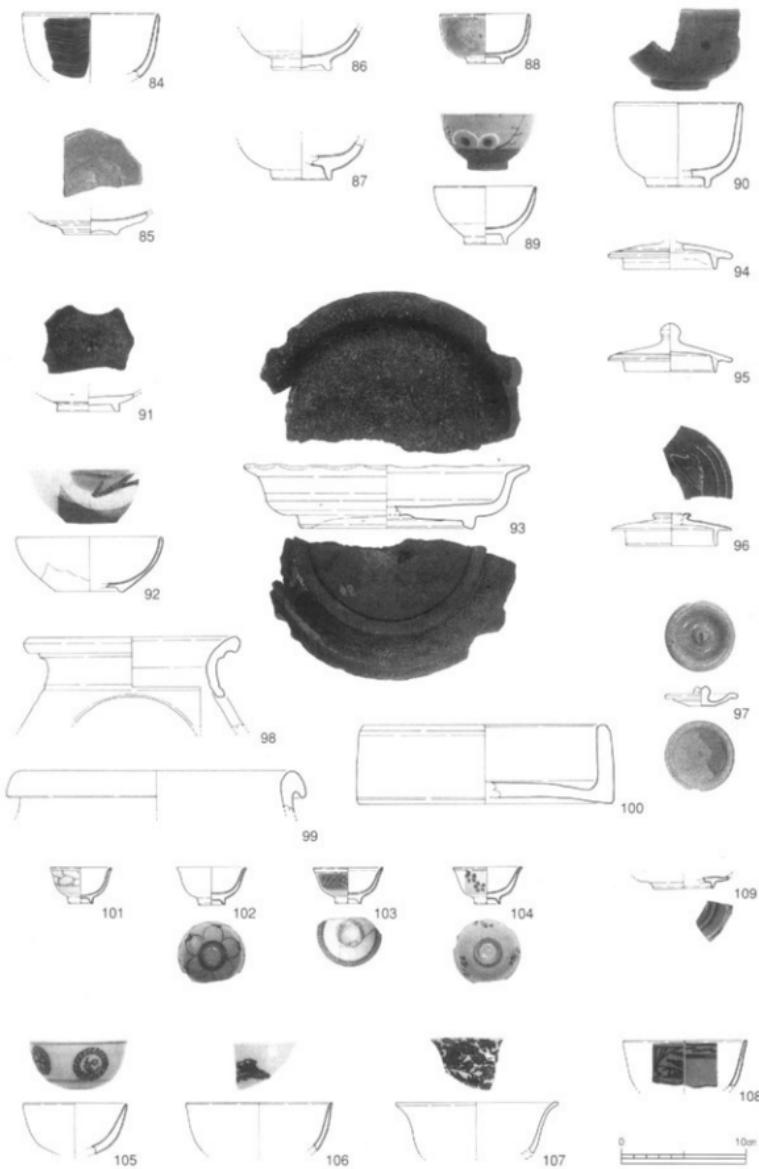
### その他の遺物 (第38~43図)

第38図~第43図は I 区の包含層から出土した遺物である。68は土師質土器の小皿である。69は土師質土器の土瓶である。70~75は火鉢及びさなである。特に70・72には墨書で文字が書いてある。70は上半分が「日」と読める。72は「暮」の文字が読める。76は瓦質土器の鍋、焼格である。78~80は備前産の陶器である。80は擂鉢である。82は陶器の酒盃で内面には草木文が認められる。83は陶器の小

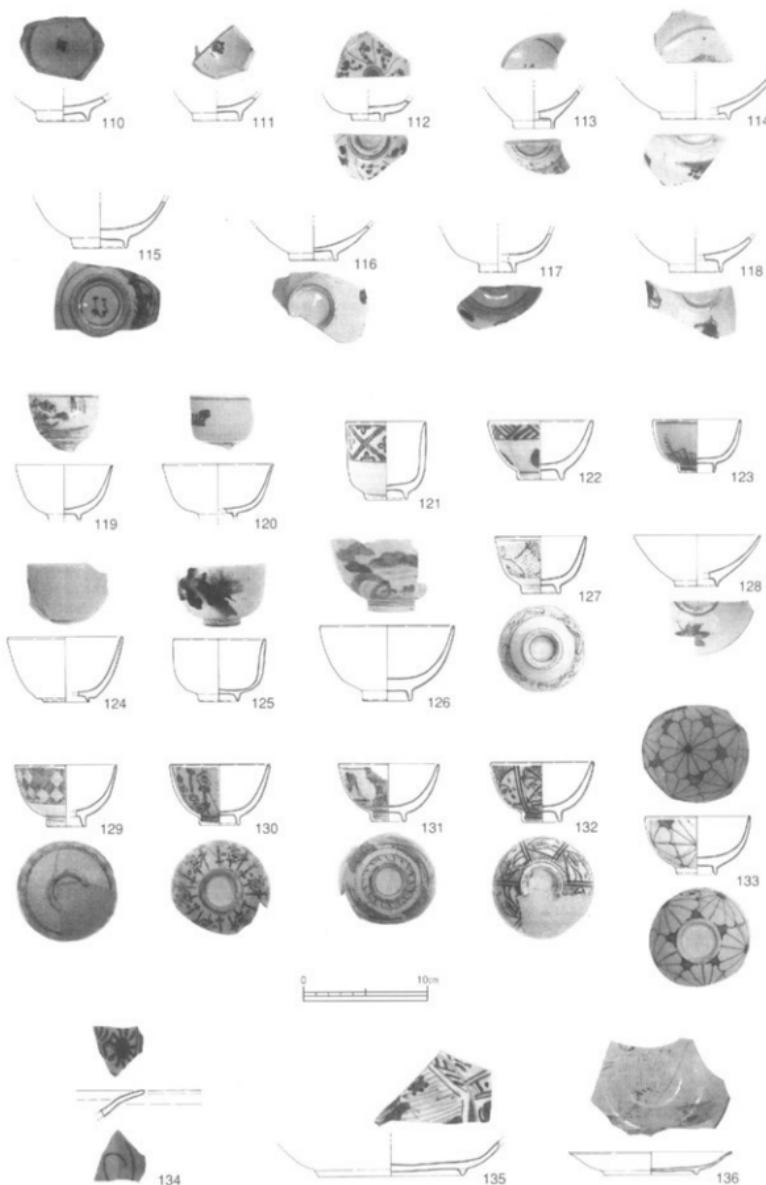
皿で外面は多面体を呈する。内面には緑色の釉が一部に掛り、織部風である。84～90は陶器の碗である。91は陶器の皿、92は鉢である。93は陶器の大型の鉢で、唐津産と考えられる。94～97は陶器のつまみ付きの蓋である。97は下部が多面体を呈する。100は窯道具の一種と考えられる。101～104は染付の酒盃である。105～123、125～133は磁器の碗である。ほとんどが染付であり、肥前系と考えられる。124は陶器の碗である。134～140は磁器の皿である。139は色絵で鶴亀文が描かれるが、時期的には新しい。141は染付の鉢、142は徳利である。高台内部に「幹山」の号が見られる。143・144は染付の蓋である。144は内面見込に松竹梅文が認められる。145は白磁の人形である。鶏を精密に象ったものである。146・147は有段式の丸瓦である。148～150は平瓦である。150は表面にカーボンを吸着させた焼し瓦で、「博物館」の刻印がある。これは明治30年前後に園内にあったもの（現在の商工奨励館）に使用されていたものである。151・153・154は砥石と考えられる石製品である。長期にわたり使用されたもので一面の中央がかなり磨耗している。152は寛永通宝である。155・157は煙管である。155は吸口部のみ、157は一体型のものである。156は鉄釘である。159はふすまの把手の飾り金具である。



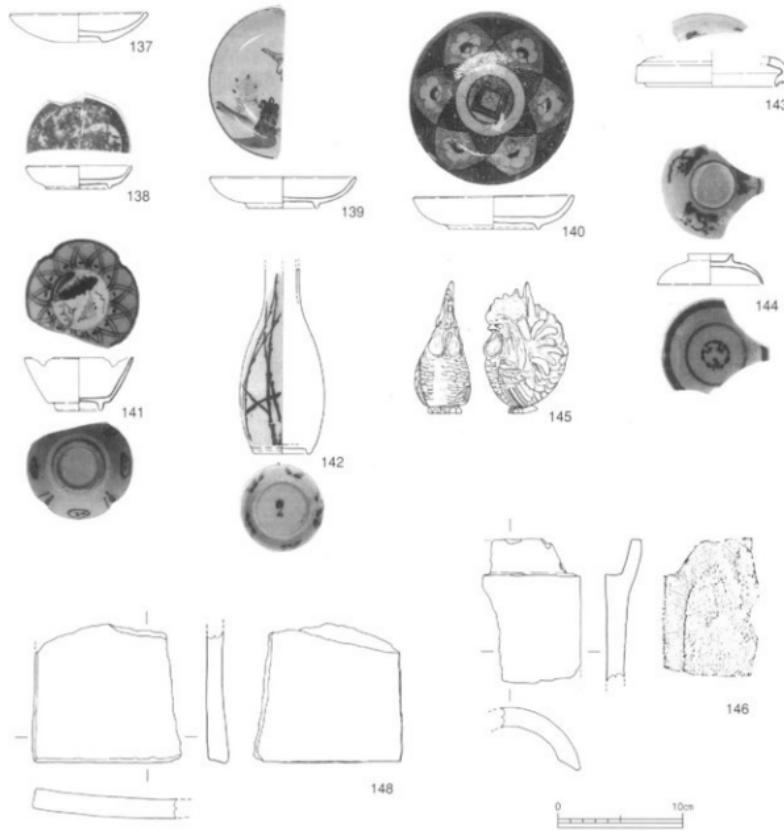
第38図 I区包含層出土遺物実測図①



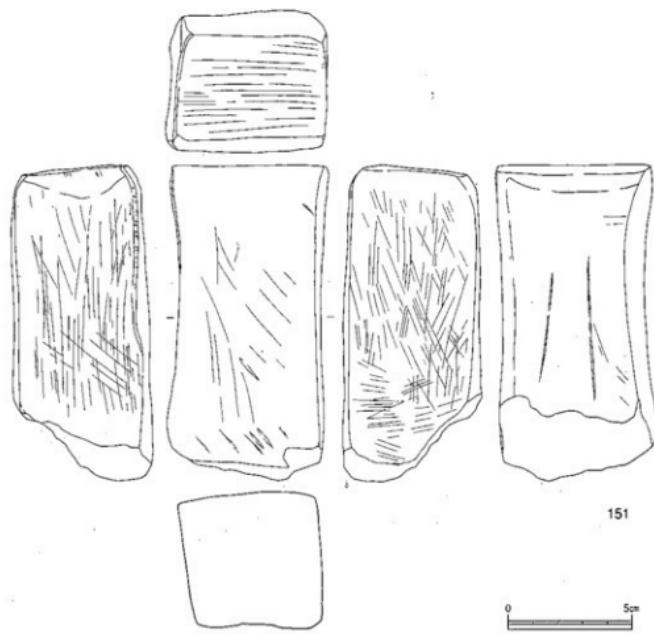
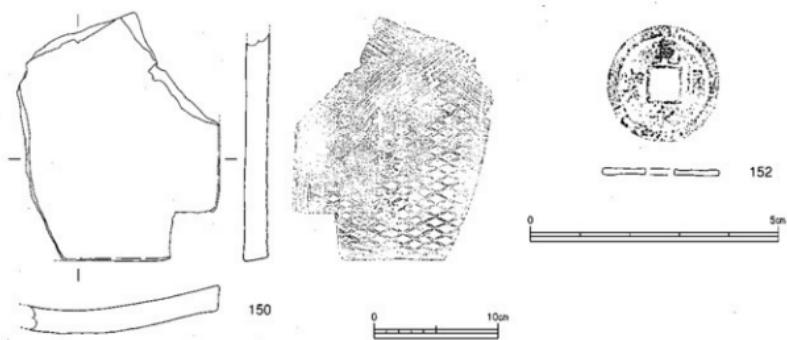
第39図 I区包含層出土遺物実測図(②)



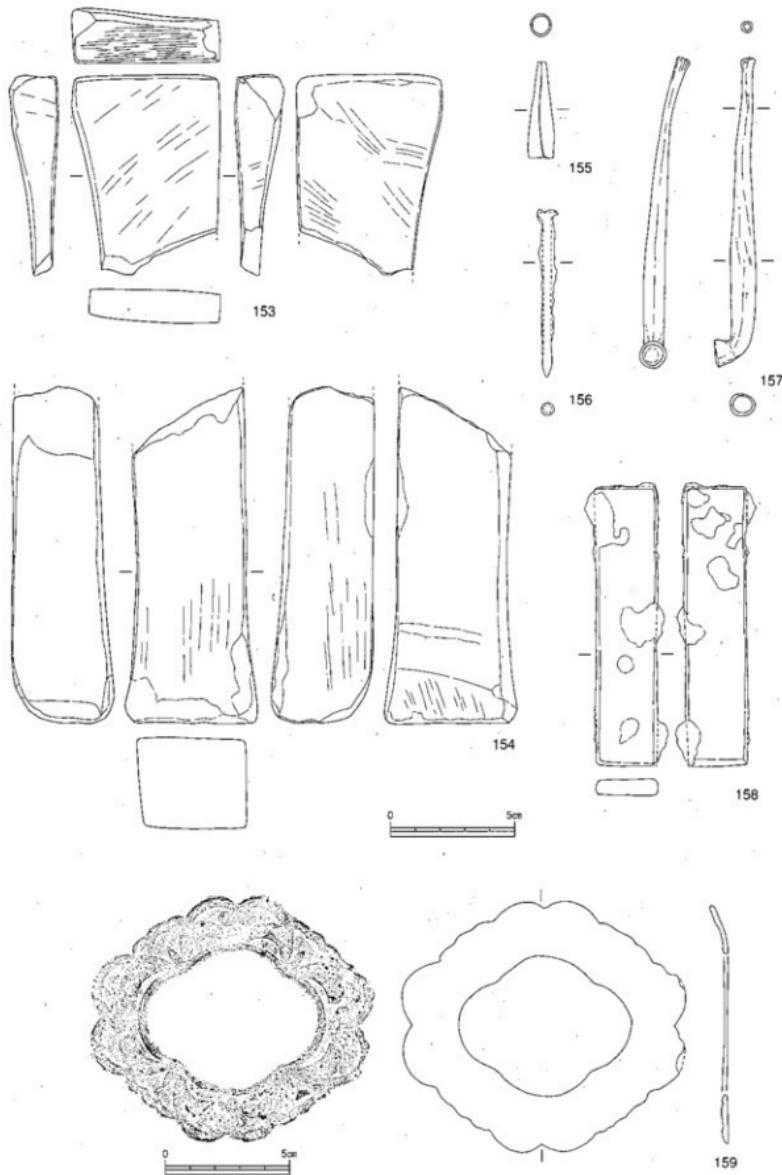
第40図 I区包含層出土遺物実測図③



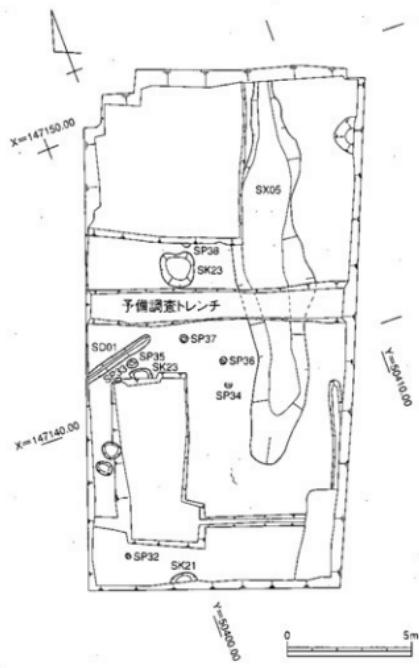
第41図 I区包含層出土遺物実測図④



第42図 I区包含層出土遺物実測図⑤



第43図 I区包含層出土遺物実測図⑥



第44図 II区造構配置図 (1/200)

## 第4節 II区の調査

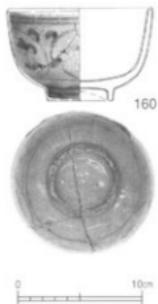
II区は動物園跡地内の中央やや南寄りに位置する区画であり、現在の花園亭のすぐ東側に当り「栗林分間図」において「馬場」との境界に位置する。調査対象面積は200m<sup>2</sup>である。

以下、遺構別にその概要を記す。

### SD01 (第45図)

II区の中央やや西寄りで検出した溝状遺構である。調査区中央やや西寄りの部分から西壁やや南寄りの部分へと流れ、調査区外へ延びる。幅0.3m、深さ20cmを測る。出土遺物は少量であるが、土師質土器・陶磁器が出上している。

160は陶器の碗である。唐津産と考えられる。

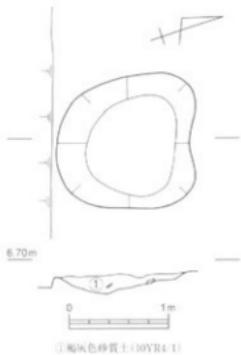


第45図 SD01  
出土遺物実測図

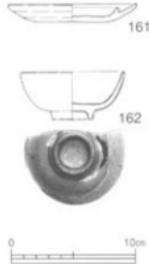
### SK23 (第46・47図)

II区の中央やや北寄りで検出した土坑である。形状はほぼ円形を呈し、直径1.3m、深さ20cmを測る。すり鉢状の断面形を呈し、埋土中からは土師質土器や陶磁器、瓦類が出上している。

161は備前産の灯明受皿である。162は染付の碗である。



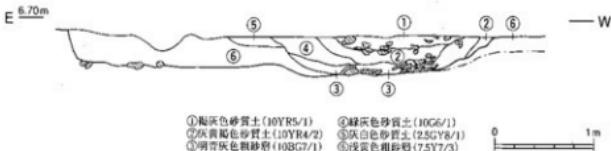
第46図 SK23平・断面図 (1/50)



第47図 SK23出土遺物実測図

### SX05 (第48～57図)

II区の東側で検出した南北に長大な遺構である。調査区南寄りの部分から北壁に及び、調査区外へも延びる。幅は最大4.1m、長さは検出した部分で約15mを測る。断面形は緩やかなすり鉢状を呈し、中央部が最も深い。深さは最深部で40cmを測る。埋土中からは土師質土器や陶磁器のほか、大量の瓦類が出上している。これらの瓦については、復元作業を経た後も完全な形に復元されるものがほとんどなかったため、破損した瓦類を一括して投棄したものと考えられる。したがって、本遺構は破損した瓦や不要になった陶磁器等を投棄した廃棄遺構と考えられる。



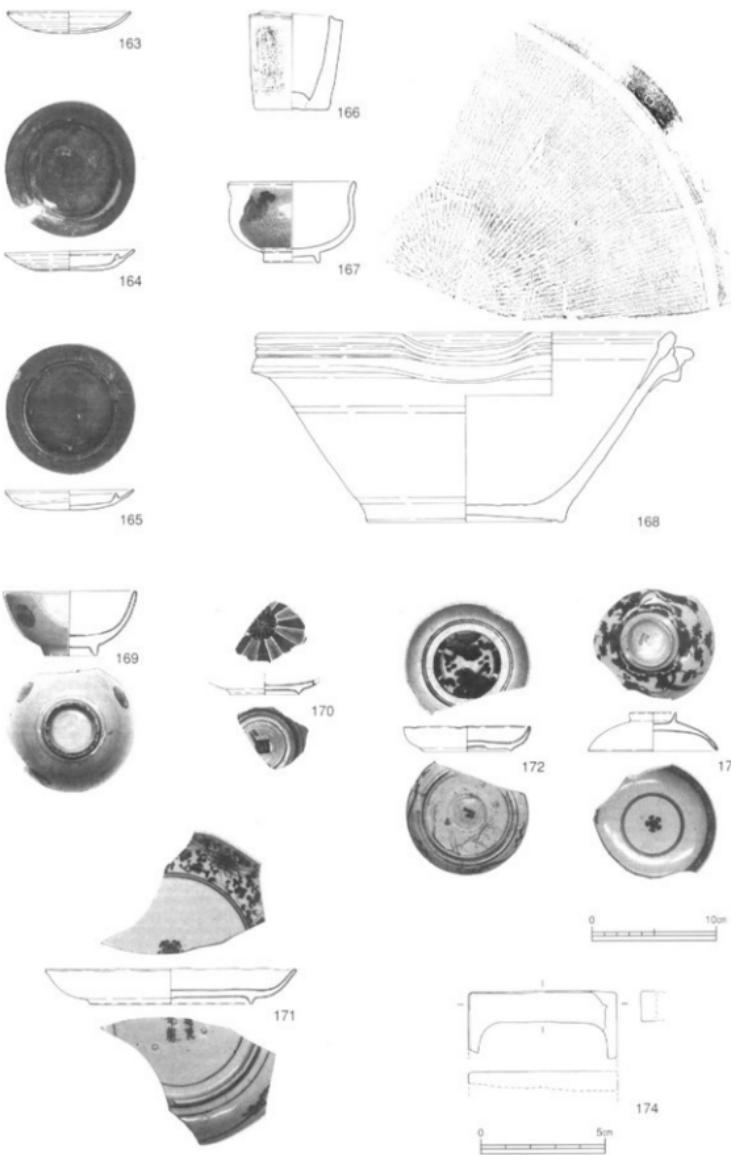
第48図 SX05断面図 (1/50)

163は備前産の灯明皿で口縁部に煤が付着している。164・165は備前産の灯明受皿である。166は土師質の焼塩壺である。外面に「泉湊伊織」の刻印があり、これは天文年間に壺焼塩を創始したと伝えられる藤左衛門系の壺塩屋が使用するもので、18世紀頃のものと考えられる。167は陶器の碗である。168は備前産の擂鉢である。169は染付の碗である。170～172は染付の皿である。171の見込には五弁花文、高台内部には「大明年製」の銘が認められる。173は染付の蓋で内面見込に五弁花文が描かれている。174は硯の上部と考えられる石製品である。

175～181は巴文軒丸瓦である。珠文の数や尾の巻き方に違いがあり、時期の異なる瓦片が一括して廃棄されていたことが推測される。182～185は丸瓦である。いずれも有段式で183のように屋根に取り付ける際の孔があるものもある。186～206は軒平瓦である。基本的には唐草文及びその変形である。文様は全体ではなく中央の概ね2/3程度である。中心飾りには三つ葉状のもの（186～188）、花状のもの（190～192）、逆ハート型（197～199）、宝珠状のもの（201・202）等様々な種類のものが認められる。205は軒棟瓦の一部で巴文を持つ。207～216は平瓦である。217は軒棟瓦である。218～222は棟瓦の一種であると考えられる。

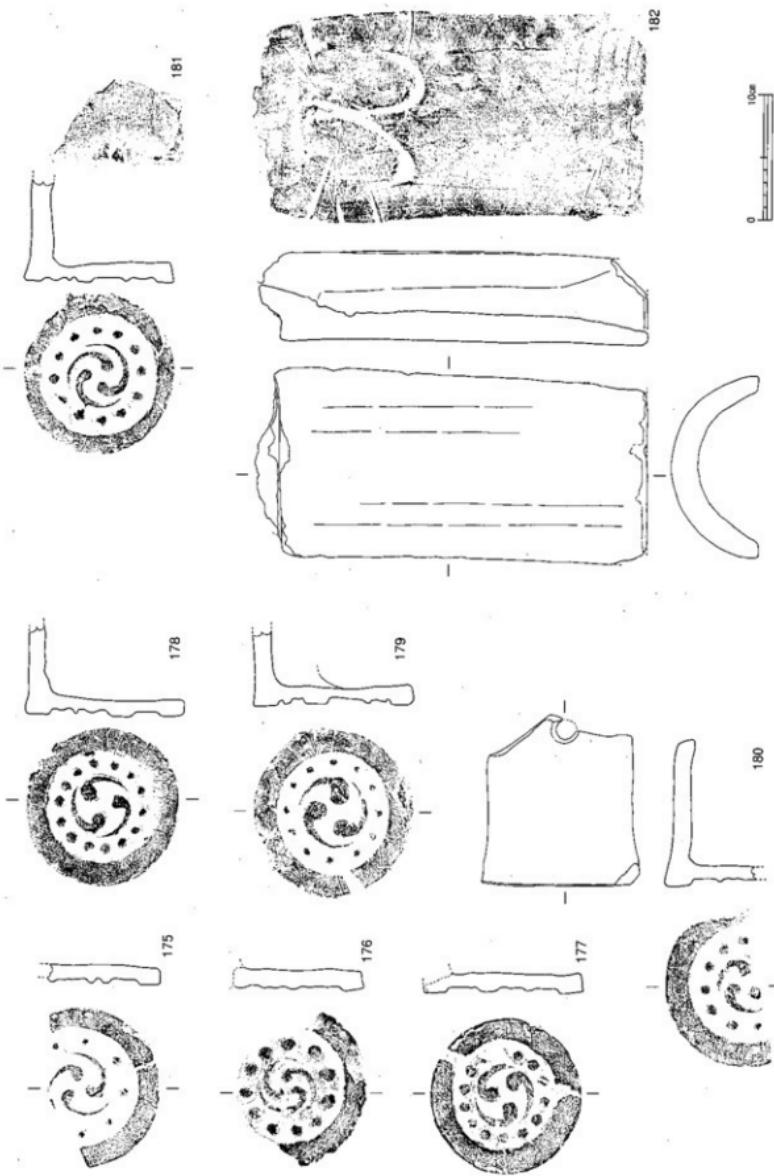
#### その他の遺物（第58図）

第58図は、II区の包含層から出土した遺物である。223は備前産の灯明受皿である。224・225は染付の皿である。224の見込には草木文が描かれる。226は巴文軒丸瓦である。

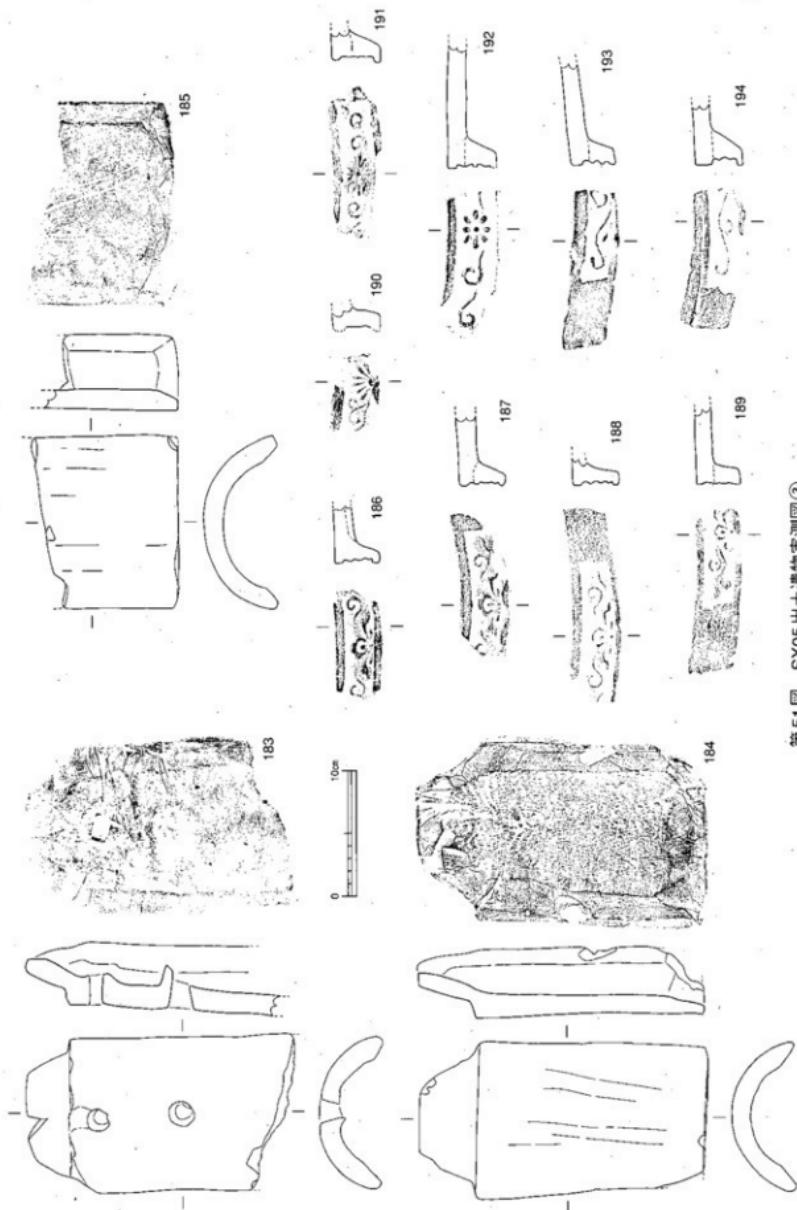


第49図 SX05出土遺物実測図①

第50图 SX05出土遗物实测图(2)



第51図 SX05出土遺物実測図③





195



201



196



202



197



203



198



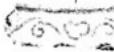
204



199



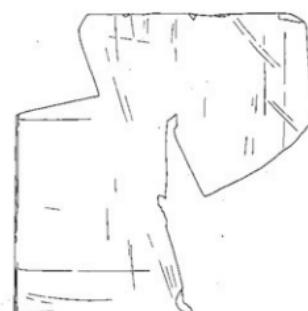
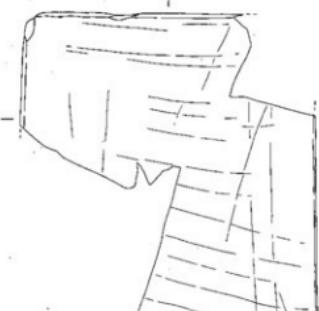
205



200



206

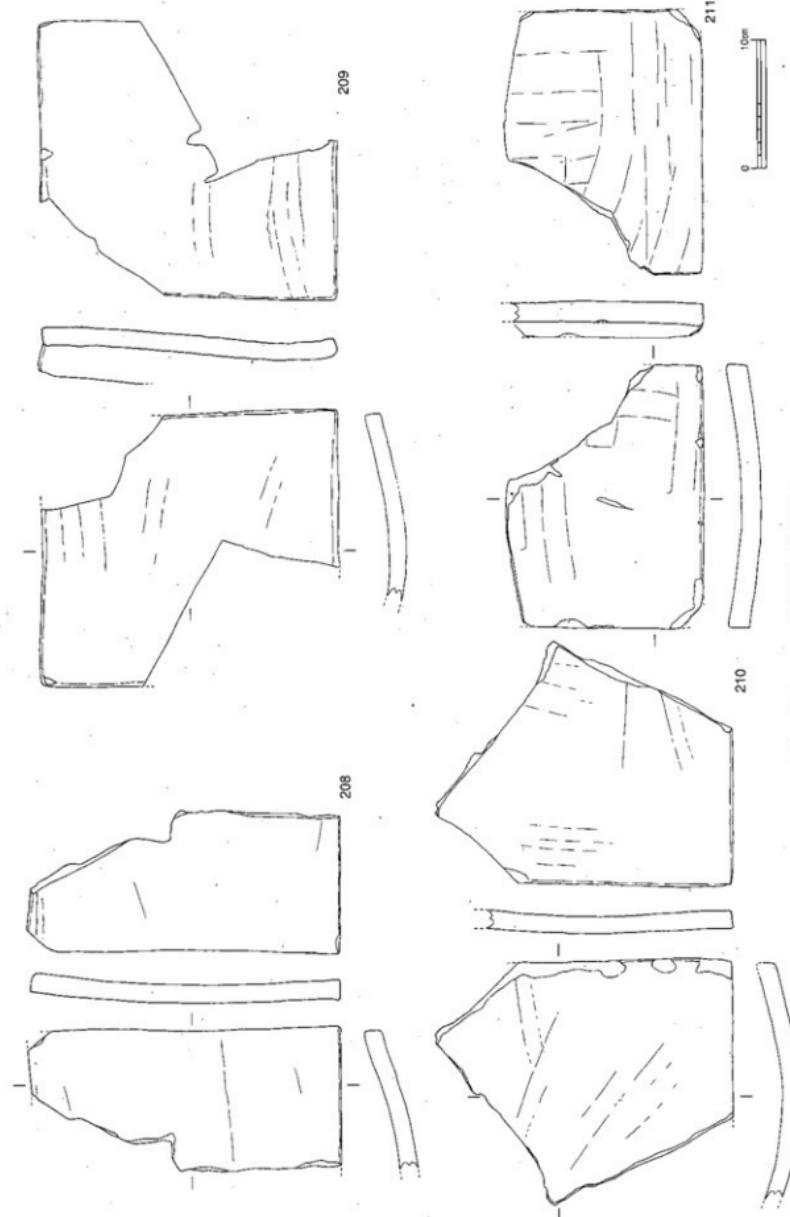


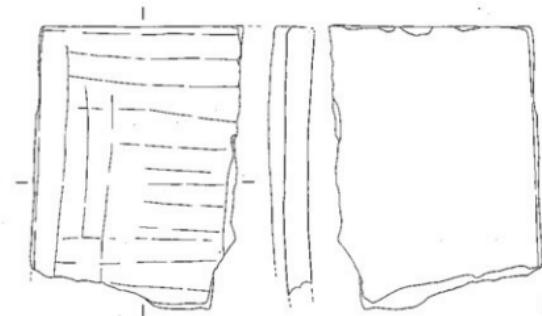
207



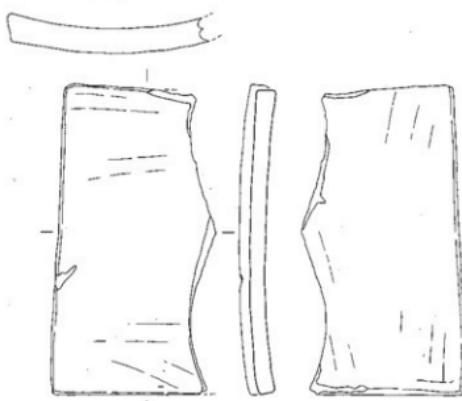
第52図 SX05出土遺物実測図④

第53図 SX05出土遺物実測図⑤

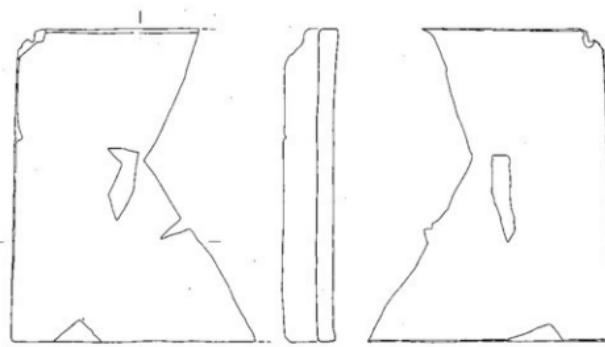




212



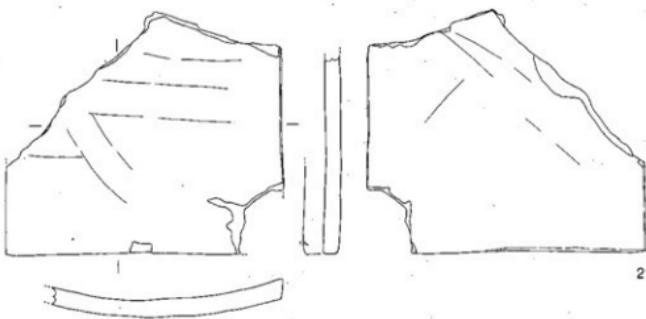
213



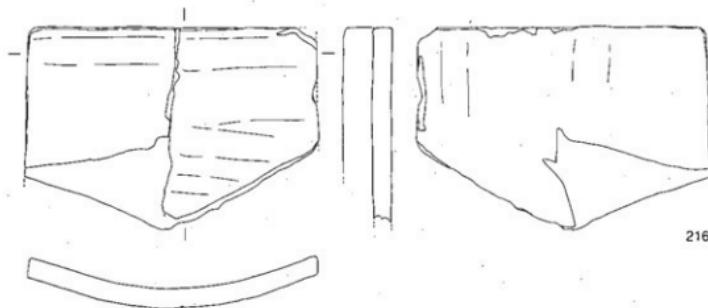
214

0. 10cm

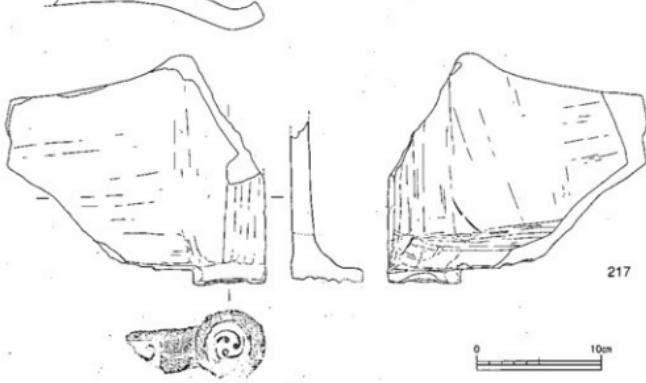
第54図 SX05出土遺物実測図⑥



215



216

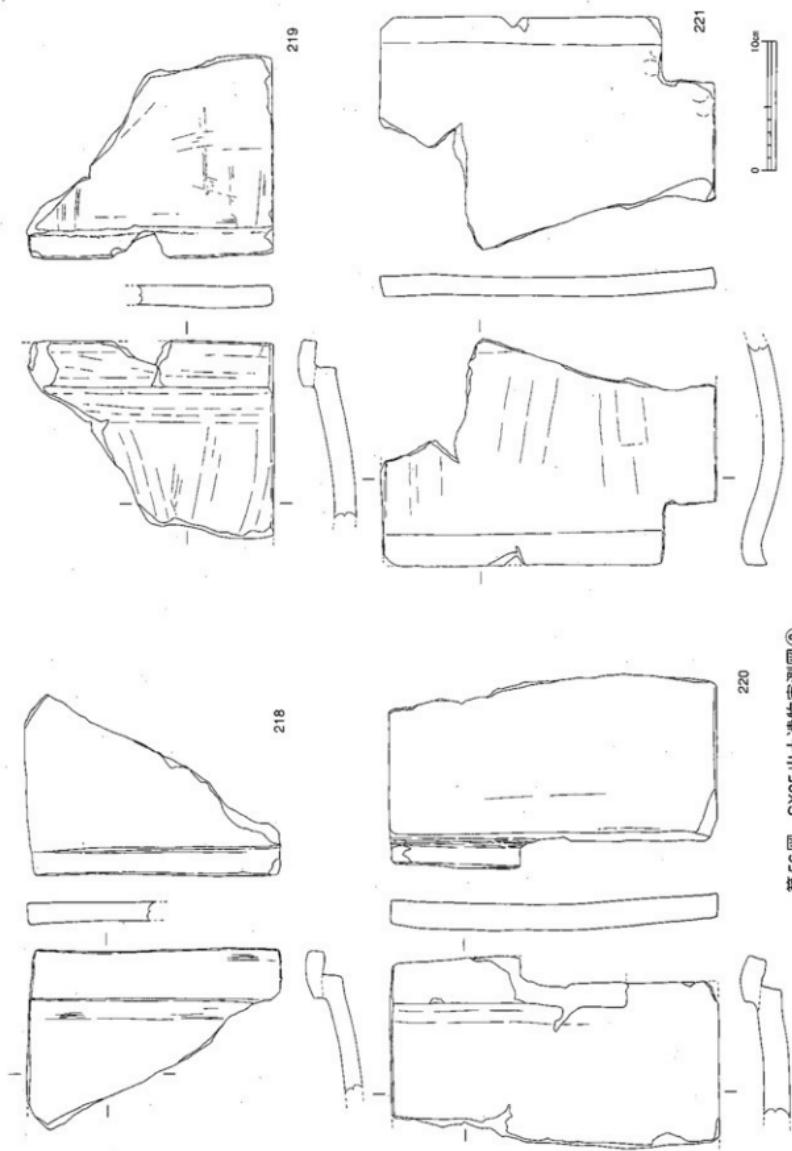


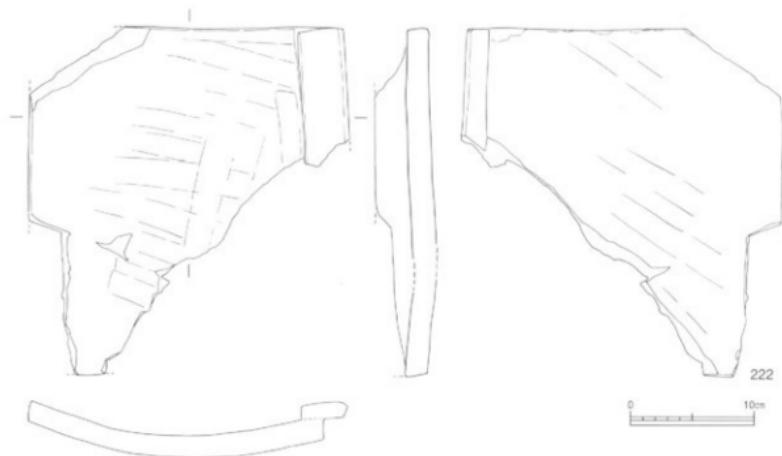
217



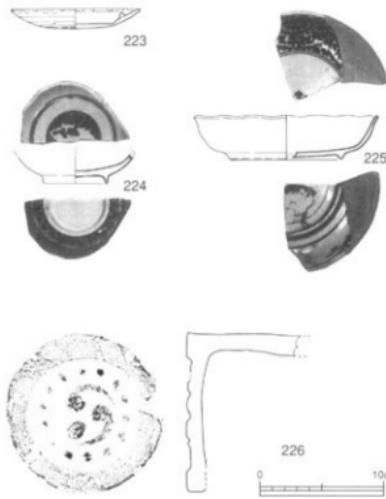
第55図 SX05出土遺物実測図⑦

第56圖 SX05出土遺物實測圖(8)

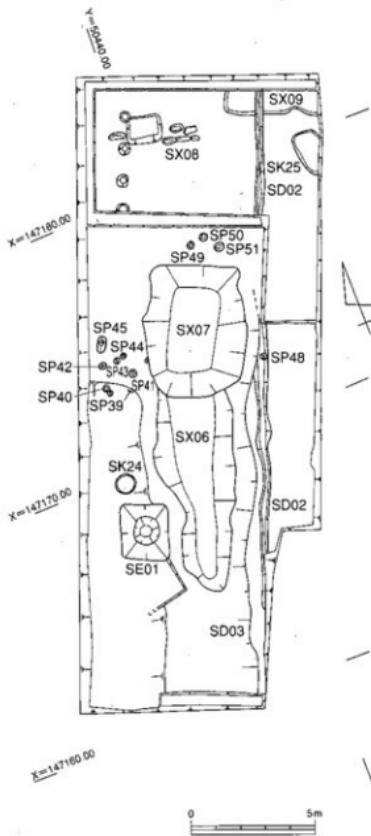




第57図 SX05出土遺物実測図⑨



第58図 II区包含層出土遺物実測図



第59図 III区遺構配置図 (1/200)

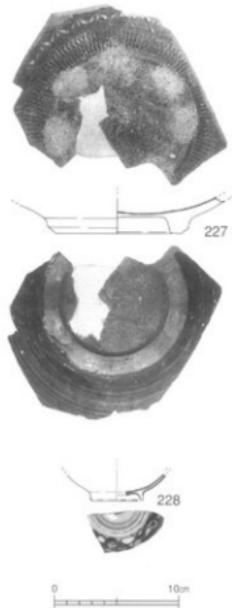
## 第5節 III区の調査

III区は動物園跡地内のほぼ中央に位置する区画であり、園東側の濠に隣接する。「栗林分間図」においては「藪」「畑」との記載された地区に当る。調査対象面積は500m<sup>2</sup>である。

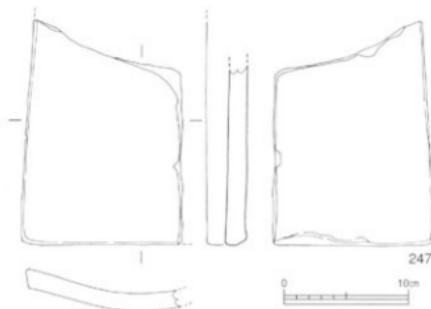
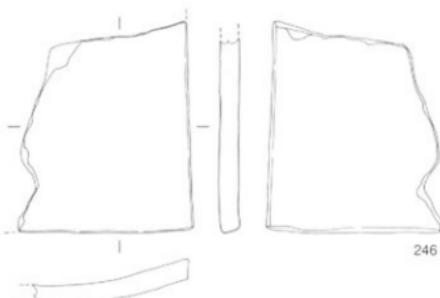
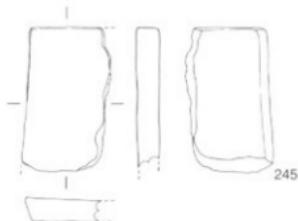
以下、遺構別にその概要を記す。

### SD02（第60図）

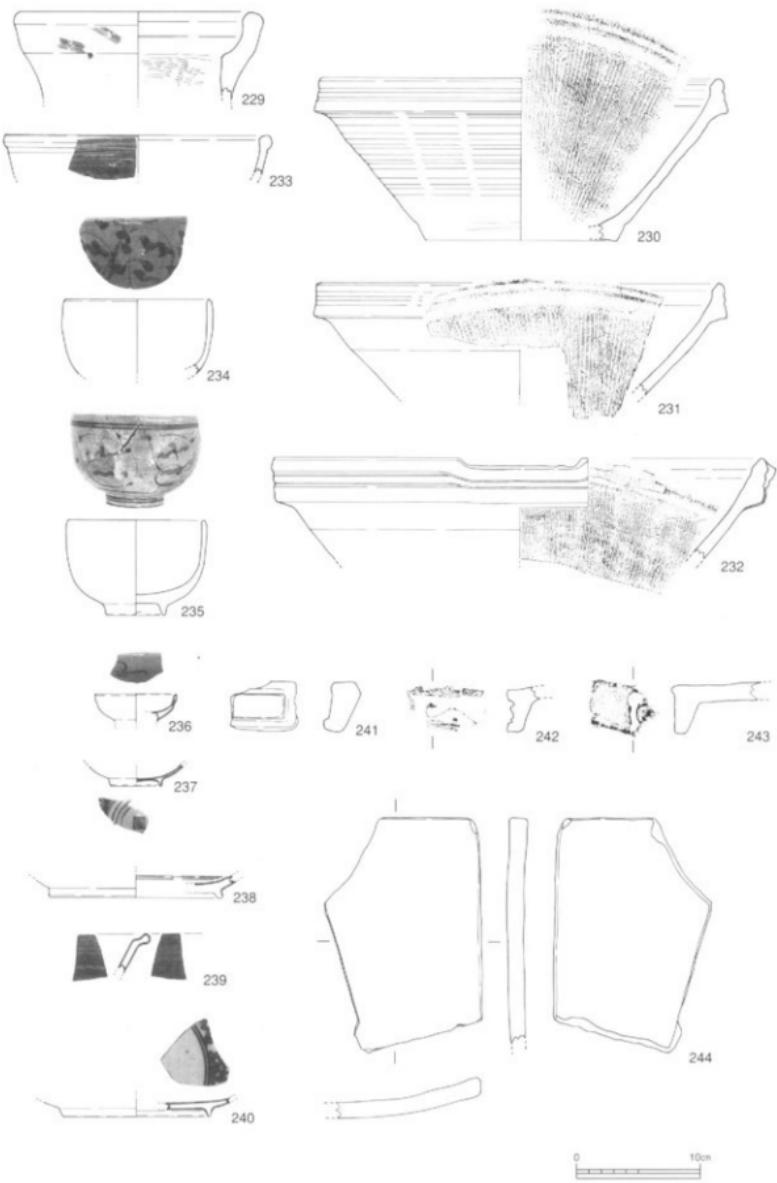
III区の南端で検出した溝状遺構である。後述する出水（SX06）の上層を流れる大きなもので幅は最大で3.5mを測る。深さは最深部で約40cmである。SX07（石組遺構）の北側で検出し得なかつたため、自然流路ではなく、人为的な溝状遺構であると判断した。埋土中からは多くの土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。出土遺物中にはガラス製品等が含まれるため、近現代の搅乱との区別が困難であるが、本遺構の埋没時期は明治以降であると思われる。



第60図 SD02出土遺物実測図



第62図 SD03出土遺物実測図②



第61図 SD03出土遺物実測図①

227は陶器の大鉢である。見込み及び高台端部には砂目積の痕跡が認められる。内面には化粧土による波状文等があり、いわゆる三島手唐津である。228は染付の碗である。

#### SD03 (第61・62図)

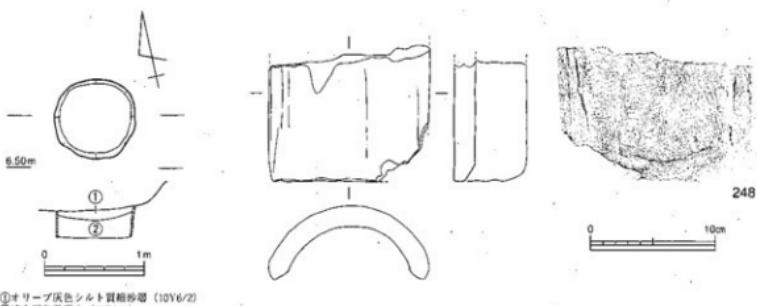
III区を南北に緩断するように流れる溝状遺構である。基本的には地形に沿って南から北へ向かって流れる。幅は最大で0.5m、深さは最深部で15cm程度と浅い。後述する石組遺構(SX07)のすぐ東側を流れ、一部現代の擾乱により破壊されている。蛇行することなくほぼ直線状に流れ、そのままIV区へと続く。便宜上別の遺構番号を付しているが、IV区SD05と同一のものであると考えられる。埋土中からは少量ではあるが、土師質土器や陶磁器、若干の瓦類が出土している。

230～232は擂鉢である。いずれも備前産と考えられる。233～235は陶器の碗である。いずれも唐津産と考えられる。236は染付の酒盃である。237は染付の皿である。高台内部に満福文が認められる。238は陶器の皿である。240は染付の皿である。241～243は軒平瓦である。244～247は平瓦である。

#### SK24 (第63・64図)

III区の中央やや南寄りで検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径0.8m、深さ30cmを測る。桶を埋設した遺構で性格は不明である。埋土中からは土師質土器・陶磁器が出土している。

248は丸瓦である。内面には布目痕が認められる。

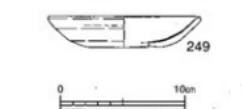


第63図 SK24平・断面図(1/50)

第64図 SK24出土遺物実測図

#### SP51 (第65図)

III区の北側で検出した柱穴と考えられる遺構である。SP51以外にもSX07周辺にいくつかの柱穴と思われる遺構を検出しているが、明確に建物を構成するものはない。また、遺物もほとんど出土していない。第65図はSP51の埋土中から出土した遺物で陶器の皿である。



第65図 SP51出土遺物実測図

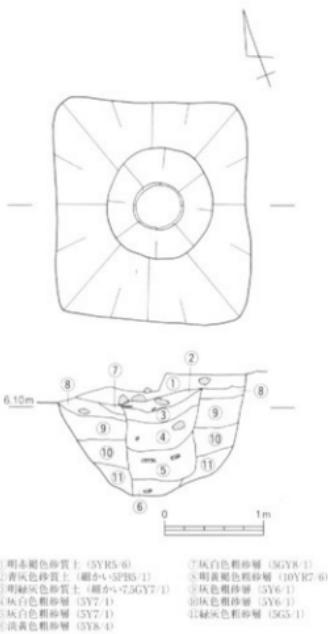
### SE01 (第66～68図)

III区の中央やや南寄り、SK24付近で検出した井戸と考えられる遺構である。掘り方は1辺約2mの方形を呈し、深さ1.2m以上を測る。掘り方の一部は現代の擾乱によって破壊されている。理土中に植物の一部及びたがの麻繩が認められ、また、土層にも円柱状に埋没した層があることから桶物を埋めた井戸跡と考えられる。桶物は腐食したり、破壊されたりしていたため、取上げることはできなかった。埋土及び裏込め土中からは土師質土器や陶磁器が出土している。

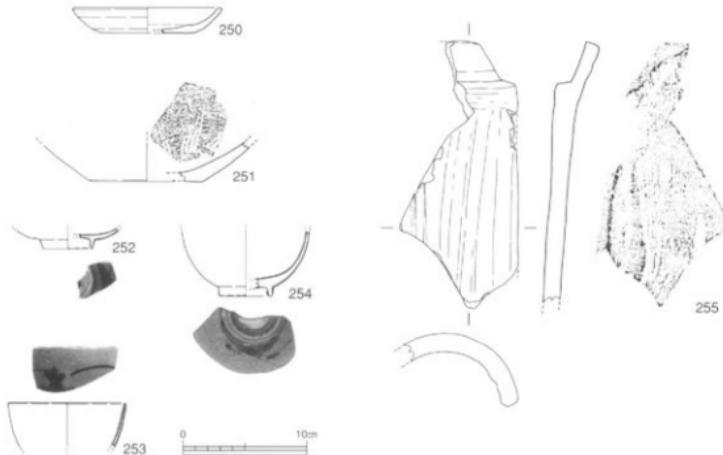
250は土師質土器の皿である。251は陶器の擂鉢である。底部の一部しか残っていないが、卸目が放射状を呈していることから明石産である可能性が高い。252～254は乗付の碗である。255は丸瓦である。256は平瓦、257・258は棟瓦である。

### SX06 (第69～88図)

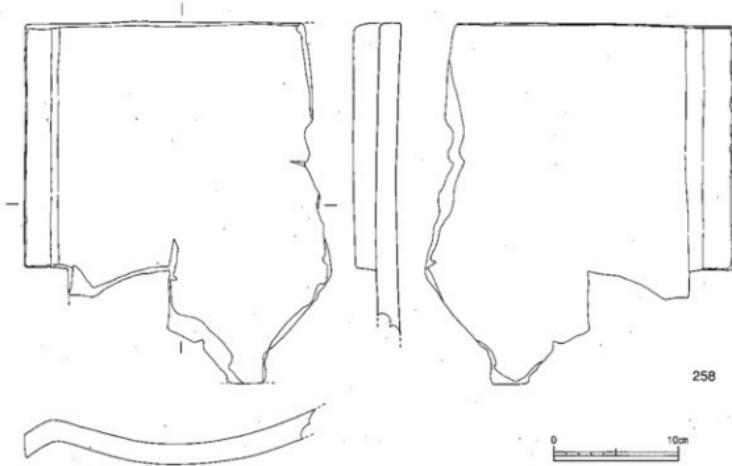
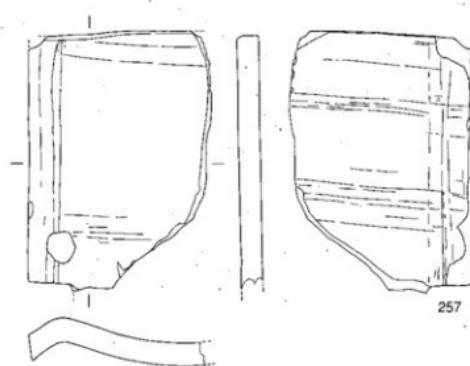
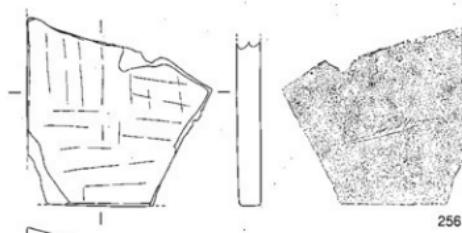
III区の中央部で検出した南北に長大な遺構である。上層をSD02が覆うため、機能していた時期の正確な規模は不明であるが、検出した部分においては、長さ7.6m以上、幅は最大3.3mで最深部は60cm程度を測る。



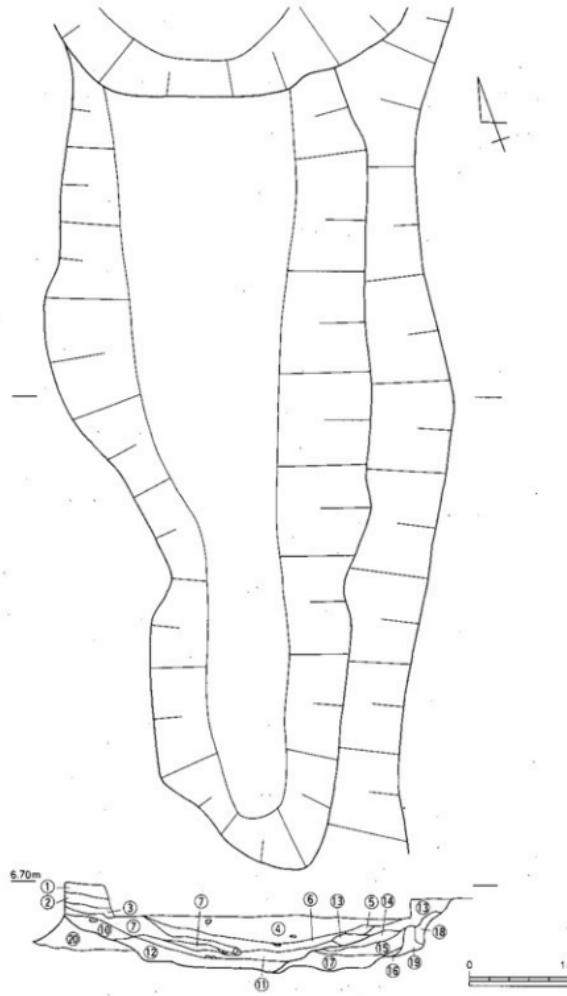
第66図 SE01平・断面図 (1/50)



第67図 SE01出土遺物実測図①



第68図 SE01出土遺物実測図②

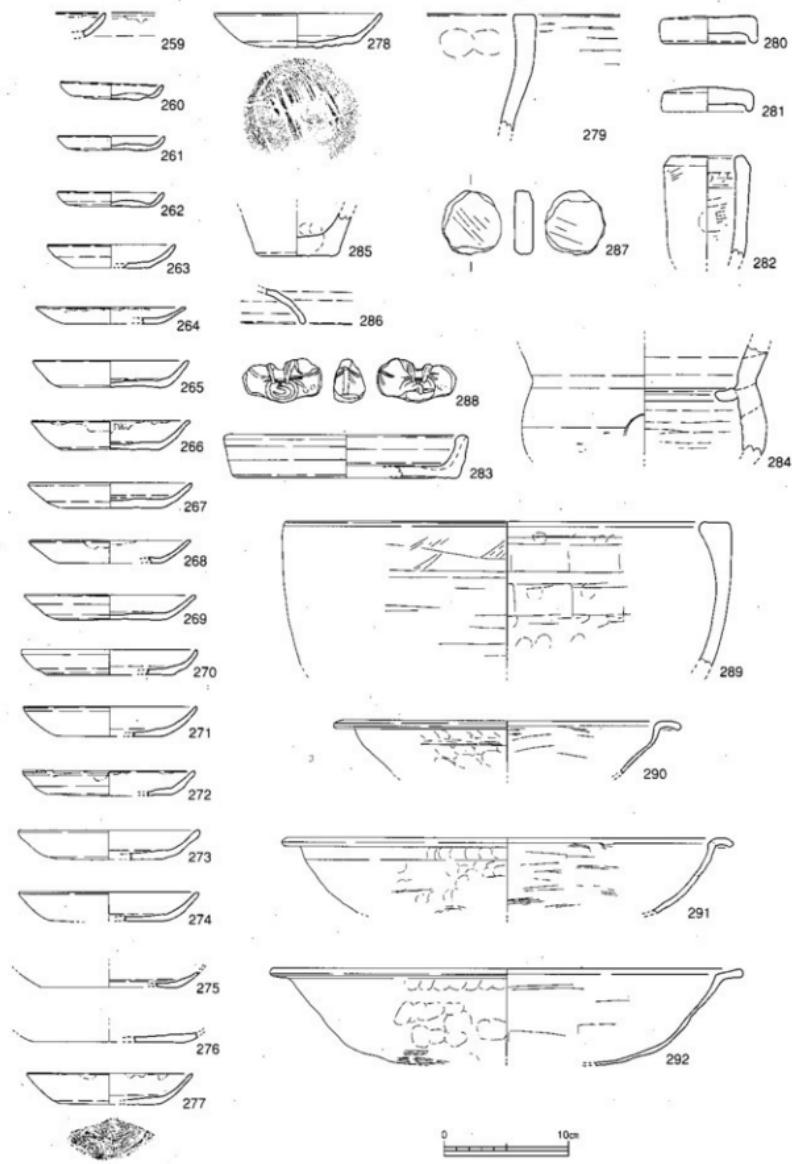


- ①灰オリーブ色砂質土 (7.5Y6/2)  
 ②灰オリーブ色砂質土 (7.5Y6/1)  
 ③灰オリーブ色砂質土 (7.5Y4/1)  
 ④⑤に同じ (中等程度ほど炭化物の割合が多い)  
 ⑥⑦に同じ (少しだけ)  
 ⑧灰褐色砂質土 (7.5Y4/2)  
 ⑨灰褐色砂質土 (7.5Y4/1)  
 ⑩より粘性弱く炭化物少ない  
 ⑪オリーブ黒色砂質土 (10Y3/1)  
 ⑫オリーブ灰色砂質土 (10Y4/2) (炭化物含まず)  
 ⑬灰色砂質土 (10Y5/1) (大ぶりの礫含む)  
 ⑭⑮に同じ (⑫より炭化物多い)  
 ⑯⑰に同じ (少しだけ)  
 ⑱(10Y5/2) 层下層に木腐多孔に含む  
 ⑲青灰色砂質土 (5P6/1)  
 ⑳灰黄色砂質土 (2.5Y6/2)
- ㉑明黄色褐色砂質土 (2.5Y6/6)  
 ㉒黄灰色砂質土 (2.5Y6/6)  
 ㉓オリーブ灰色シルト質細砂層 (2.5GY6/1)  
 ㉔青灰色砂質土 (5B7/1)  
 ㉕明黄色褐色シルト質細砂層 (2.5Y6/6)  
 ㉖明黄色褐色シルト質細砂層 (2.5Y6/8)

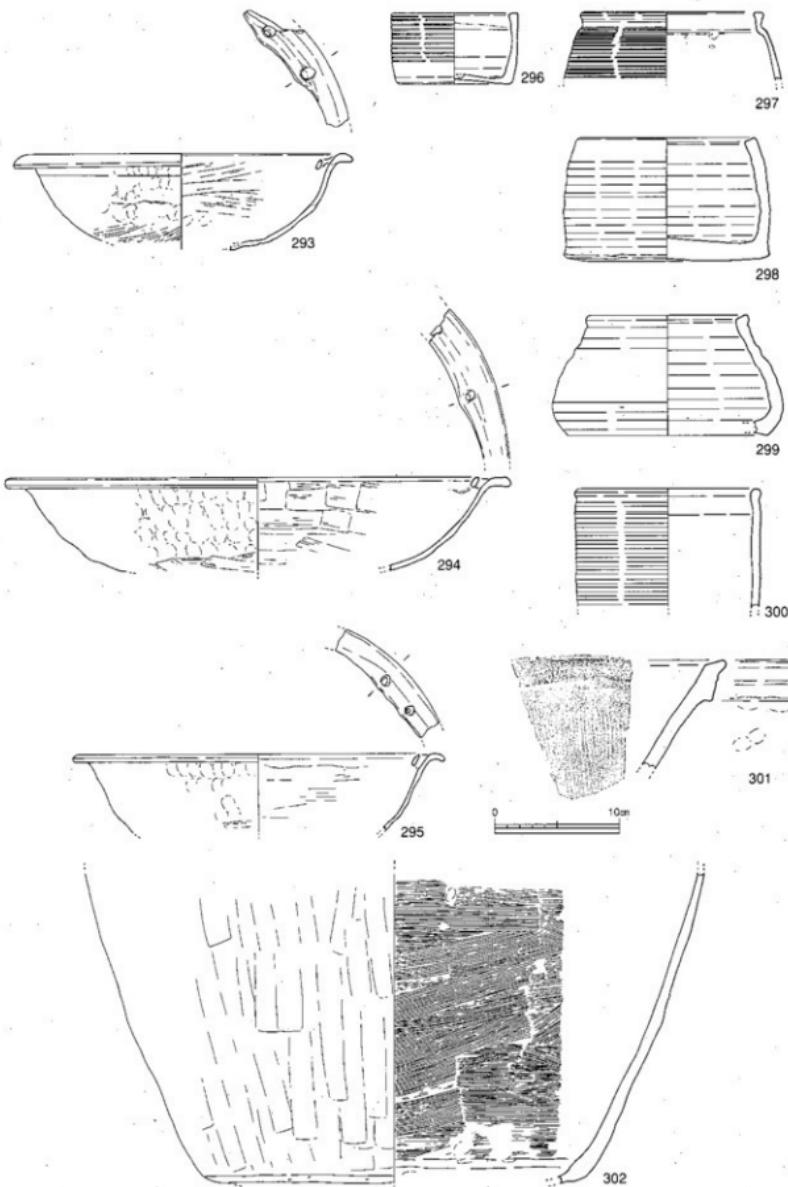
第69図 SX06平・断面図 (1/50)

北側はSX07によって破壊されている。SX07が構築される以前に機能していた遺構であると考えられる。埋土中からは土師質土器や陶磁器、瓦類が大量に出土したほか、箸・椀等の木製品が出土している。最深部においては、調査中においても湧水が認められるため、「栗林分間図」に記載のある「畠」を維持管理するために地下水を得るための素掘りの遺構であると考えられる。18世紀中葉に開削され、その後、18世紀末頃に石組のSX06へ切り替えられたものであると思われる。

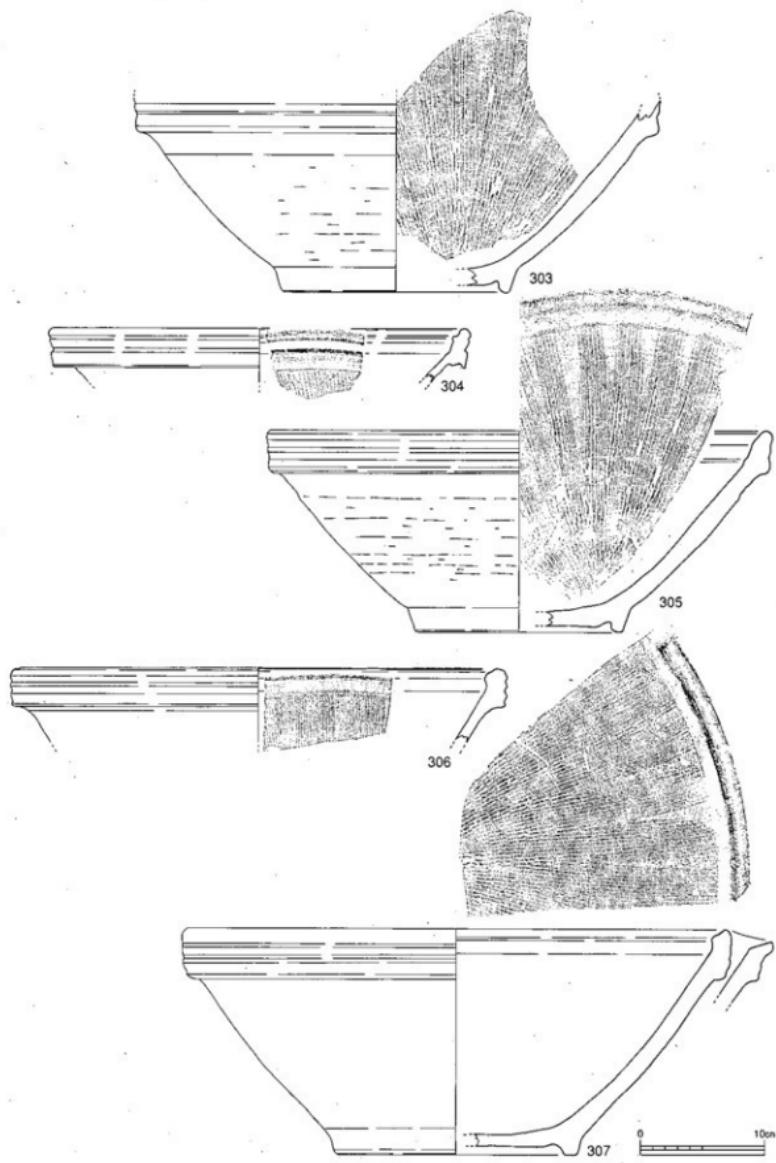
259～278は土師質土器の小皿及び皿である。279は瓦質土器の火鉢である。280・281は焼塩壺の蓋、282は焼塩壺である。器壁が厚く、無印であることから18世紀以前のものであると考えられる。287は平瓦を転用したものである。打ち欠いて丸く円形にしている。玩具として使用したものと考えられる。288は土師質土器の人形である。形状から見て、馬の人形と思われるが頭部及び脚部が欠損している。背中には鞍が作り出されている。289は瓦質土器の火鉢である。290～295は瓦質土器の鍋、焰烙である。296～300は陶器である。備前系と思われる。296・298は窯道具の一種か。301は備前産の擂鉢である。302は土師質土器の大型の壺である。303～308も備前産の擂鉢である。309～325は陶器の碗である。315・322以外は肥前系であると思われる。323～325は刷毛目唐津である。326は陶器製の香炉である。327は備前産の灯明皿である。328は陶器の盤である。草花文があしらわれている。329は陶器の向付である。330～332、336～342は陶器の皿もしくは鉢である。338～342は刷毛目唐津である。335は陶器製の人形である。ミニチュアの笠地蔵で玩具として使用されたものであろう。淡い緑色の釉が掛かる。343～347は染付の酒盃である。348～379は染付の碗である。高台内部に「大明年製」の銘や渦福文が認められるものが多い。360のように外面に矢羽文が隙間なく描かれているものもある。377は紅葉文が描かれている。380～384は染付の皿である。383は高台内部に二重圈線を持つ。385・386は染付の鉢である。387は香炉である。389は染付の蓋、390は蓋物の体部であると思われる。裸を着けた人物を表現している。391～399は巴文軒丸瓦である。完形に近いものはいずれも珠文が12個であることから、概ね同一時期に機能していたものであると考えられる。400～408は軒平瓦である。文様が判別できない408以外はいずれも唐草文であるが、中心筋りに巴文等数種類が認められる。410～423は丸瓦である。410と412は無段式であるがそれ以外は有段式である。423には屋根に取り付けるための孔が2つ認められる。424～453は平瓦もしくは棟瓦である。428には屋根に取り付けるための孔が2つあけられている。446～448、450は棟瓦である。450は軒棟瓦で棟の部分は巴文で軒平部分は唐草文である。454は硯である。上下が欠損しているが、墨を磨った痕跡が顕著である。455は煙管の吸口である。456～458は不明金属製品である。459・460は箸である。459はツガ属、460はモミ属に属し、いずれも箸にするには好適な種類の木材である。このような箸状の木製品はそのほかにも大量に出土している。そのほかに県内では珍しい棕櫚箒も出土している。竹製の柄もあったが、腐食が激しく、取上げることはできなかった。



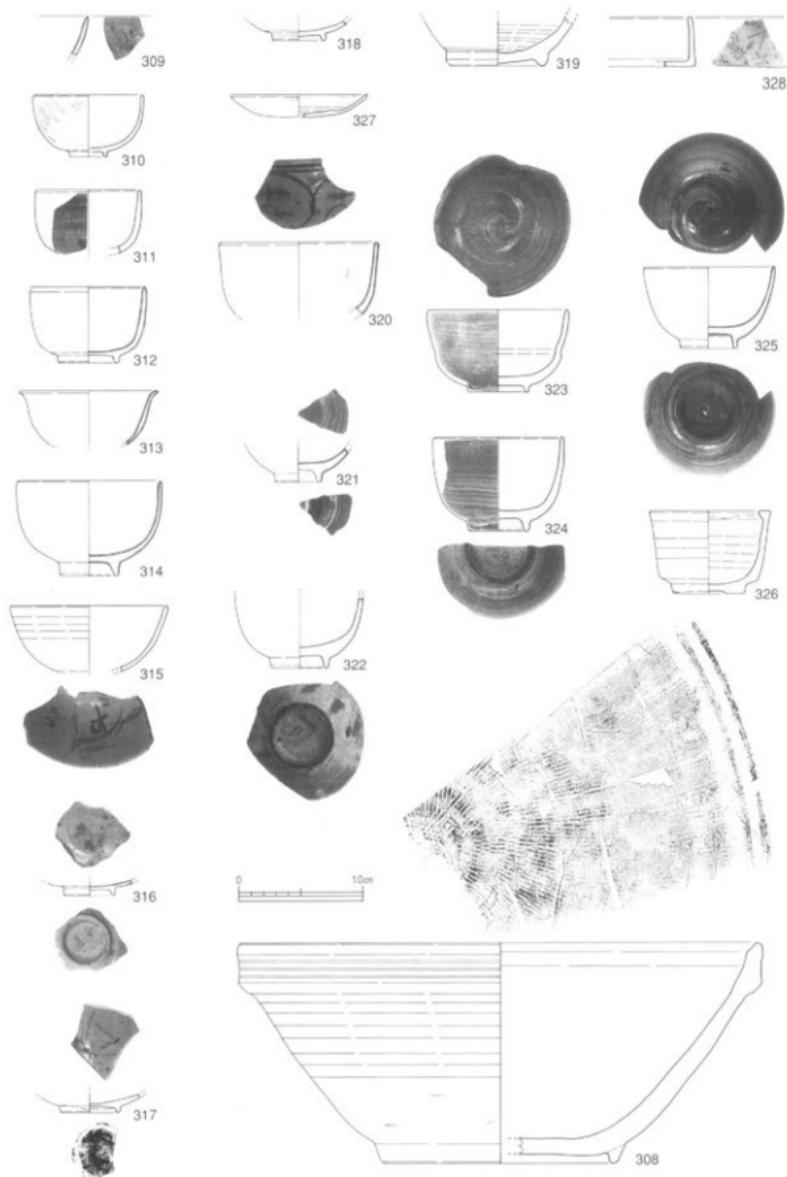
第70図 SX06出土遺物実測図①



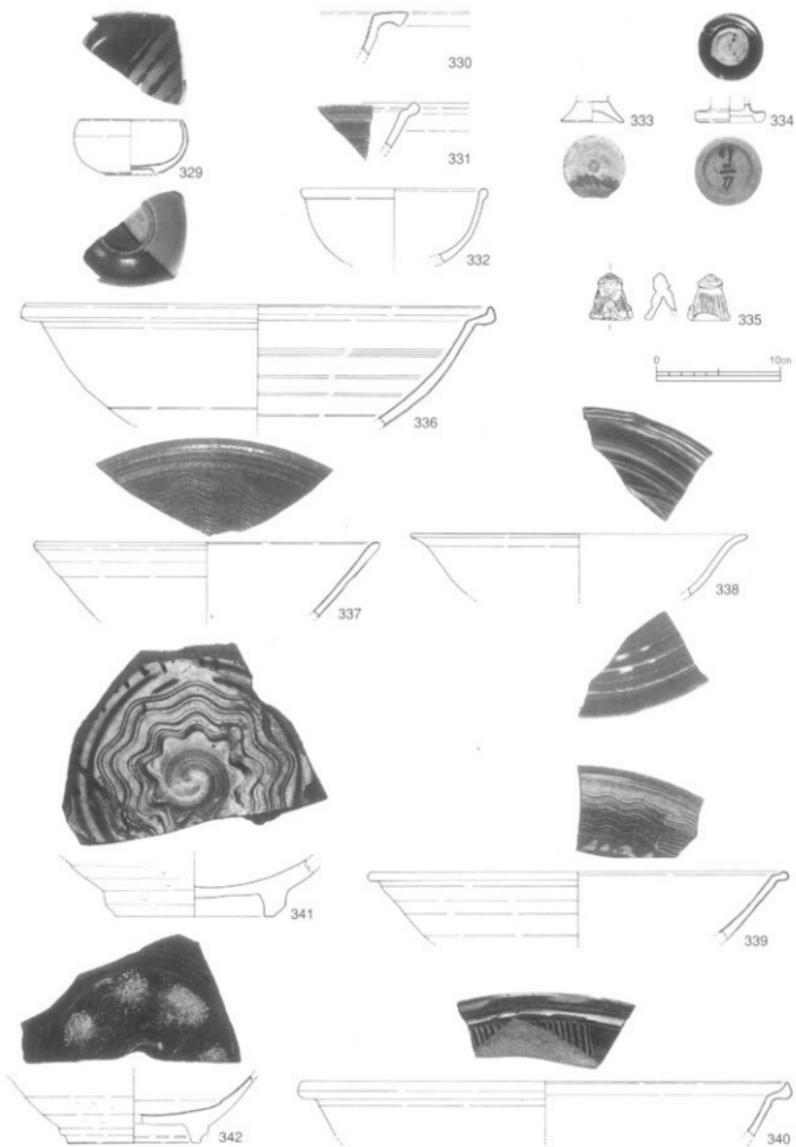
第71図 SX06出土遺物実測図②



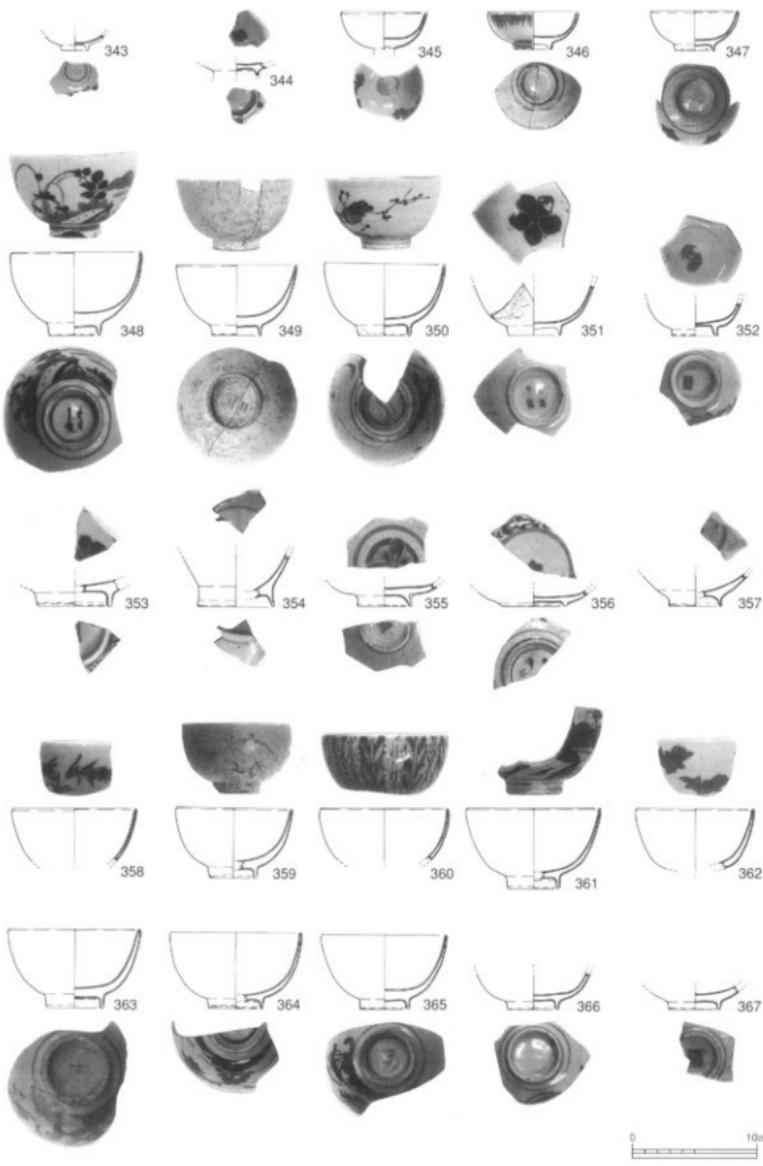
第72図 SX06出土遺物実測図③



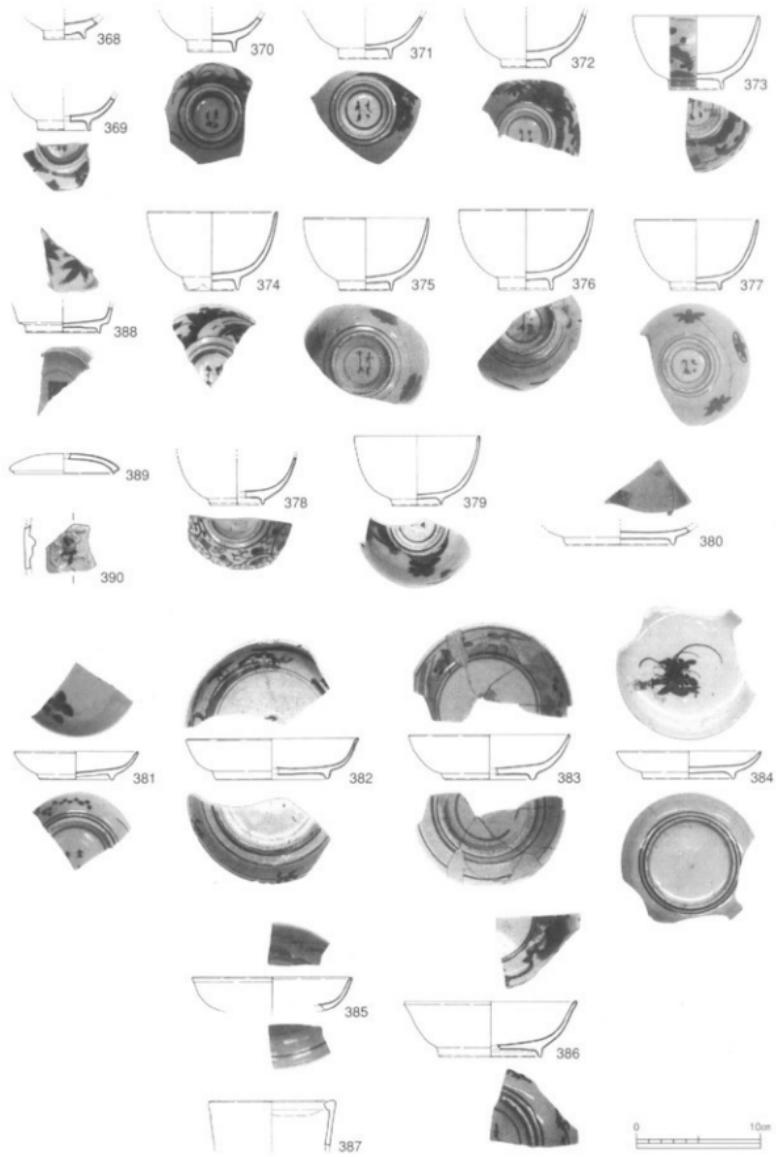
第73図 SX06出土遺物実測図④



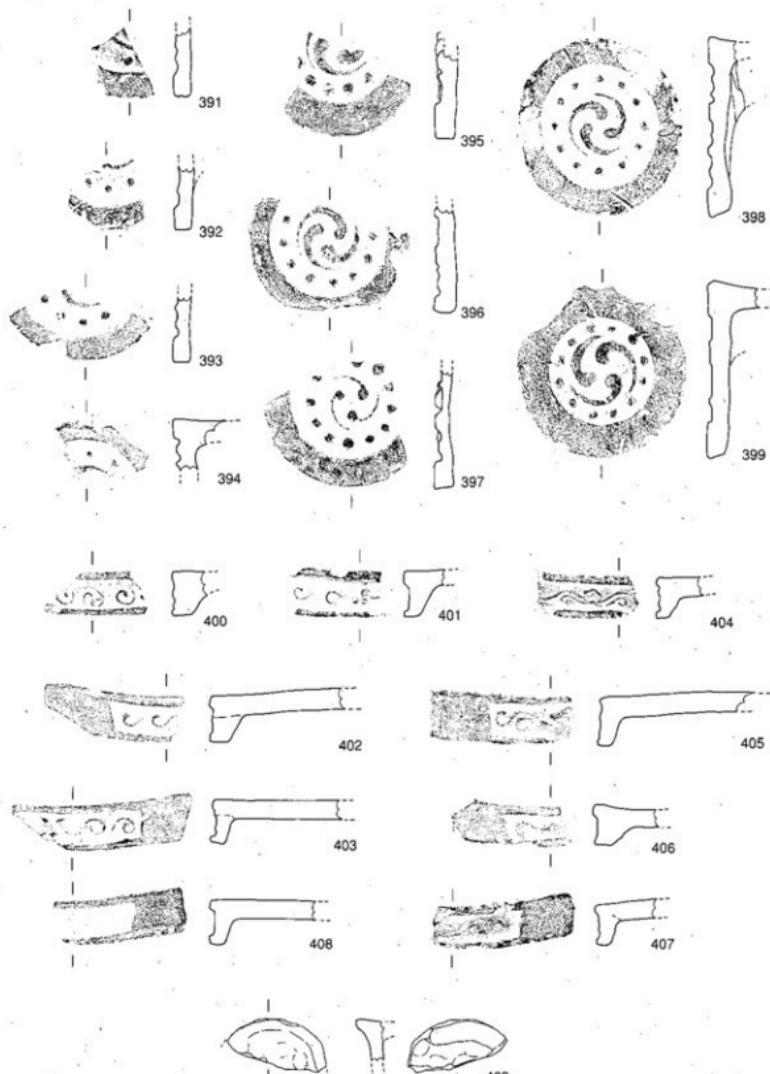
第74図 SX06出土遺物実測図⑤



第75図 SX06出土遺物実測図⑥



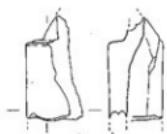
第76図 SX06出土遺物実測図⑦



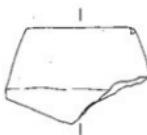
第77図 SX06出土遺物実測図⑧



410



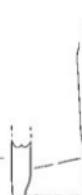
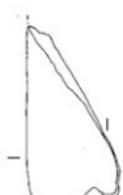
411



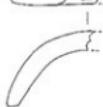
412



413



415



414

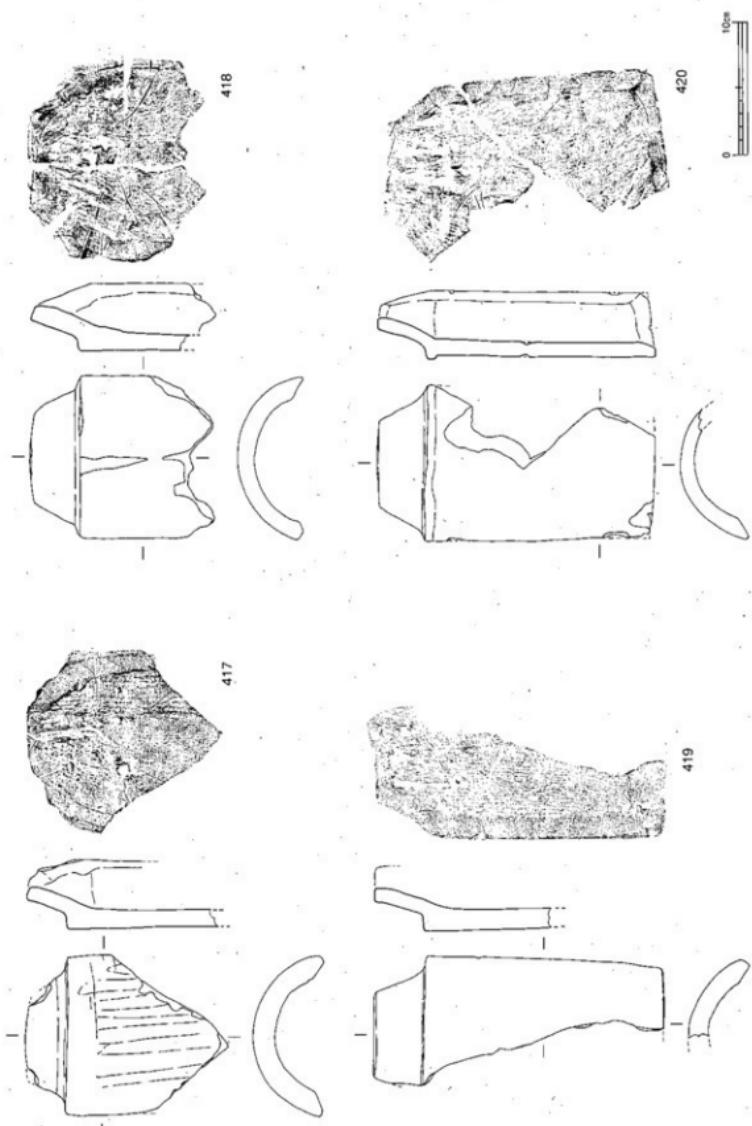


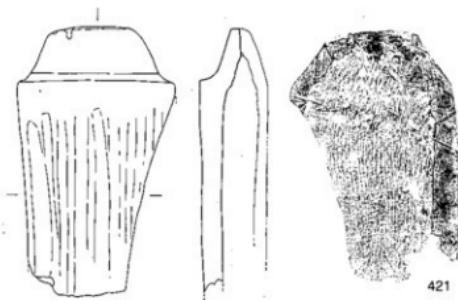
416



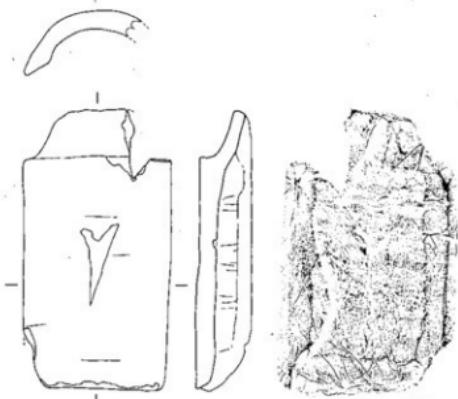
第78図 SX06出土遺物実測図⑨

第79图 SX06出土遗物实测图⑩

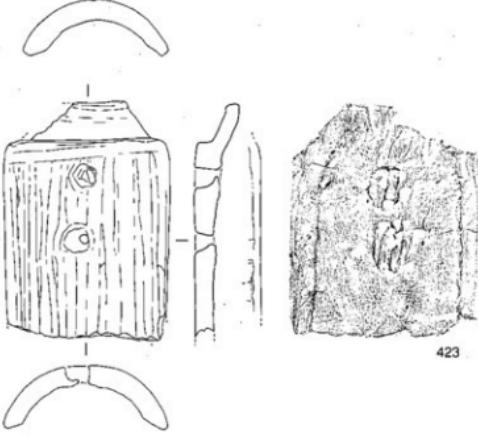




421



422

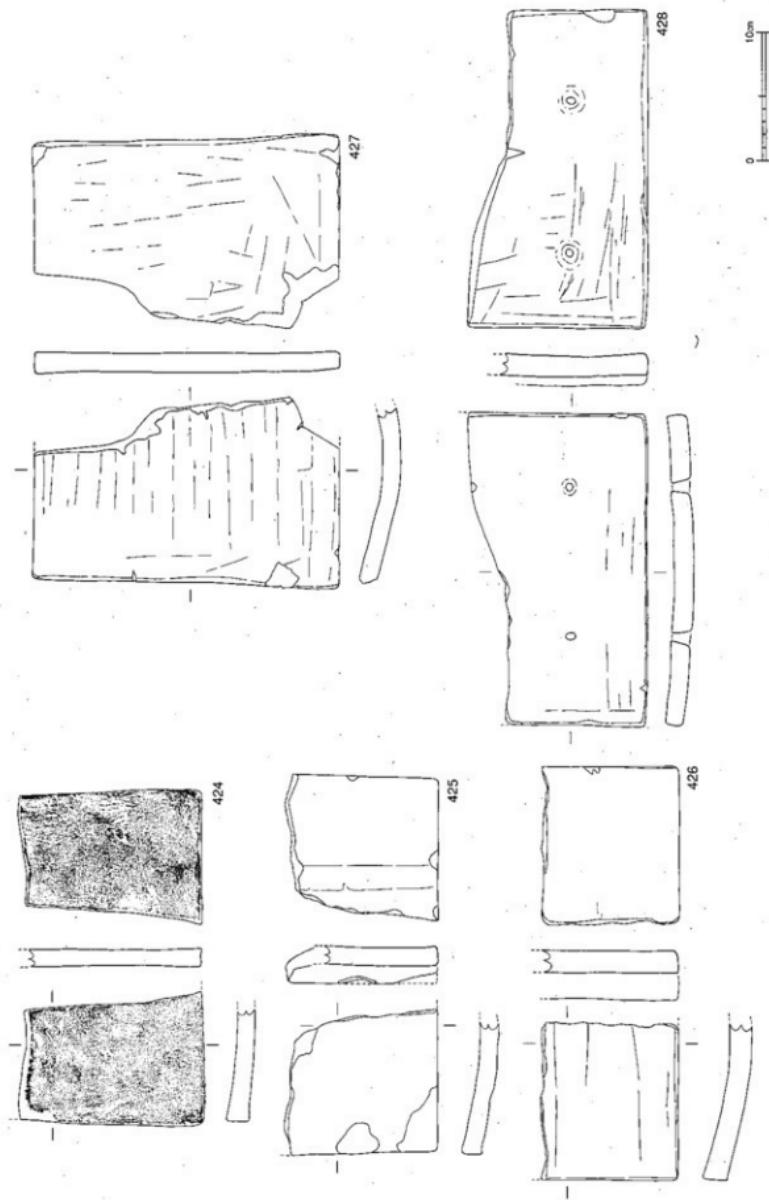


423

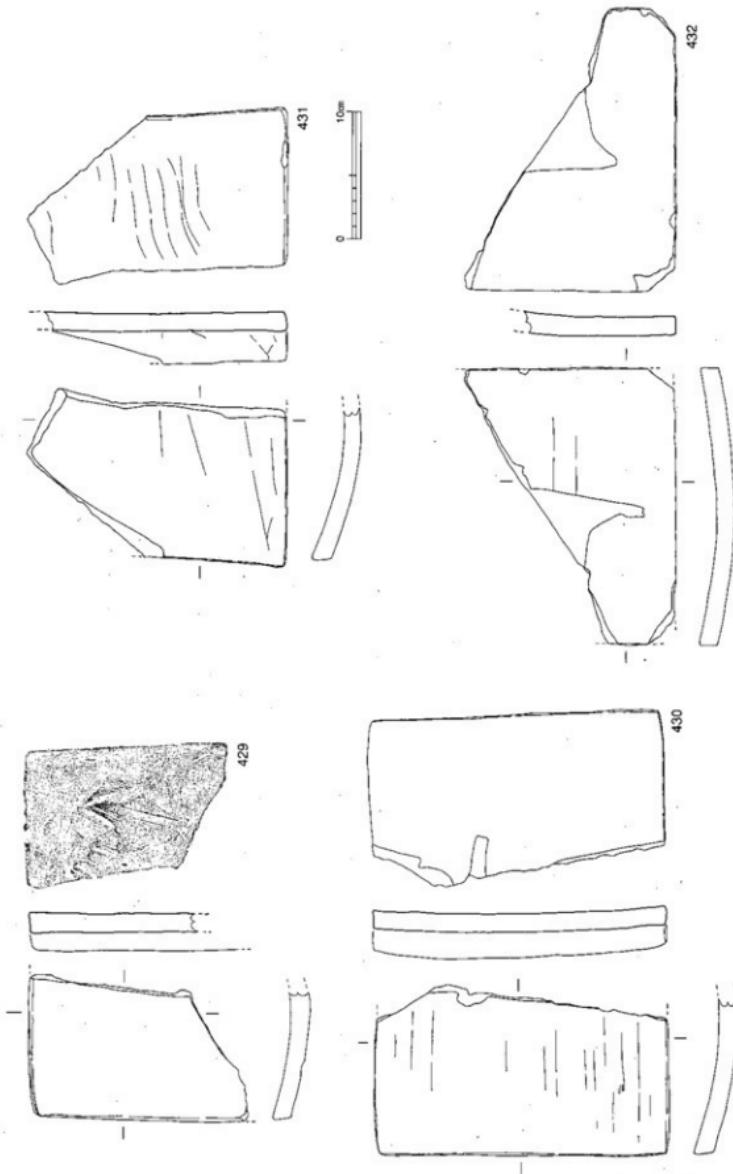


第80図 SX06出土遺物実測図①

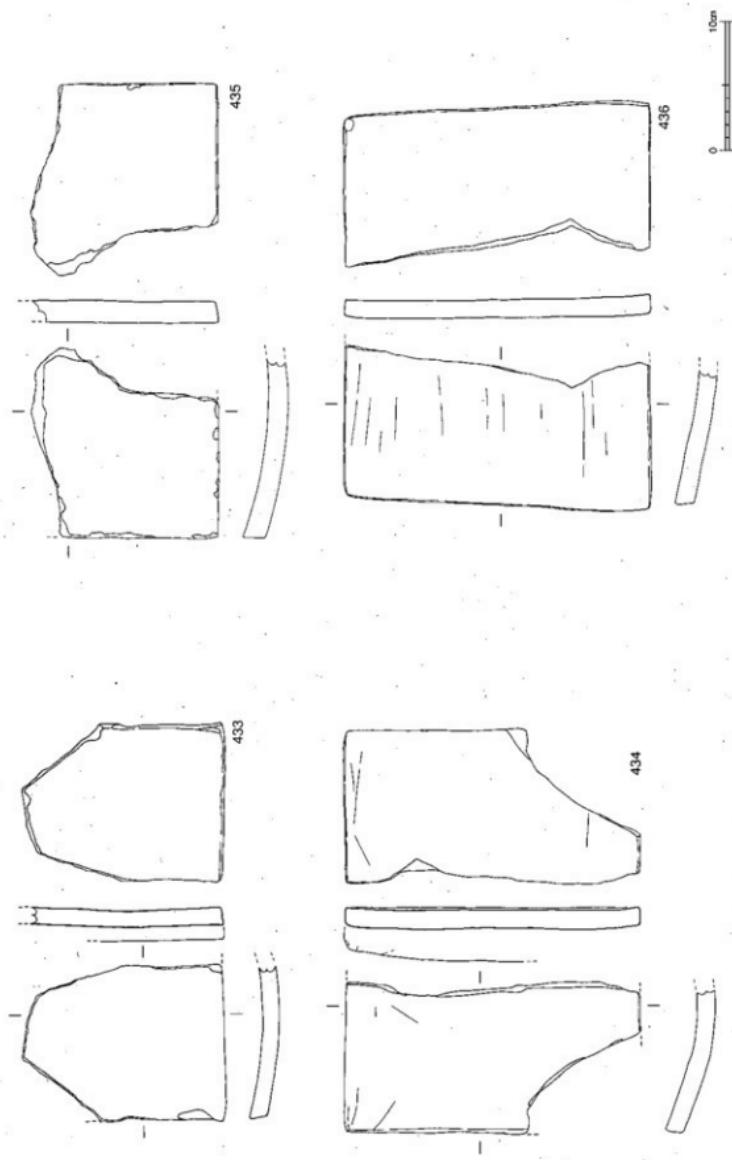
第81圖 SX06出土遺物實測圖12



第82圖 SX06出土遺物實測圖(3)



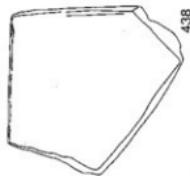
第83圖 SX06出土遺物實測圖(4)



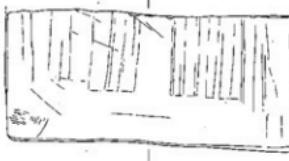
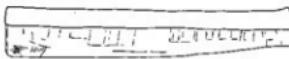
第84图 SX06出土遗物实测图(5)



438

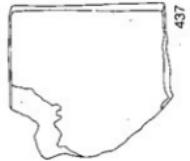


437

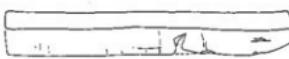
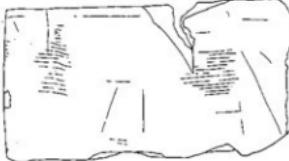


440

439

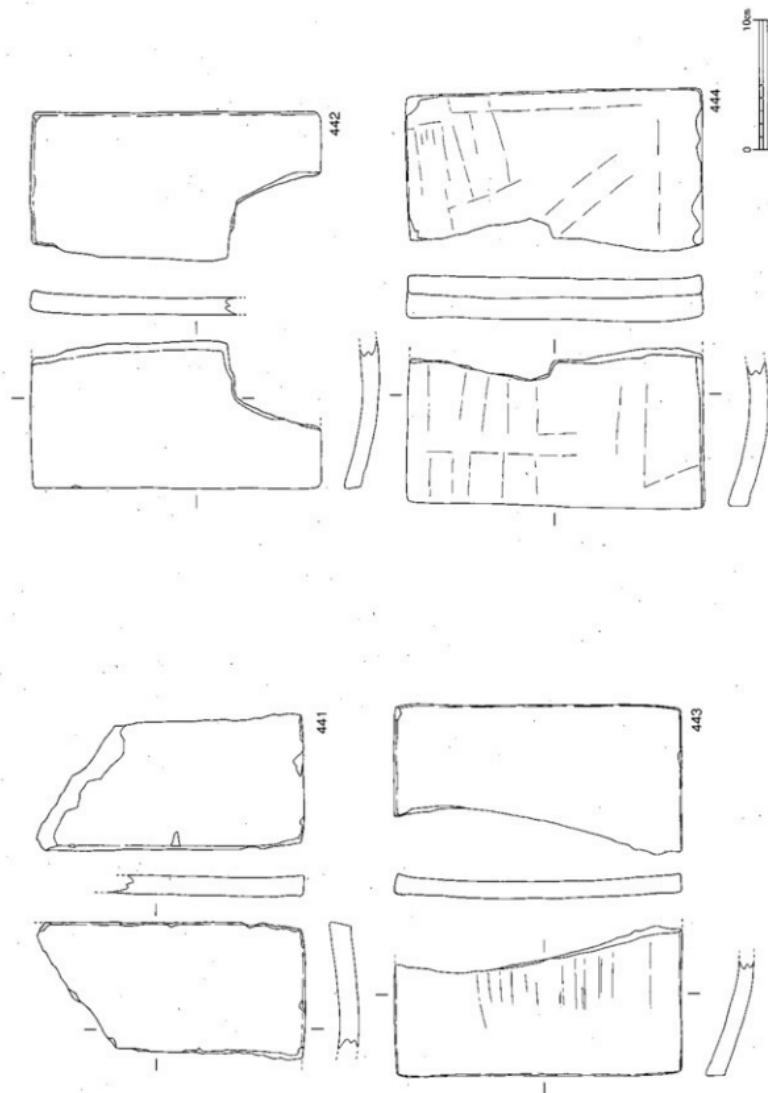


437



439

第85図 SX06出土遺物実測図16



第86圖 SX06出土遺物實測圖(1)

10cm

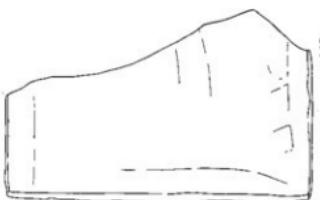
0



447



447



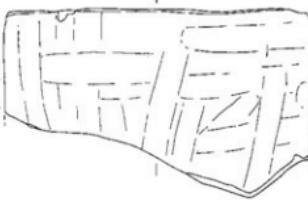
449



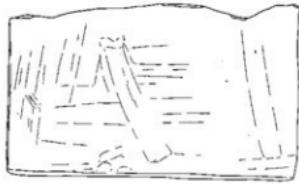
446



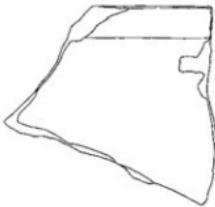
446



449



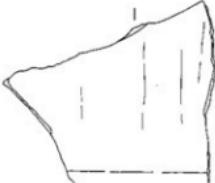
445



448

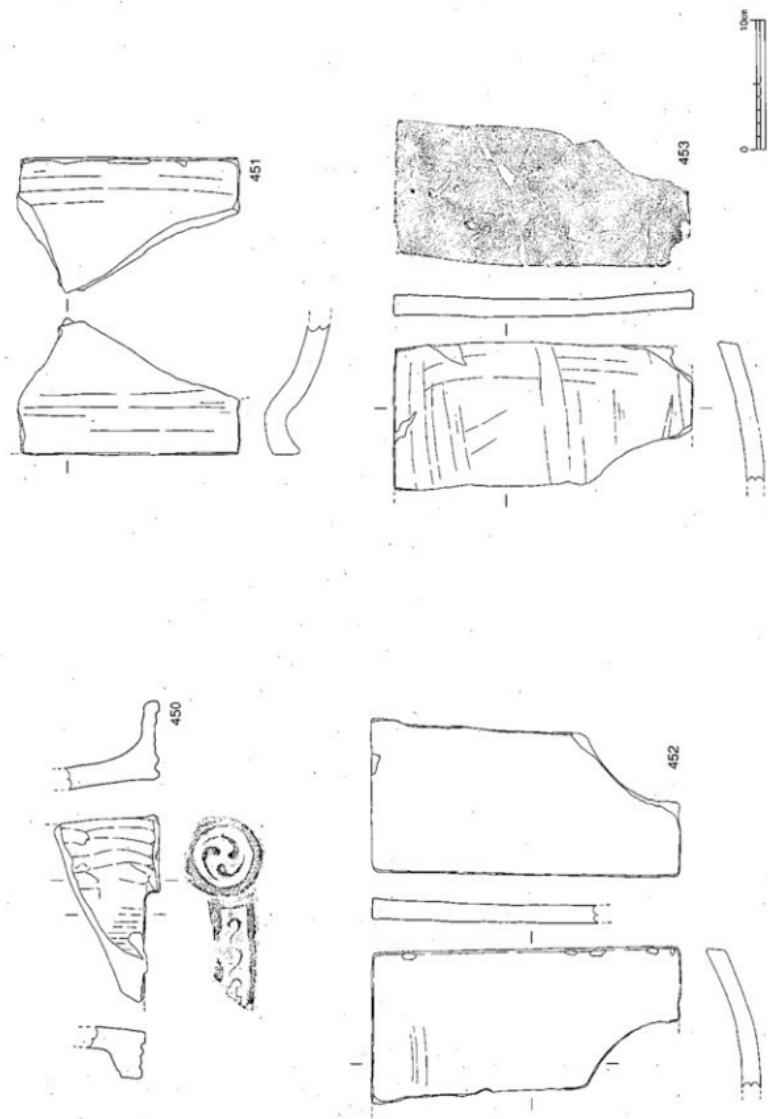


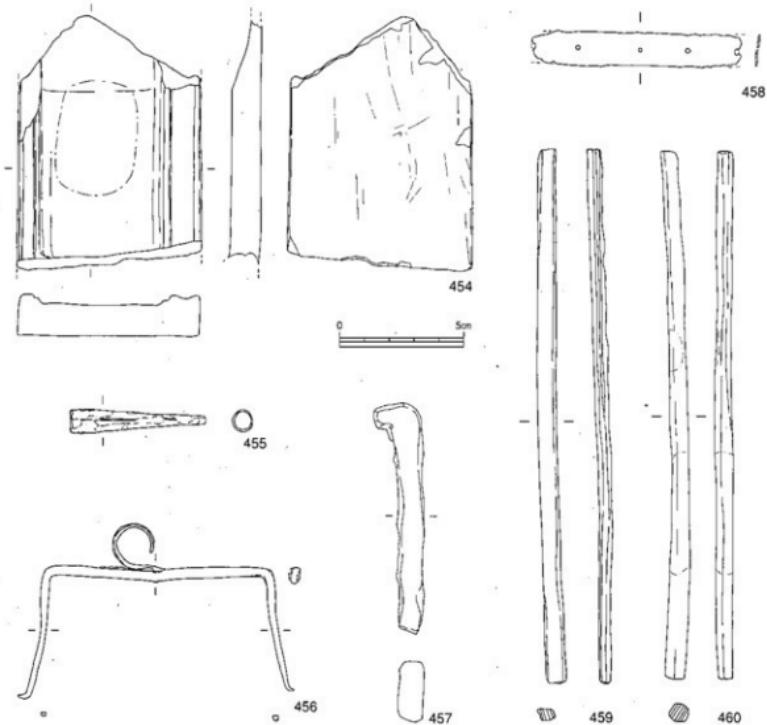
445



448

第87図 SX06出土遺物実測図18



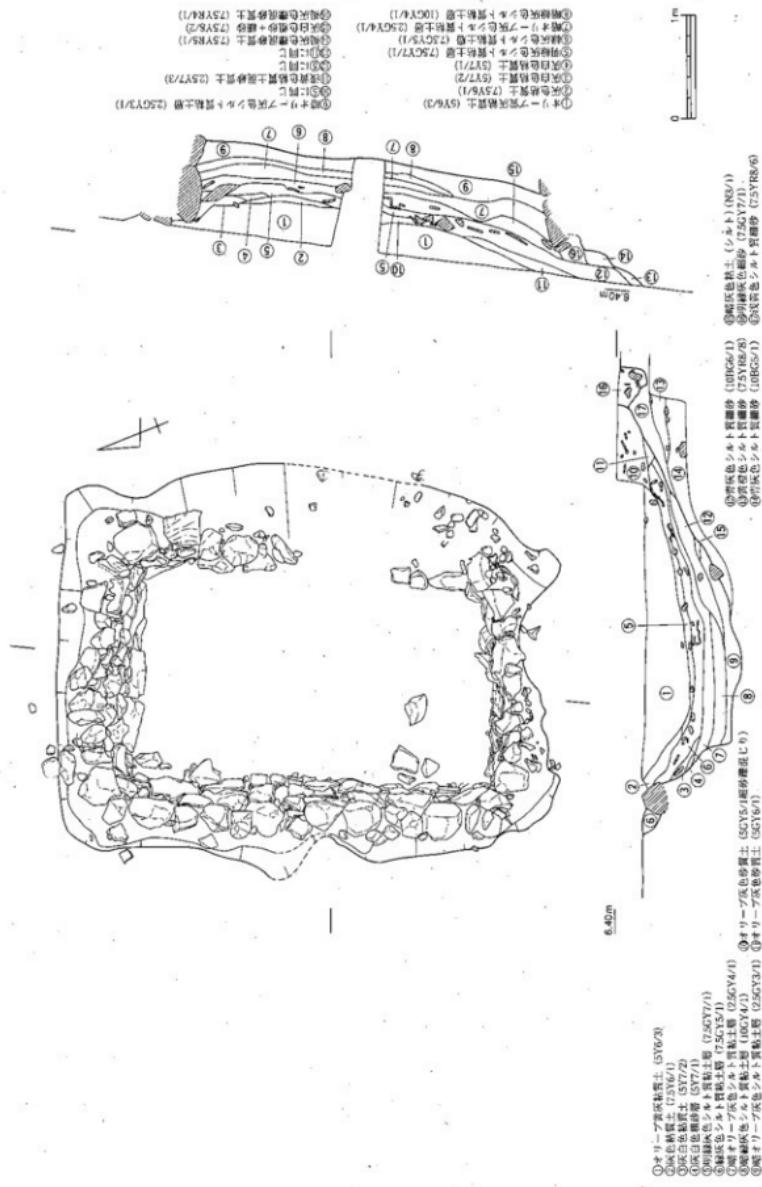


第88図 SX06出土遺物実測図(19)

**SX07 (第89~103図)**

Ⅲ区の中央やや北寄りの部分で検出した石組遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ4.9m、幅4.2m、深さ1mを測る。石材には安山岩・花崗岩・砂岩・玄武岩等が認められる。いずれも30cm前後の角砾で加工痕のあるものと自然のものとが混在している。底面には石は存在せず、素掘りのままである。石組は西側と北側は4段分が認められるが、南側は3段で東側は逆三角形状に石のない部分があり、これらは現代の擾乱によって破壊されたものと考えられる。西側と北側も元来はもっと高かったものと考えられる。埋土中からは土師質土器や陶磁器、瓦類のほか、木製品が出土している。最深部はやすり鉢状を呈し、中央部には湧水が認められる。

461~470は土師質土器の小皿及び皿である。471・473は陶器の灯明皿で口縁部に煤が付着している。472は灯明受皿である。476は瓦質土器の竈の一部と思われる。477は瓦質土器の鍋、焙烙である。478・479も瓦質土器で火鉢であると思われる。479は外面に内容は不明であるが、文様を巡らせている。480は土師質土器の七輪である。一方向に窓が付いており、三脚である。481は瓦質土器の土瓶である。485~490は陶器の碗である。489・490は刷毛目唐津である。491は陶器の蓋物のつまみである。492は

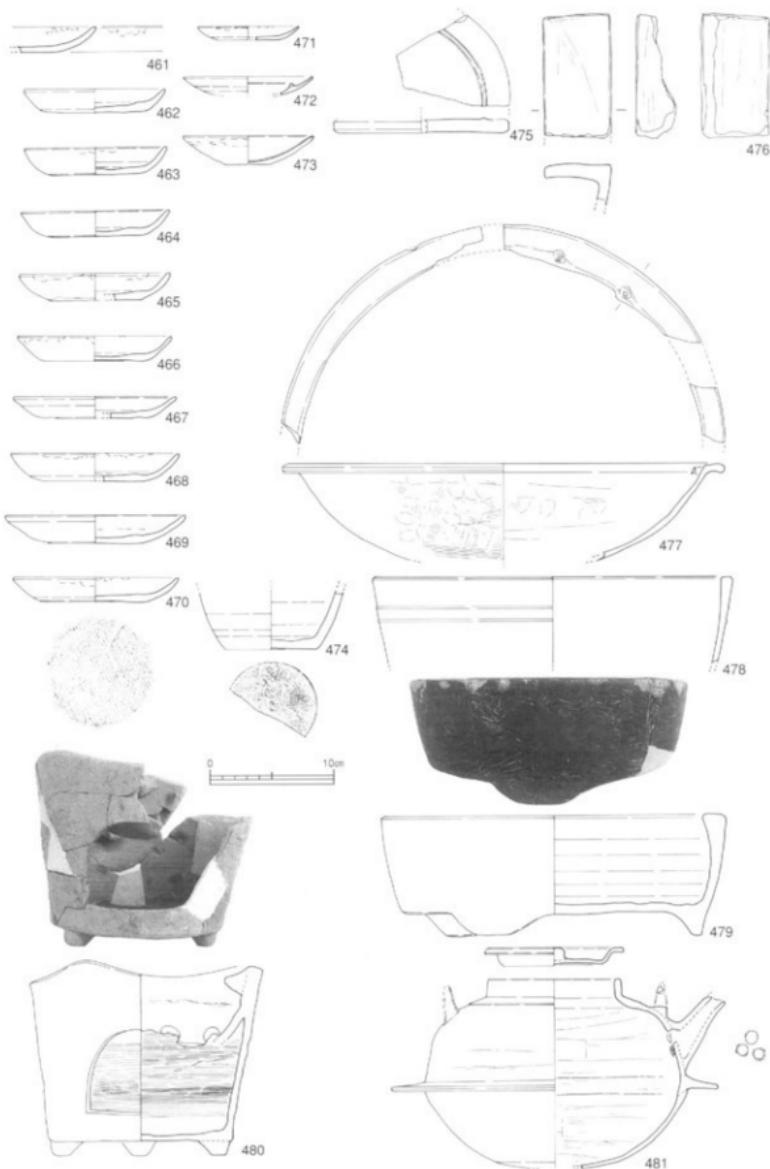


第89圖 SX07平・断面図(1/50)

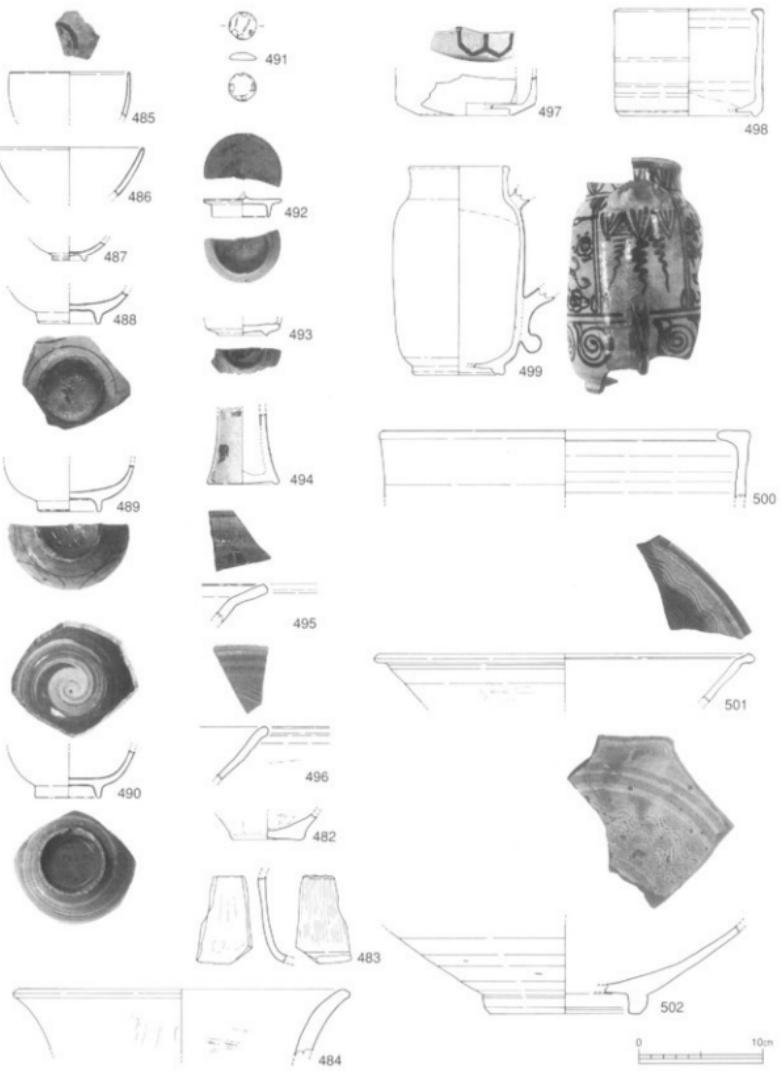
陶器の蓋である。494は陶器の花生と考えられる。495・496は陶器の鉢の口縁部である。いずれも唐津產と考えられる。497は六角形を呈する鉢である。498は陶器の香炉である。499は把手付きの水差しのような器種である。釉の状態や呉須の文様から見てベトナム等東南アジア製の可能性が考えられる。501・502は陶器の大鉢である。いずれも唐津產と考えられる。503～517は染付の碗である。高台内部に「大明年製」の銘を持つものや見込に五弁花文を持つものが多い。518は染付の小瓶である。519～523は染付の皿である。524・525は染付の蓋である。いずれも外面に草花文を描いている。526・527は染付の猪口である。528・529は染付の皿で528は輪花皿である。いずれも高台内部に「大明年製」の銘を、見込に五弁花文を描いている。530・531は巴文軒丸瓦である。532から536は軒平瓦である。537は小菊文瓦である。539～549は丸瓦である。屋根に固定する孔を持つものと持たないものがある。また、内面にヘラみがきの痕跡があるもの（543・544・546・547）もある。550～568は平瓦である。569～577は棟瓦である。このうち、569～571・576は軒棟瓦である。578・579は箸状の木製品である。SX06出土のものと同様、578がツガ属、579がモミ属に属するものである。

#### 石列遺構

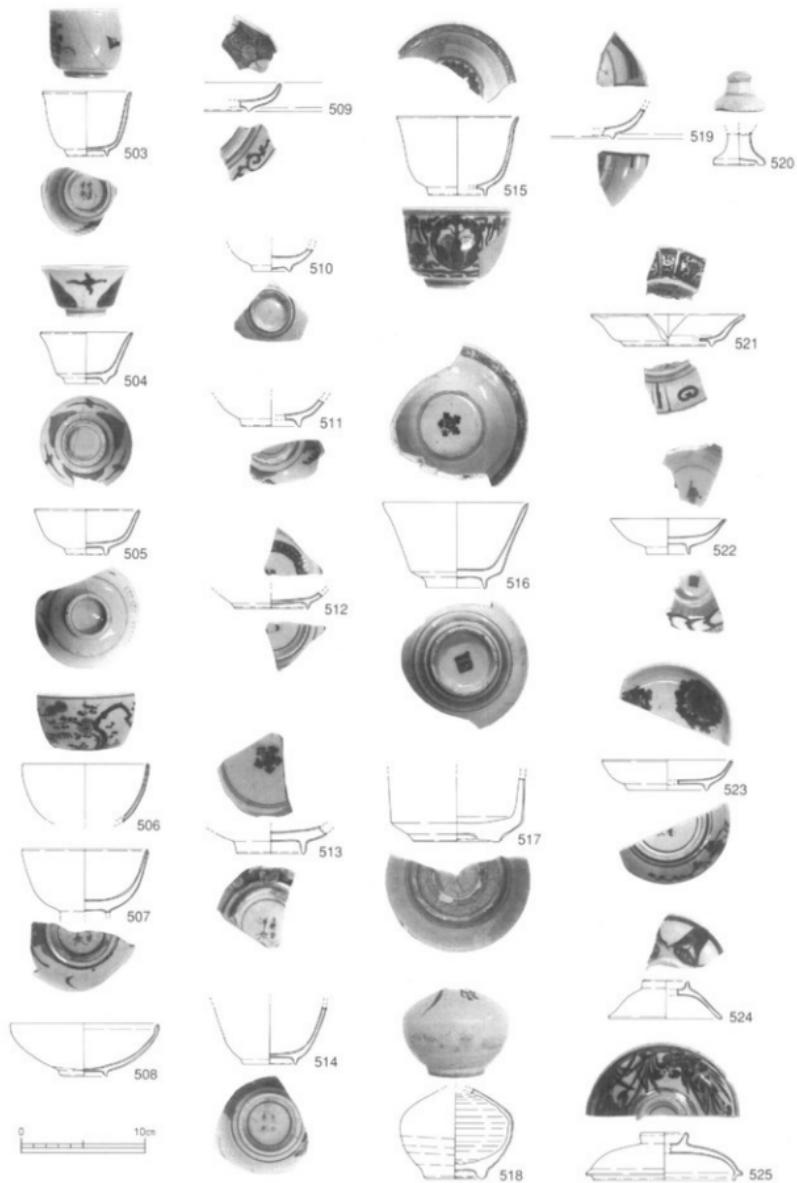
SX07の北側で安山岩を2列に並べた石列が検出された。石材は2石しか残存していなかったが、抜き取り痕が確認でき、Ⅲ区の西側へと続くことがわかる。位置的にみて、「栗林分間図」で「畑」と「屋敷地」を区画する部分に相当することから、何らかの境界を示しているものと考えられる。



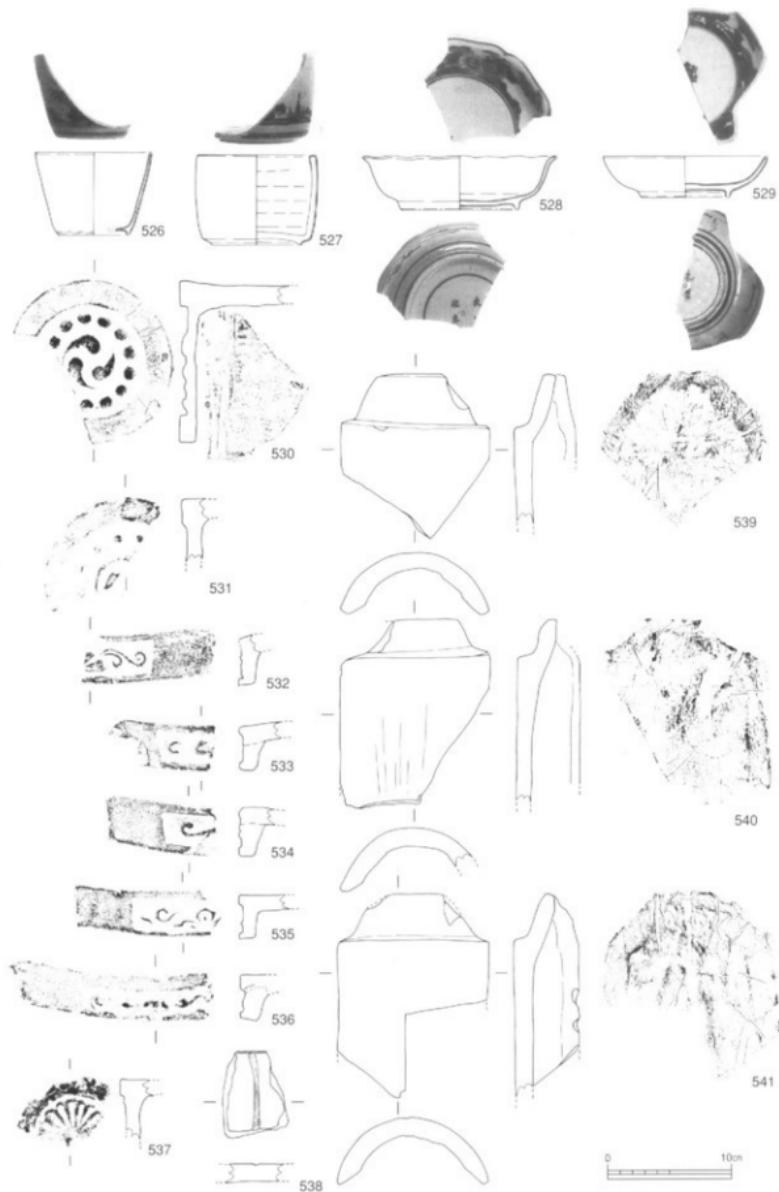
第90図 SX07出土遺物実測図①



第91図 SX07出土遺物実測図②

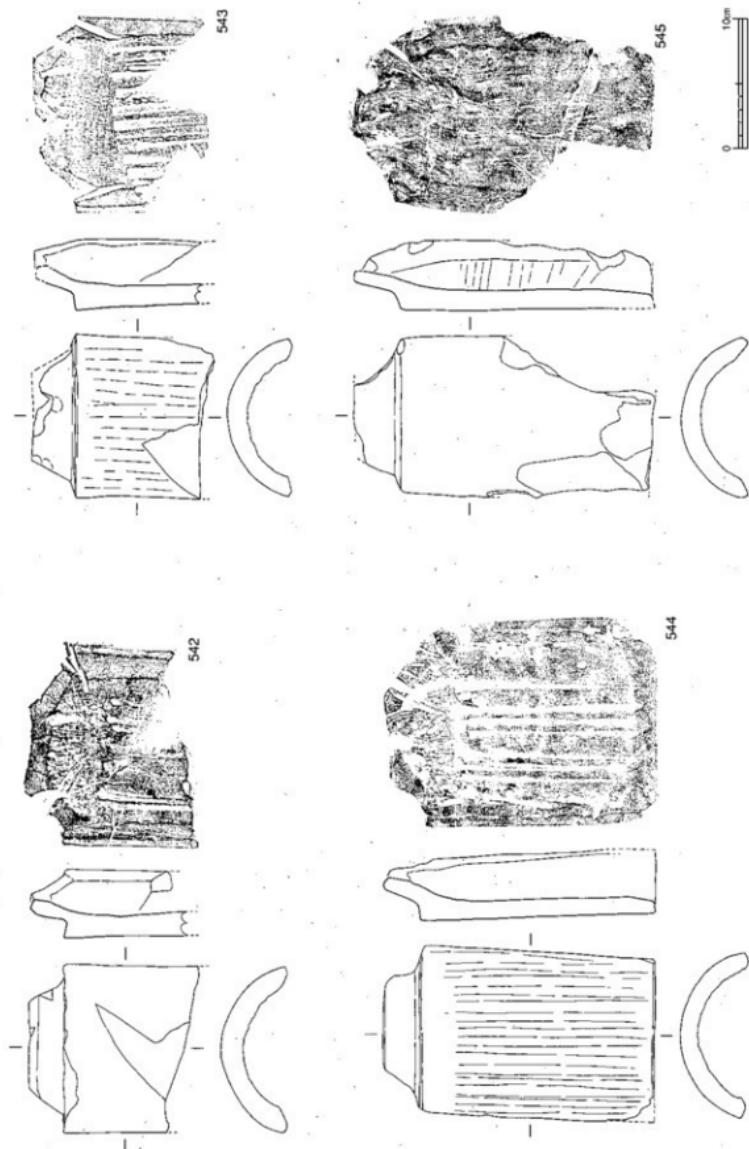


第92図 SX07出土遺物実測図③

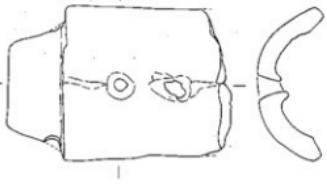
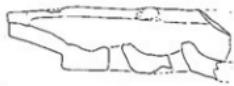
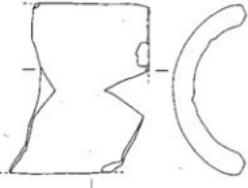
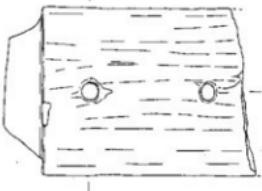
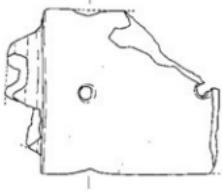
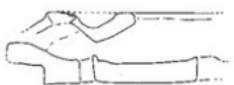
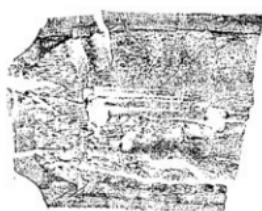
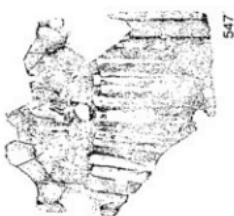


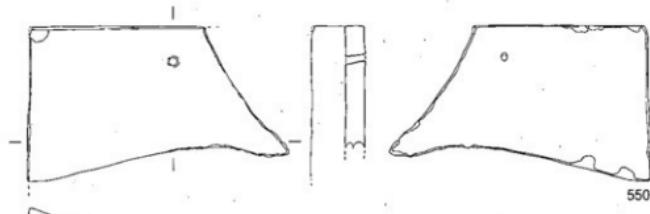
第93図 SX07出土遺物実測図④

第94図 SX07出土遺物実測図⑤

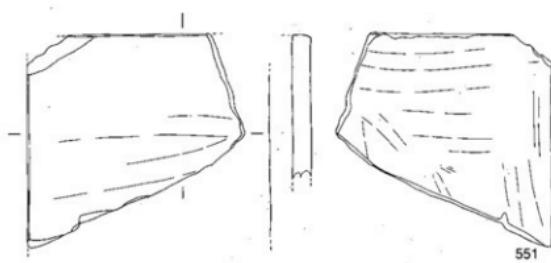


第95圖 SX07出土遺物實測圖⑥

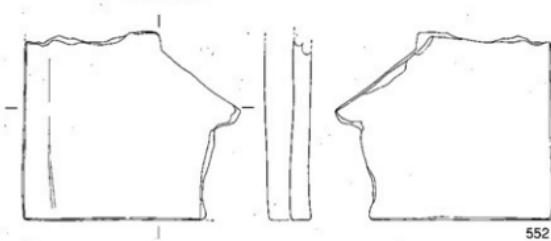




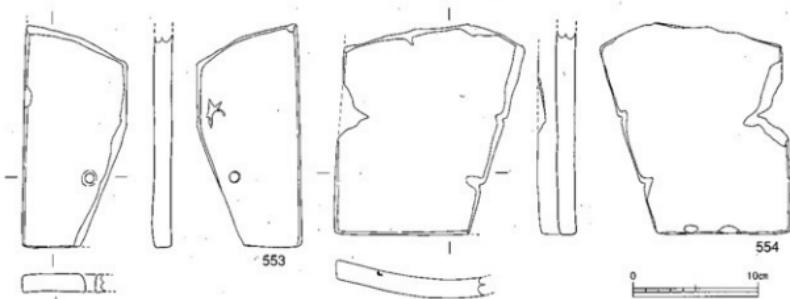
550



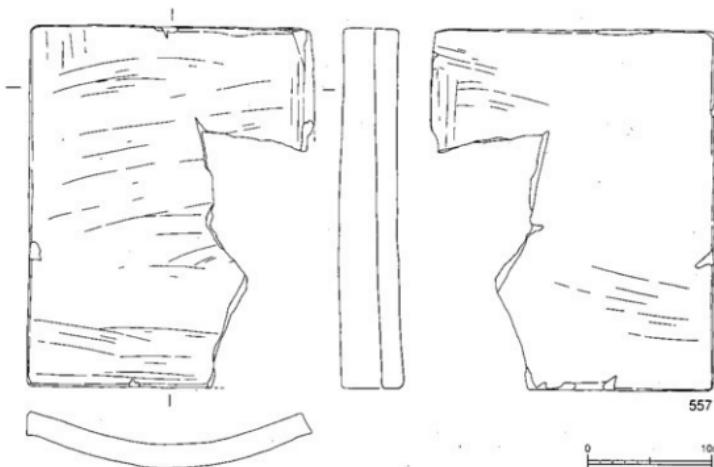
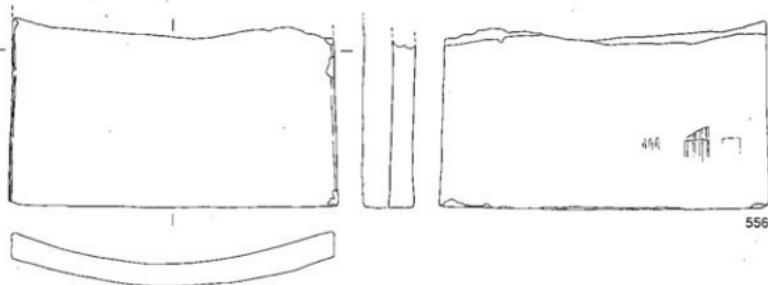
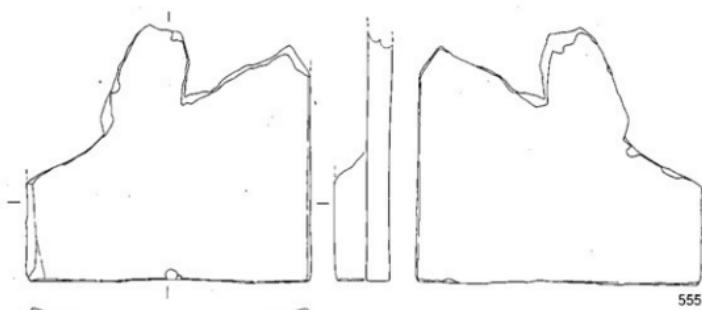
551



552



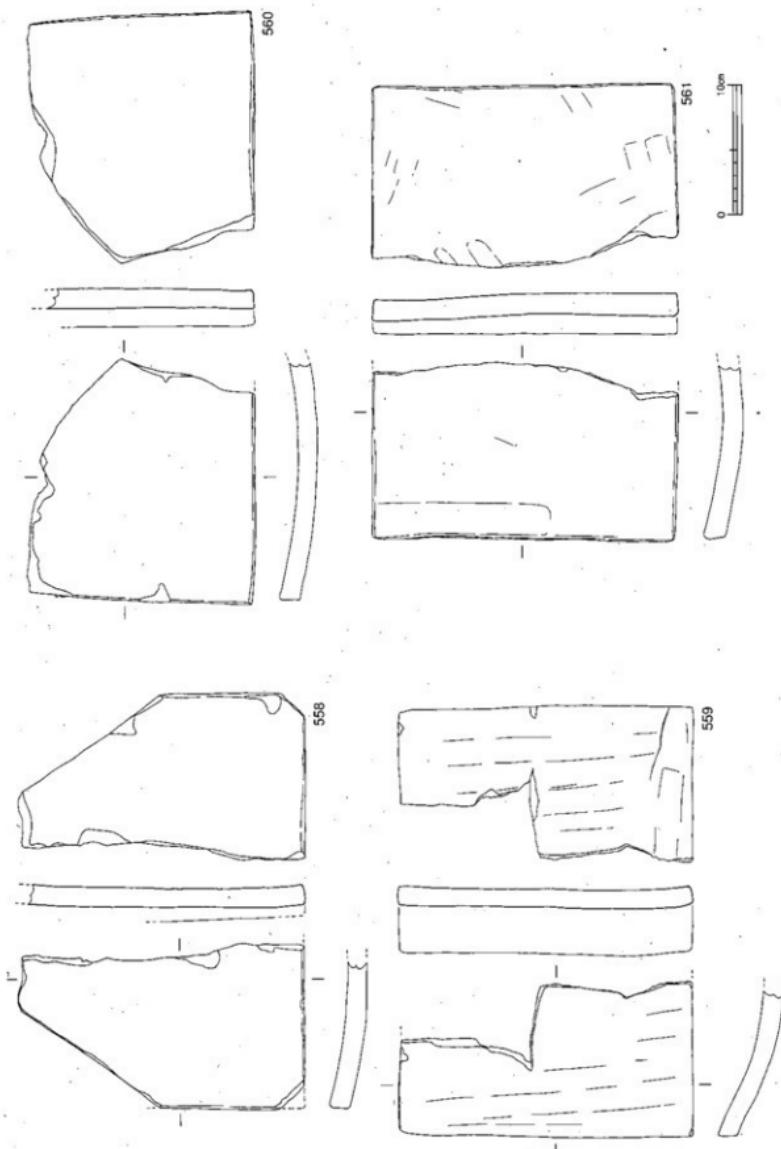
第96図 SX07出土遺物実測図⑦



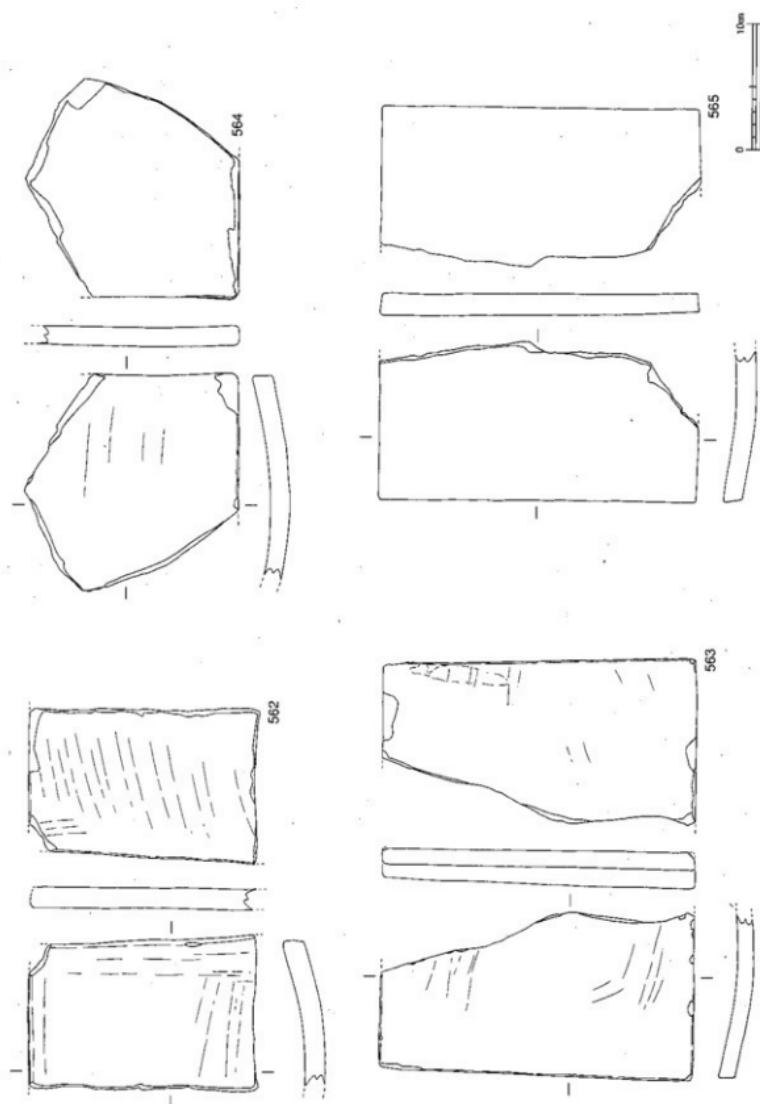
0 10cm

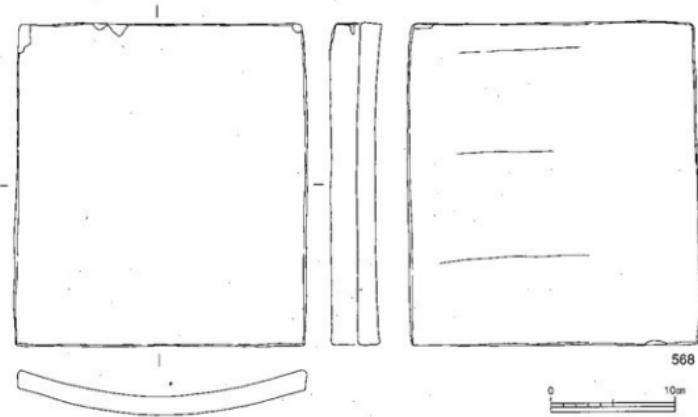
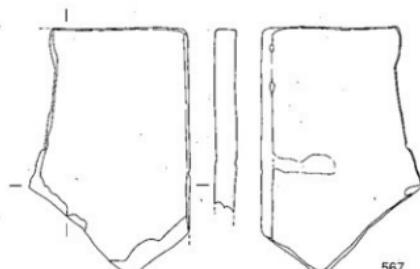
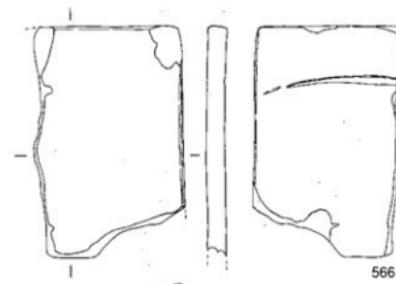
第97図 SX07出土遺物実測図⑧

第98圖 SX07出土遺物實測圖⑨



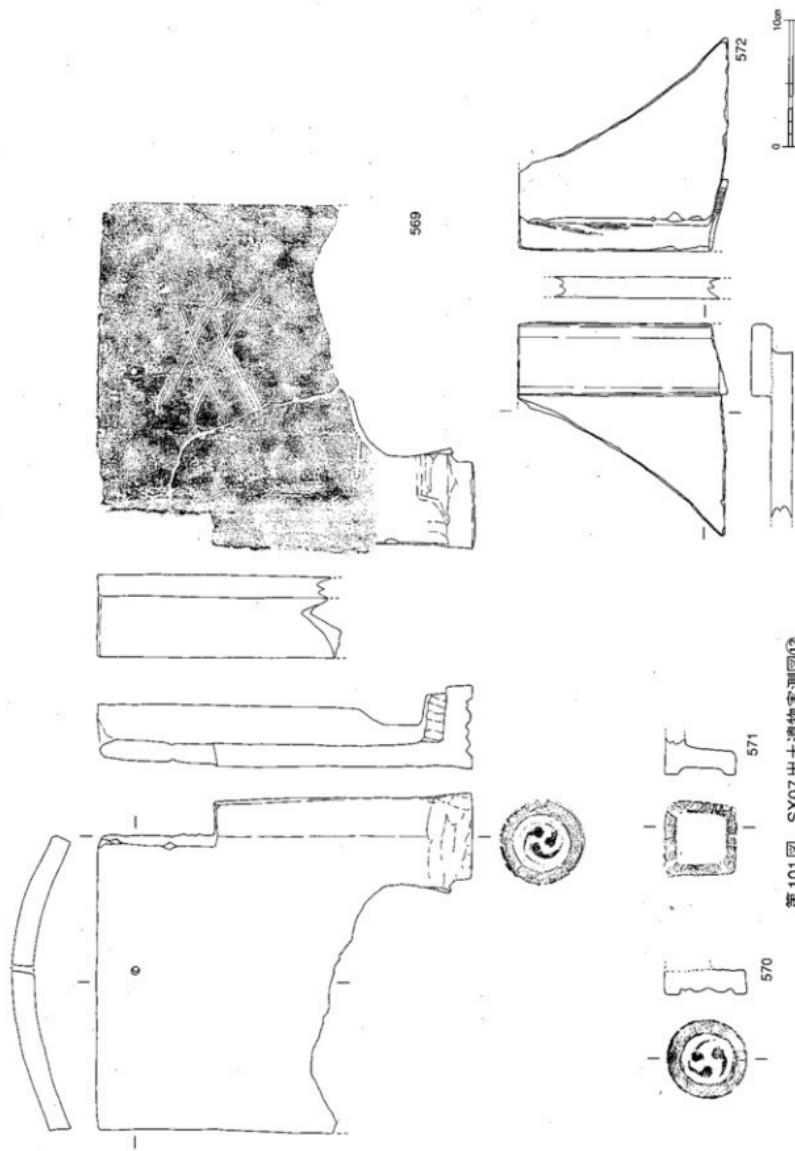
第99圖 SX07出土遺物實測圖①



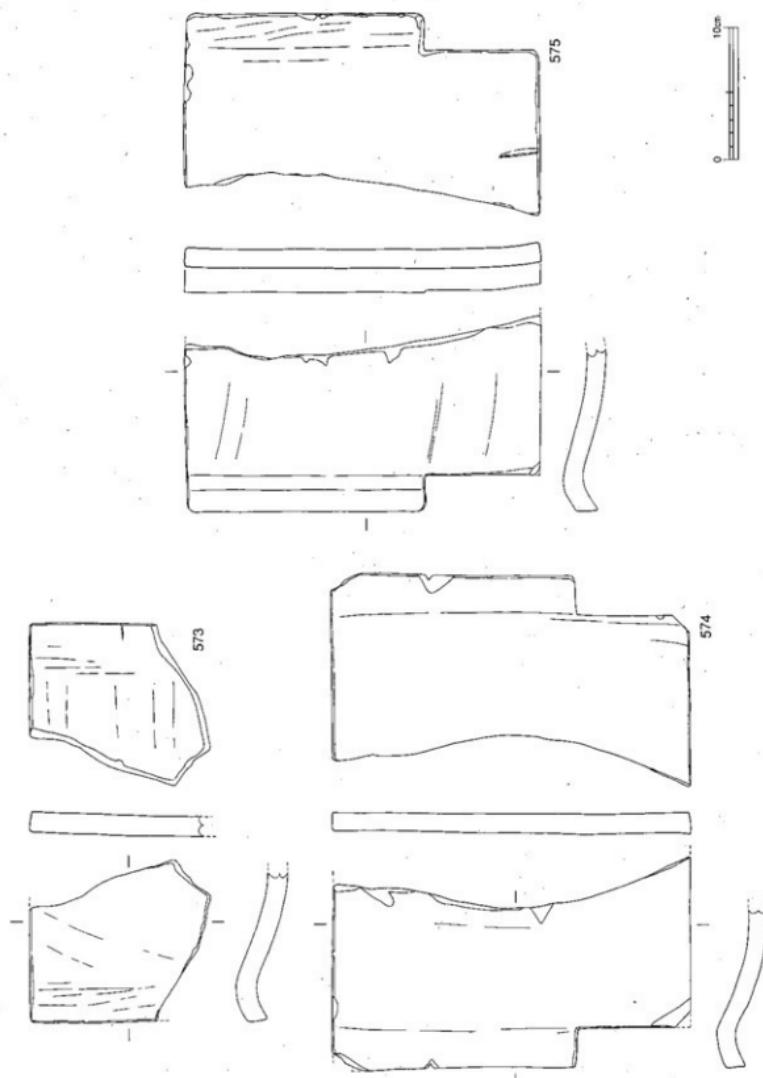


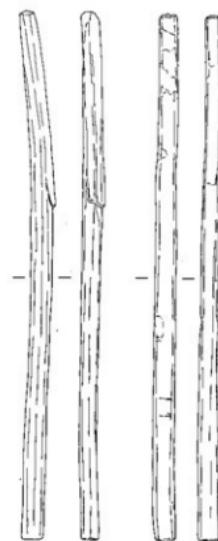
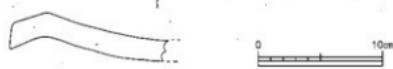
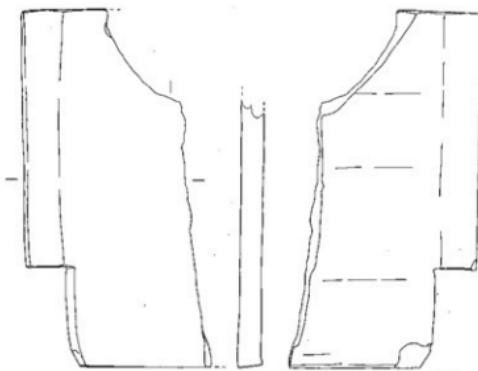
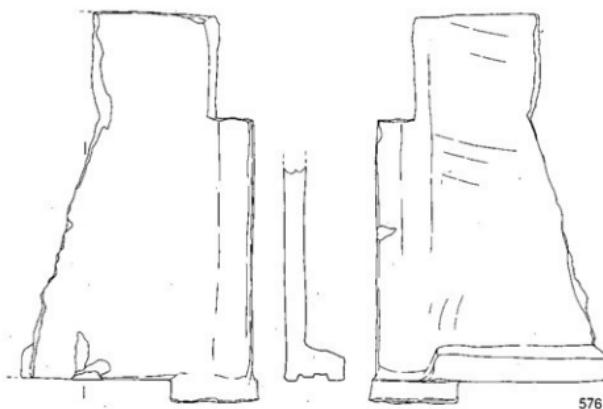
第100図 SX07出土遺物実測図⑪

第101図 SX07出土遺物実測図⑫



第102圖 SX07出土遺物實測圖13



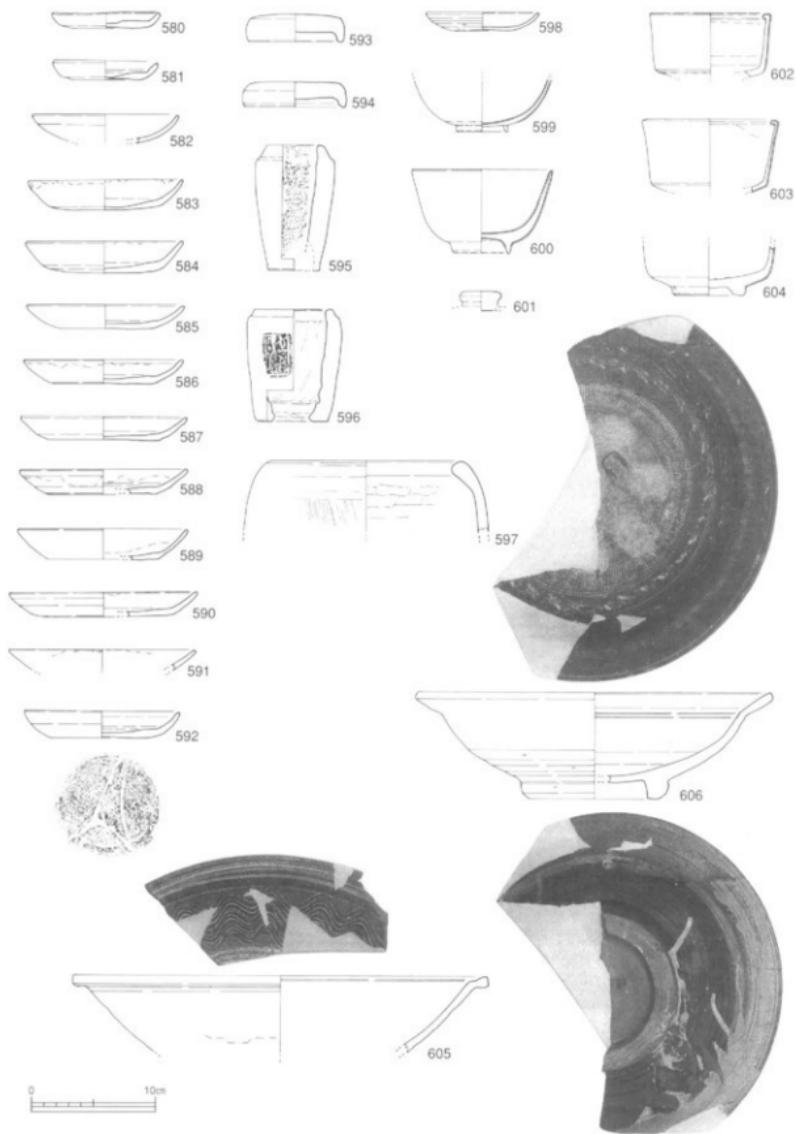


第103図 SX07出土遺物実測図④

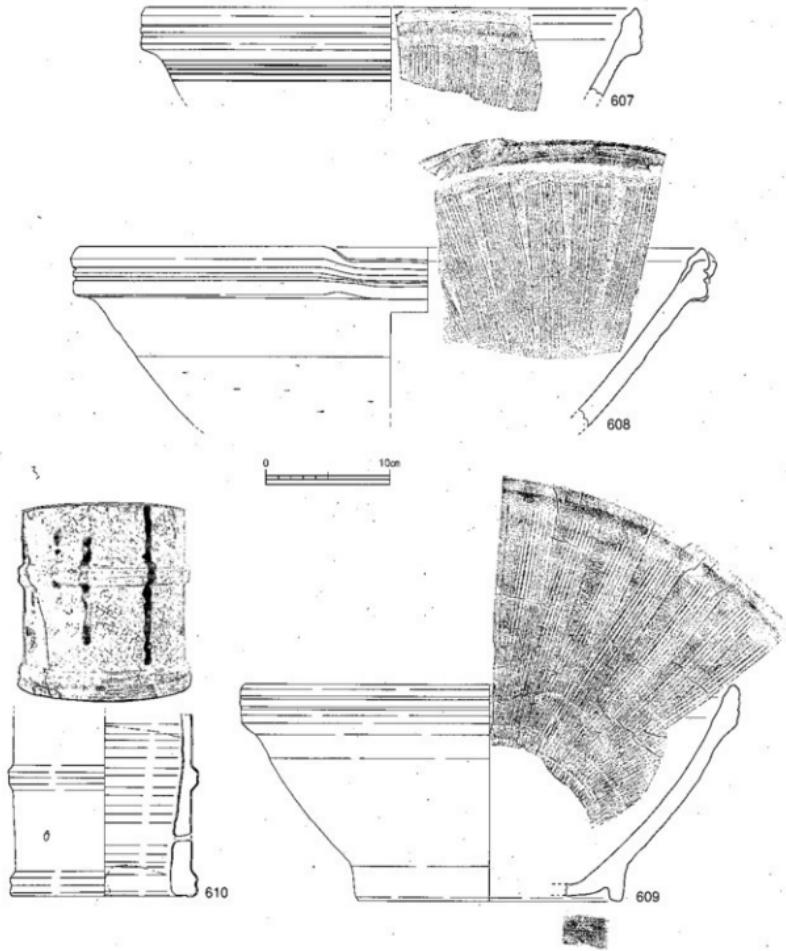
### 整地層（第104～111図）

石列造構の下層、SX07の北側に黒褐色の炭化物を多く含む細砂層が厚さ10～20cm、Ⅲ区の北側まで広がる部分がある。この土層中には多くの陶磁器や瓦類が包含されており、「烟」等を造成する際の普請事業に使用されたものであると考えられる。出土遺物のほとんどが18世紀中葉に属するため、この時期に大規模な造成事業を行われた可能性を示唆する。18世紀中葉は5代藩主頼恭が栗林山莊の修築を完了させてから間もない時期であり、修築事業の一環として行われた可能性も否定できない。

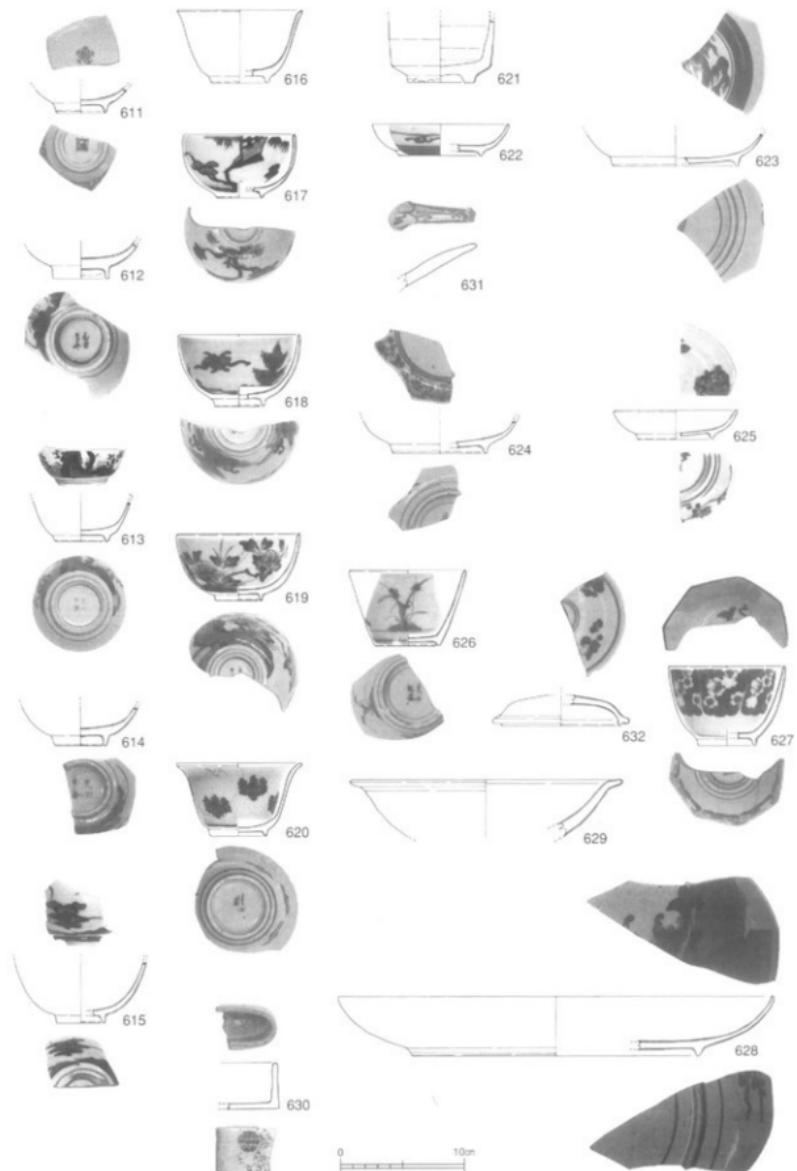
第104～111図はこの整地層から出土した遺物である。580～592は土師質土器の小皿及び皿である。593・594は焼塩壺の蓋、595・596は焼塩壺である。595は無印だが、596には「泉州伊織」の刻印がある。「伊織」とあることから、やはり藤左衛門系の壺塩屋のものとみるのが妥当である。598は備前産の灯明皿である。599・600は陶器の碗である。602～604は陶器の鉢である。605・606はいわゆる刷毛目唐津の大鉢である。606の見込には砂目積の痕跡が顕著である。607～609は備前産の擂鉢である。610は陶器の筒状の器である。底がなく、用途は不明である。611～620は染付の碗である。「大明年製」の銘を持つものや渦福文を持つものがある。621は青磁の香炉である。622は染付の皿である。623～625は染付の皿である。623は玉取獅子の文様があり、また、高台内部の胎土が放射状を描いていることから中国産の可能性が高い。626は染付の猪口である。高台内部に「大明年製」の銘がある。627は染付の八角鉢である。628は染付の大皿（一尺皿）である。629は青磁の大鉢である。630は斐盥である。平面形は長楕円形を呈する。631は散蓮華の持ち手の部分である。内面に文様が認められる。632は染付の蓋である。633～644は巴文軒丸瓦である。635を除き、珠文の数は12個である。直径もほとんど近似しており、同一時期に機能していたものと考えられる。645～652は丸瓦である。ほとんどが有段式のものに属する。屋根に固定するための孔があるものとそうでないものとがある。653～656は唐草文軒平瓦である。軒平瓦は平瓦の端部を瓦当部の上面として利用し、額部のみ貼り付けるという手法を探っている。657～661は平瓦である。



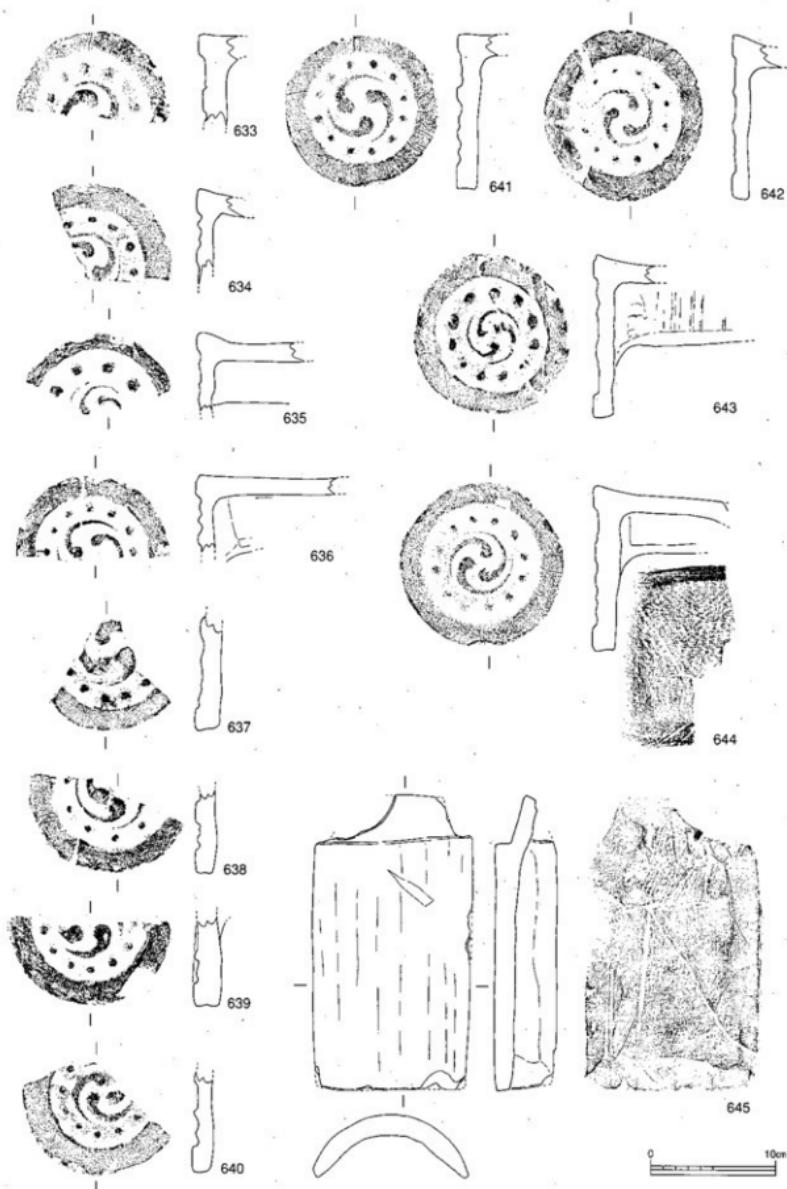
第104図 Ⅲ区整地層出土遺物実測図①



第105図 Ⅲ区整地層出土遺物実測図②

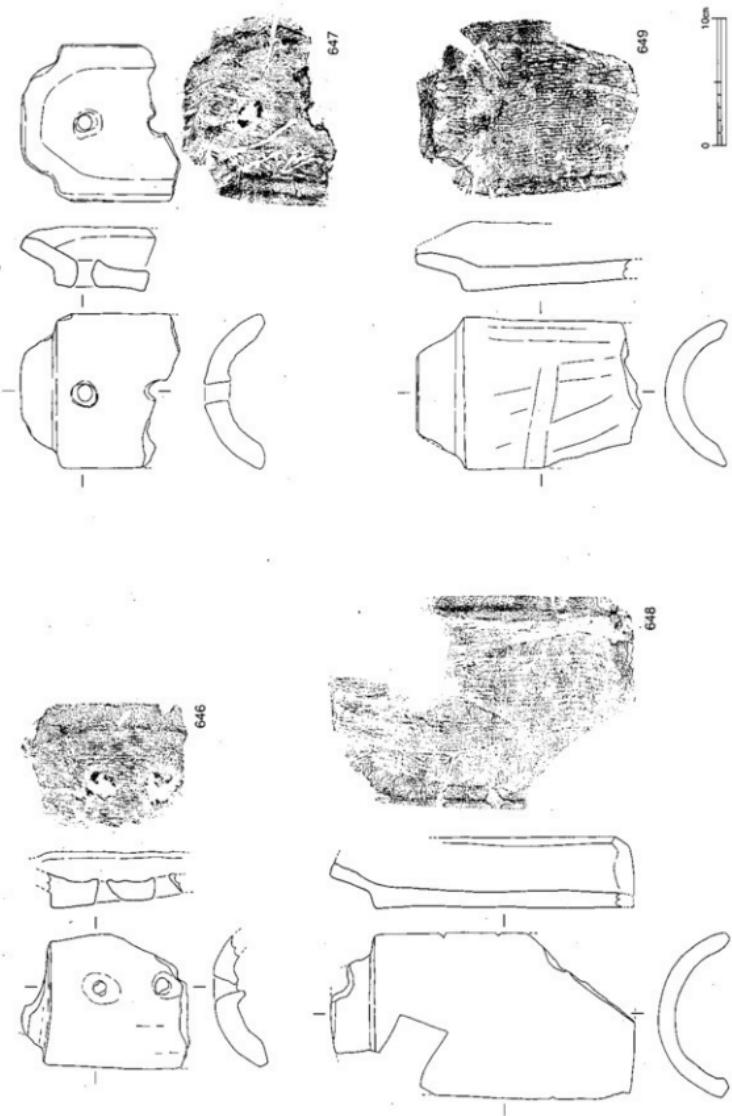


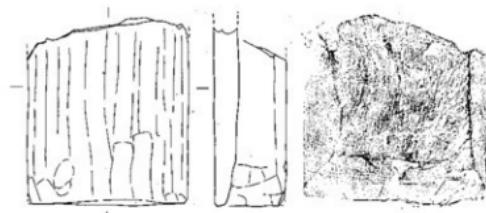
第106図 III区整地層出土遺物実測図③



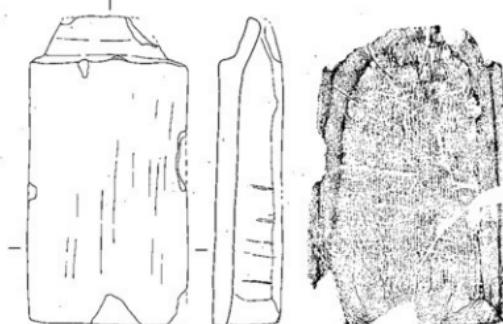
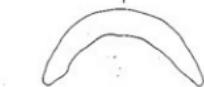
第107図 Ⅲ区整地層出土遺物実測図④

第108圖 Ⅲ區整地層出土遺物實測圖(5)

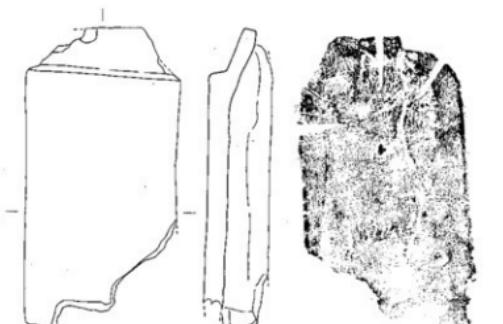




650



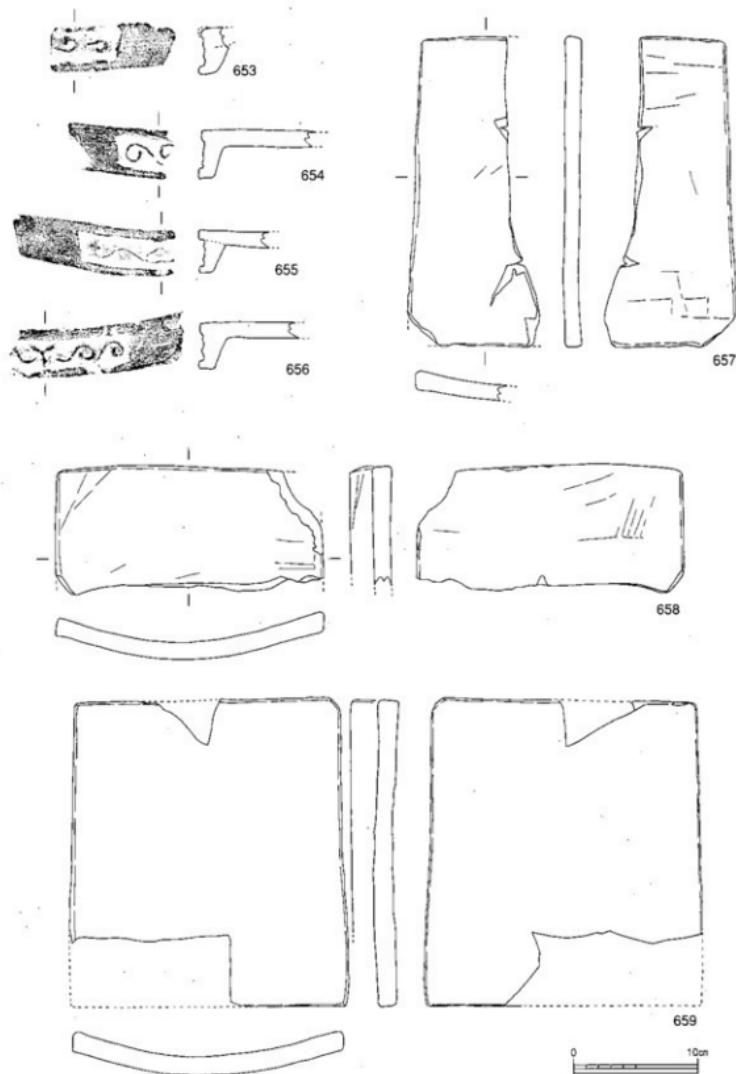
651



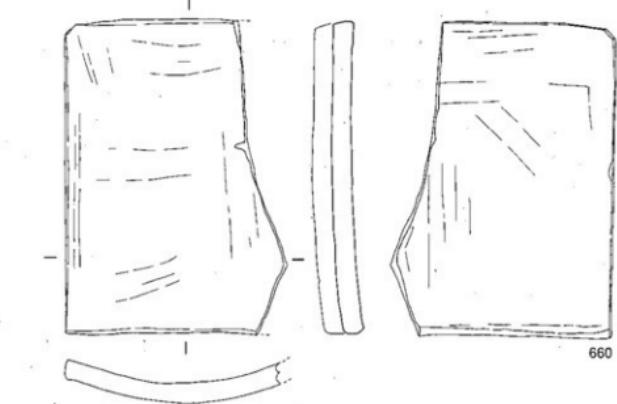
652



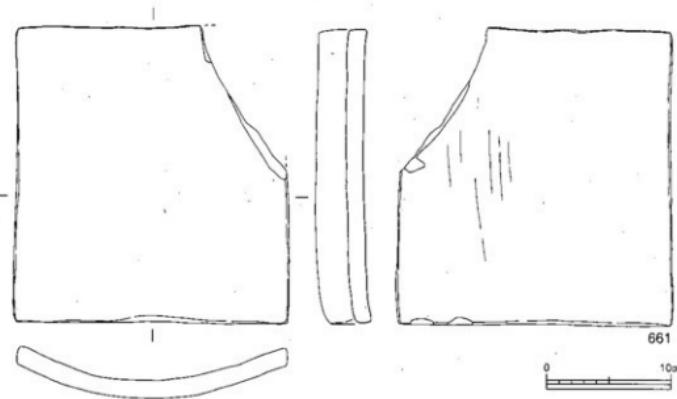
第109図 III区整地層出土遺物実測図⑥



第110図 Ⅲ区整地層出土遺物実測図⑦



660

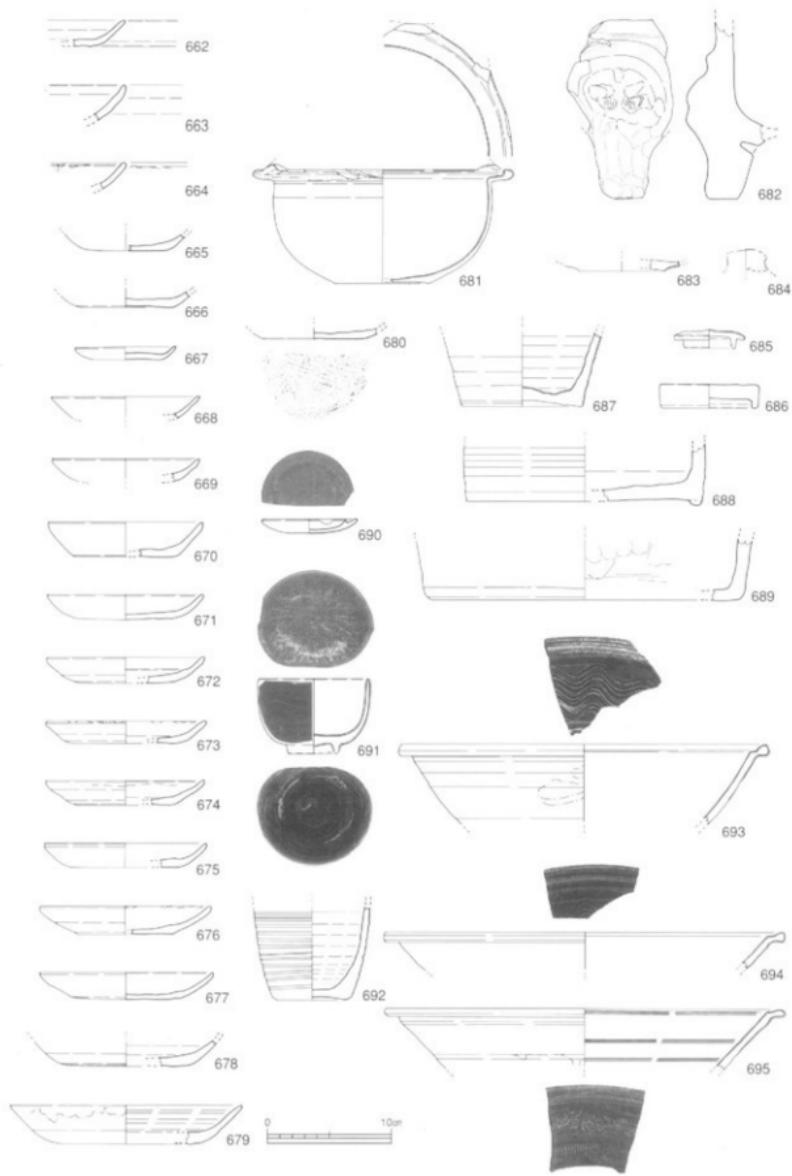


661

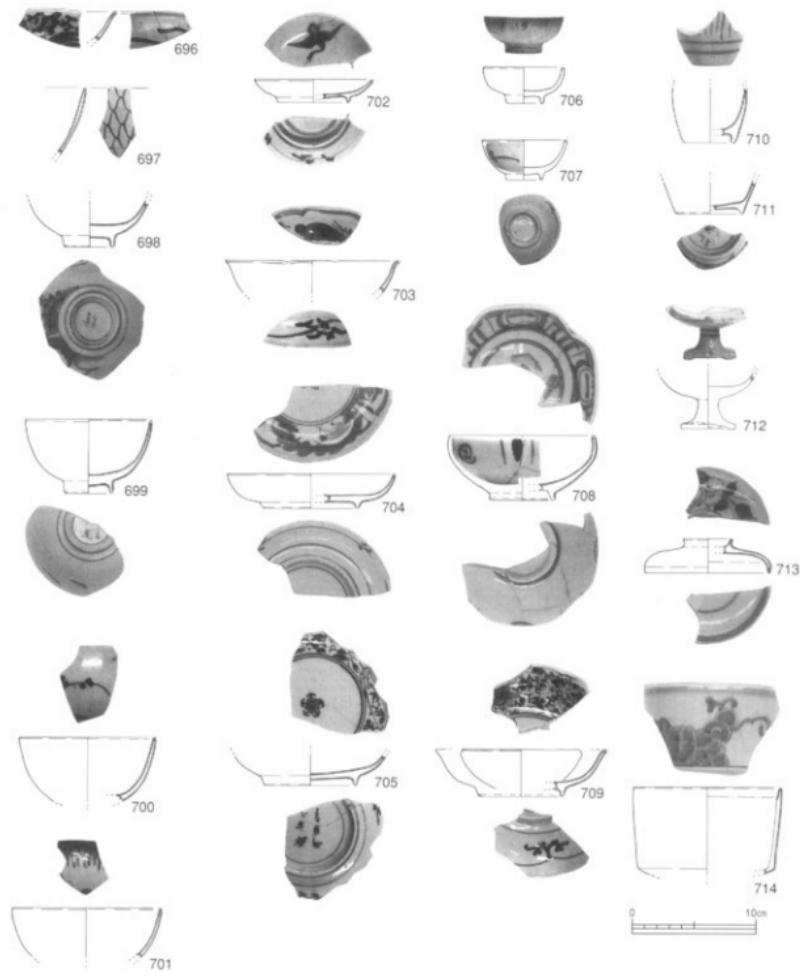
第111図 Ⅲ区整地層出土遺物実測図⑧

#### その他の遺物（第112図～第121図）

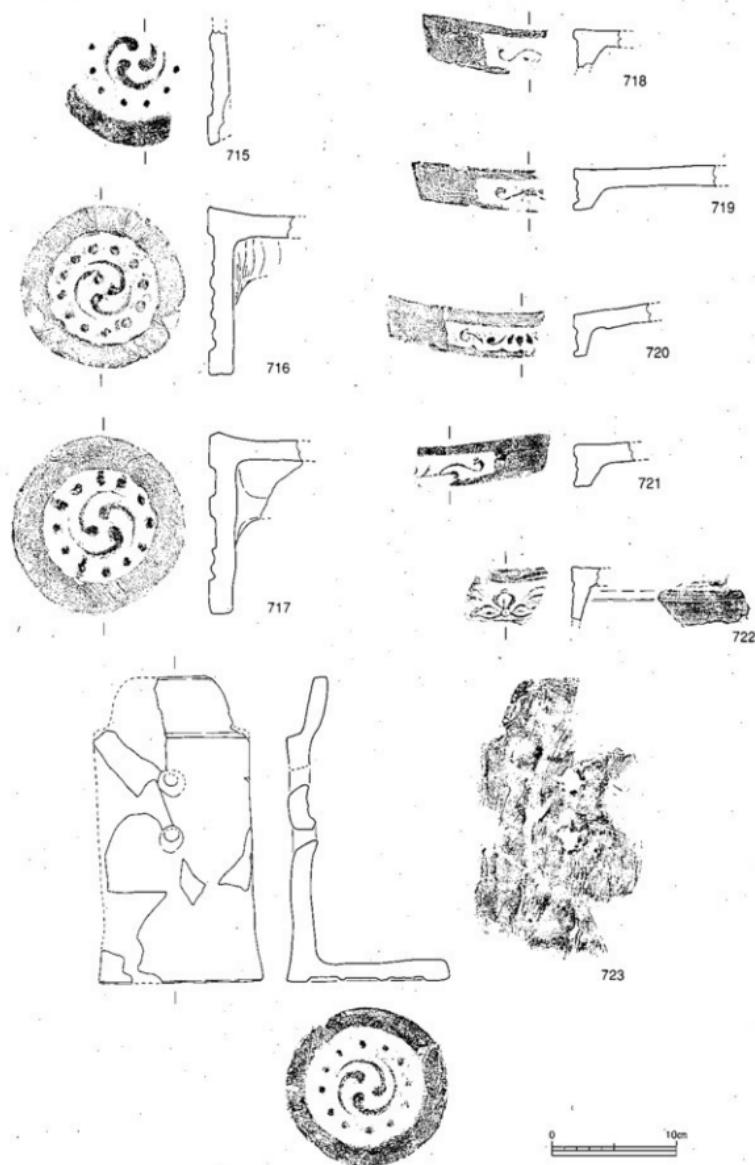
第112～121図はⅢ区の包含層から出土した遺物である。Ⅲ区は西南の隅が大規模な現代の搅乱によって破壊されており、その部分からも明治以降の大量の遺物が出土しているが、ここでは割愛する。662～680は土師質土器の小皿及び皿である。681は陶器の土鍋もしくは土瓶である。682は瓦質土器の火鉢の脚部と思われる。外面には動物が浮き彫りにされている。685は陶器の蓋である。686は焼塙蓋の蓋である。688・689は窯道具の一種と考えられる。690は備前産の灯明受皿である。691は唐津産の碗である。692は備前産の壺と思われる。693～695は刷毛目唐津の大鉢である。696～701は染付の碗である。702～705は染付の皿である。702は内面に鶴が描かれている。703は輪花皿である。705は見込に五弁花文、高台内部に「大明成化年製」の銘がある。706・707は染付の酒盃である。708・709は染付の鉢である。710・711は徳利もしくは猪口の体部から底部である。712は仏飯器の脚部と思われる。713は染付の蓋、714は染付の蓋物である。715～717、723は巴文軒丸瓦である。717には珠文の4箇所に汎傷が認められ、汎が相当痛んでいることを示している。718～722は唐草文軒平瓦である。724～735は丸瓦である。ほとんどが有段式のものと考えられる。736～748は平瓦である。740はいわゆる植し瓦であり、「明治三十一年」という刻印があり、園内にあった博物館に関連するものと考えられる。749はサヌカイト製の石器である。削器と考えられる。750は硯の破片である。上下部分が欠損している。



第112図 III区包含層出土遺物実測図①

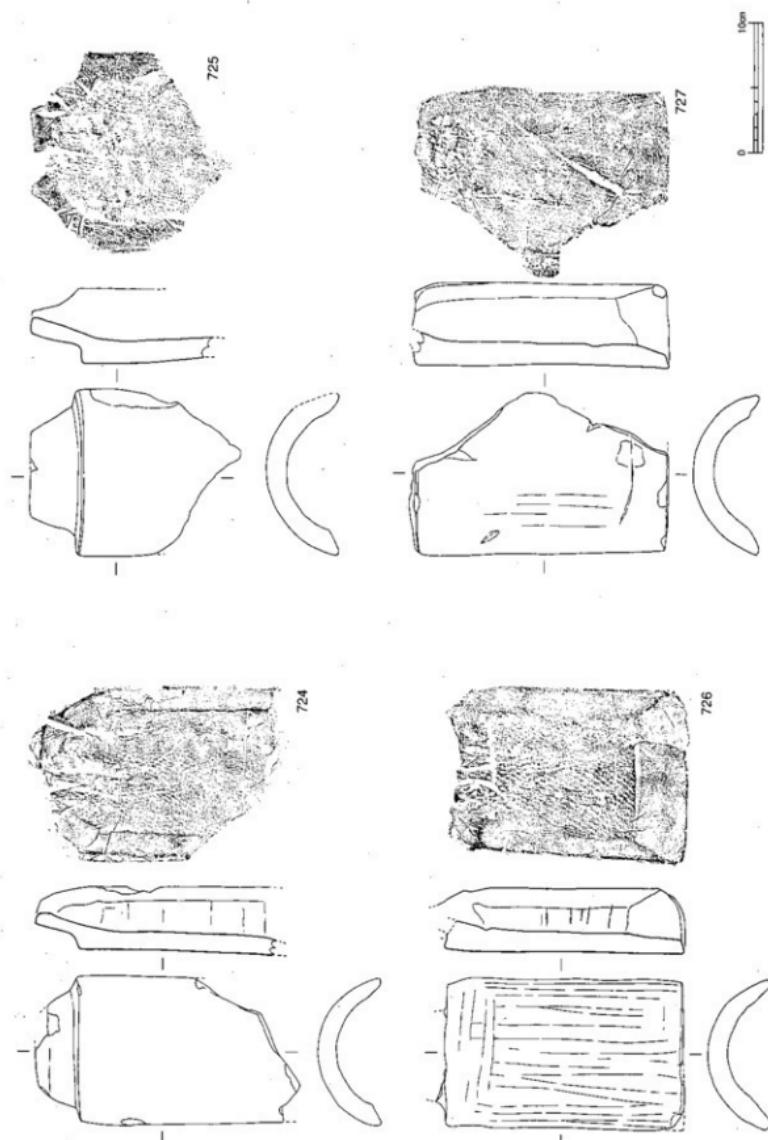


第113図 Ⅲ区包含層出土遺物実測図(②)



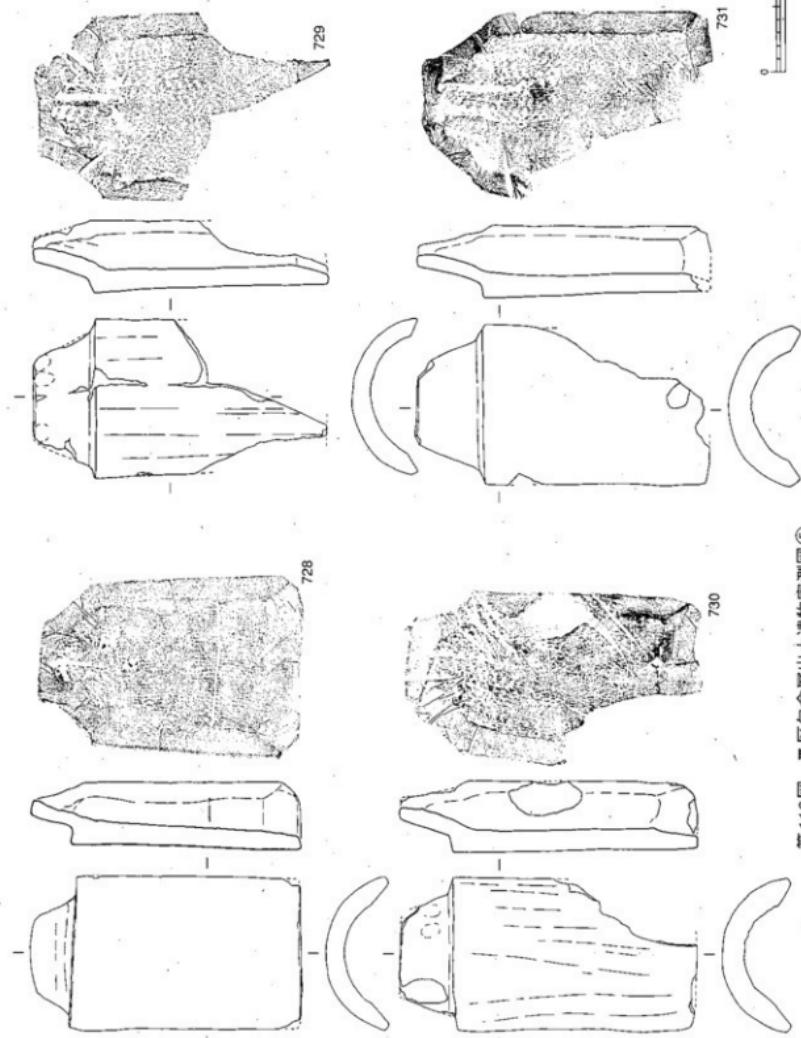
第114図 Ⅲ区包含層出土遺物実測図③

第115图 Ⅲ区包含层出土遗物实测图④

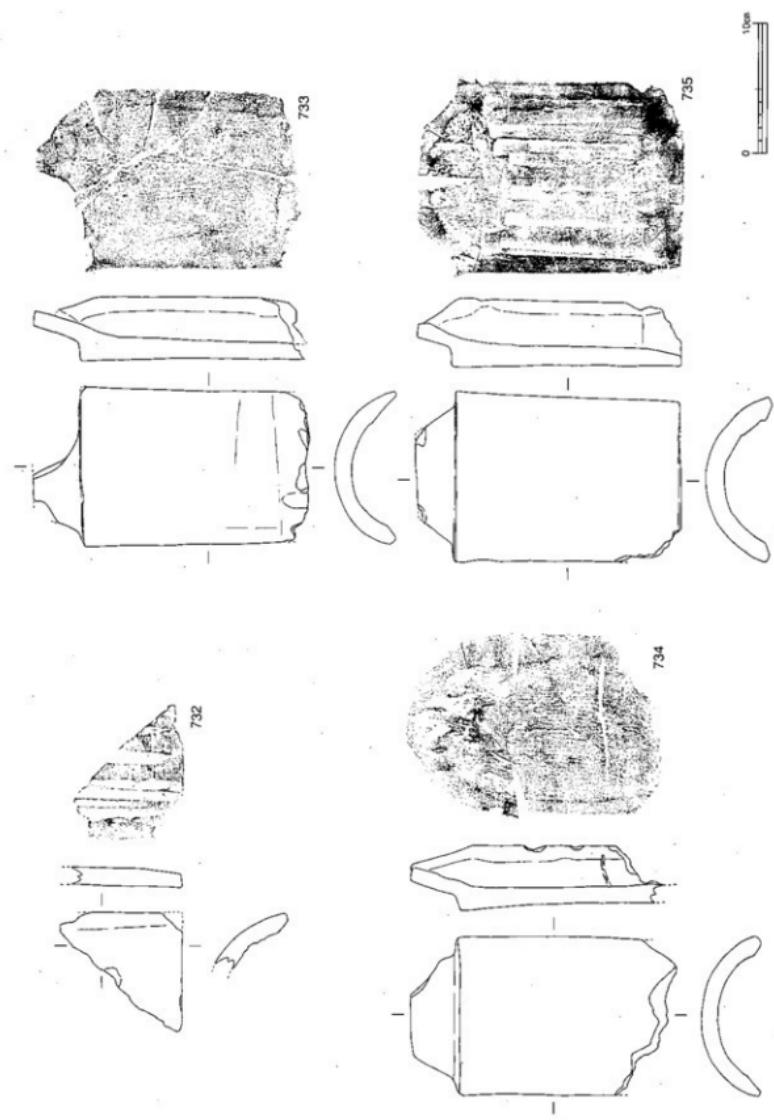


10cm

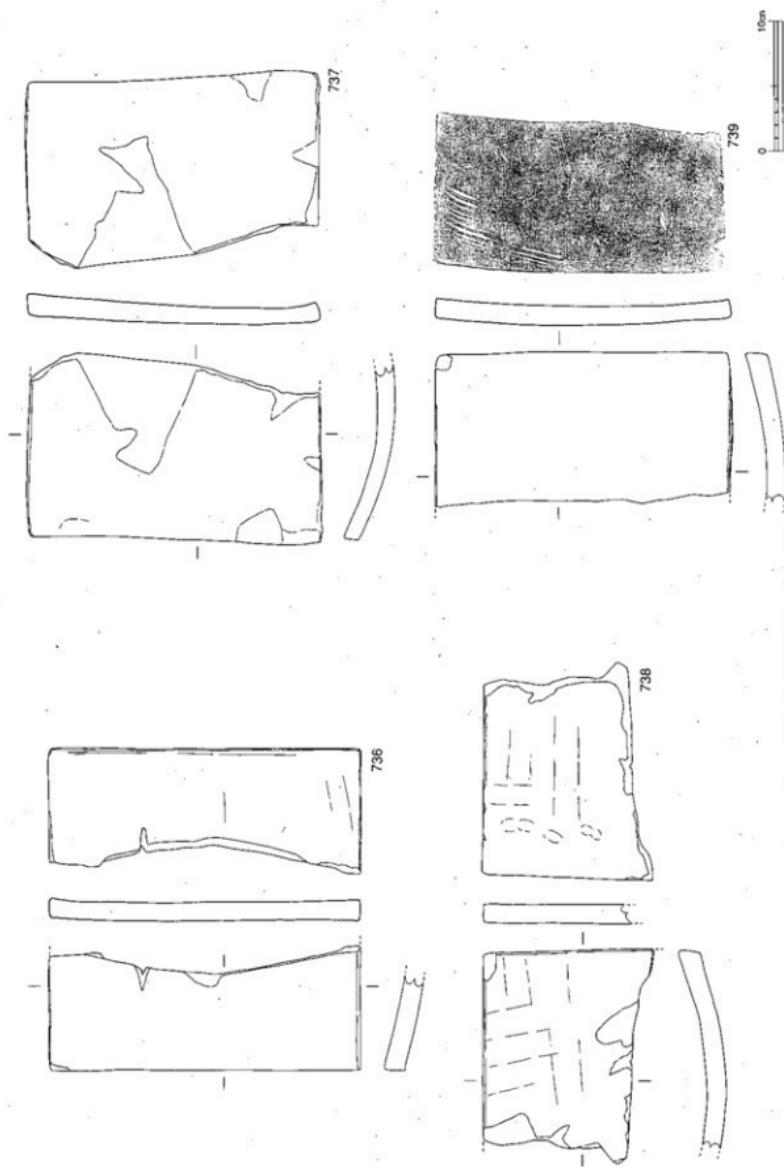
第116圖 III區包含層出土遺物實測圖⑤



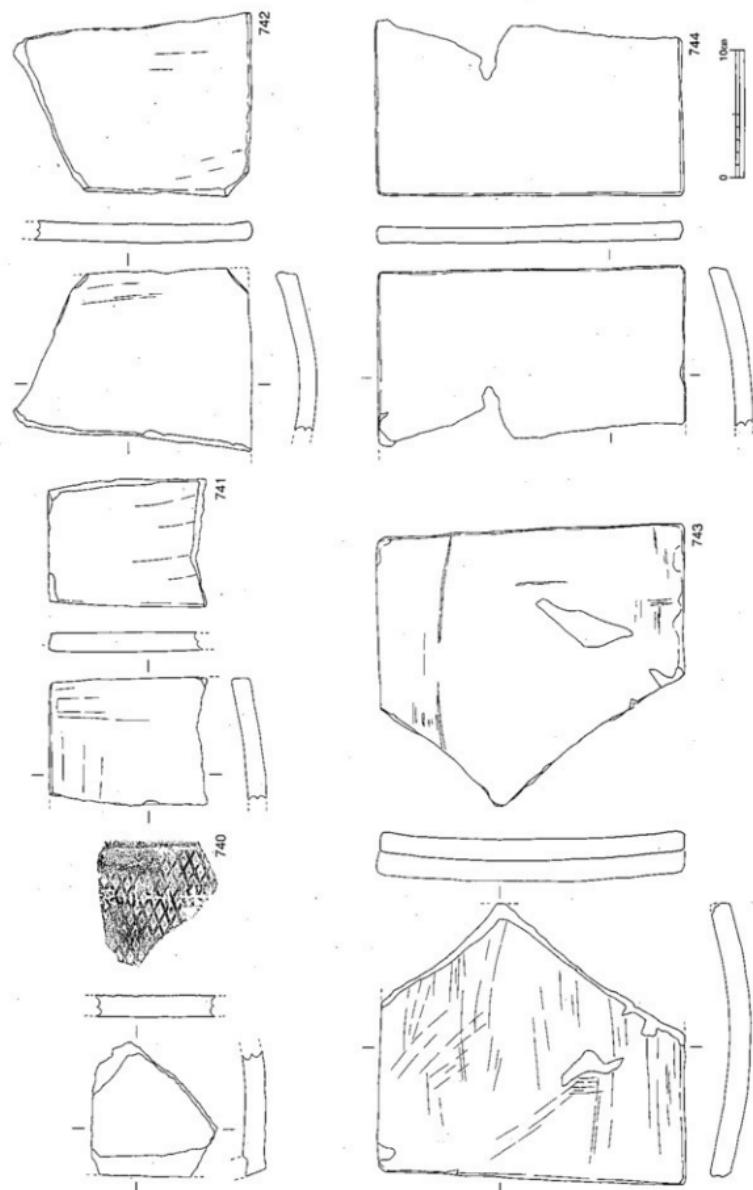
第117图 Ⅲ区包含层出土遗物实测图⑥



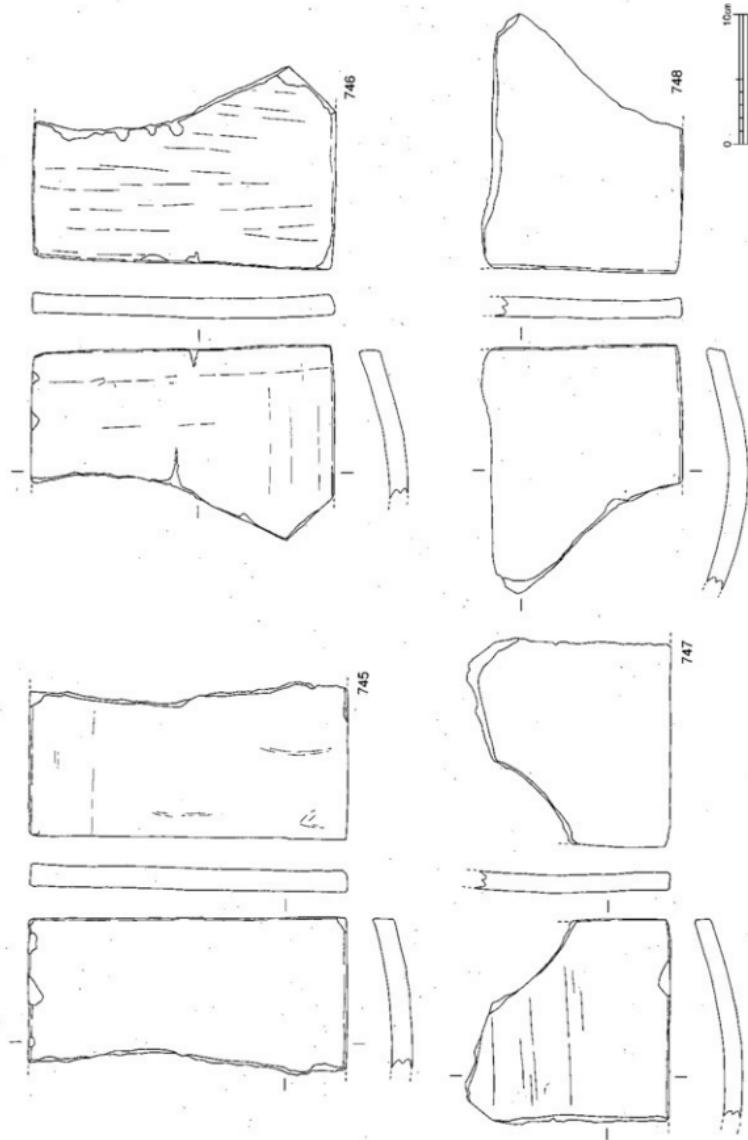
第118図 Ⅲ区包含層出土物実測図⑦

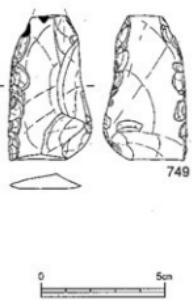


第119圖 III區包含層出土遺物實測圖⑧



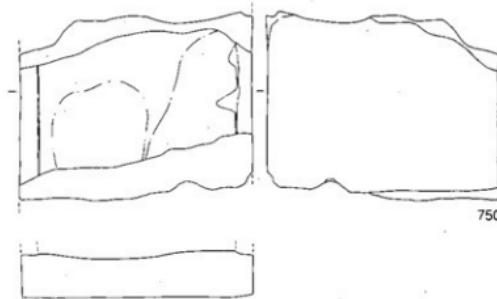
第120圖 III區包含層出土遺物測量圖⑨





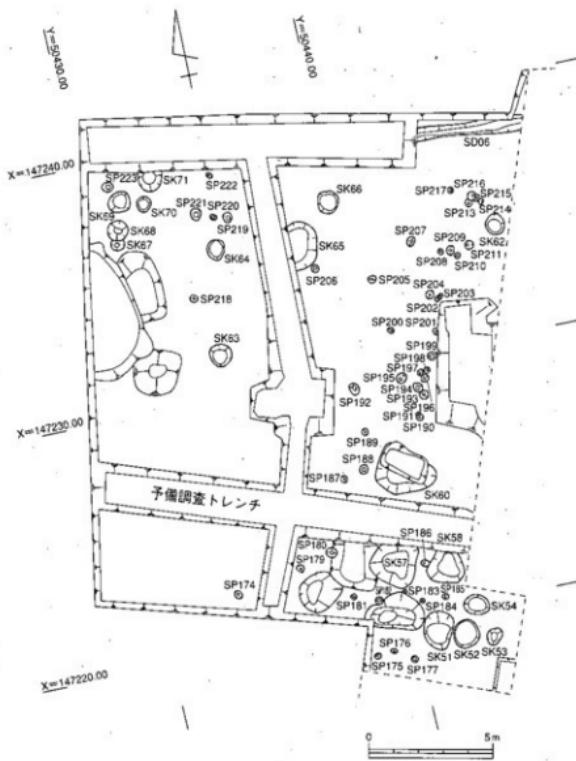
749

0 5cm

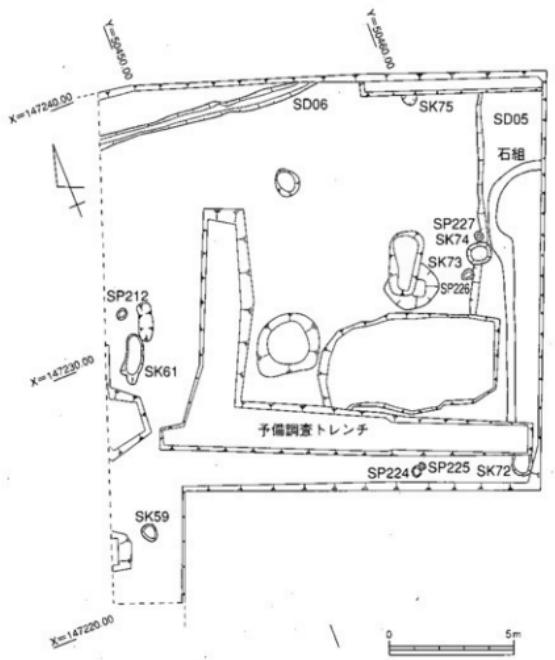


750

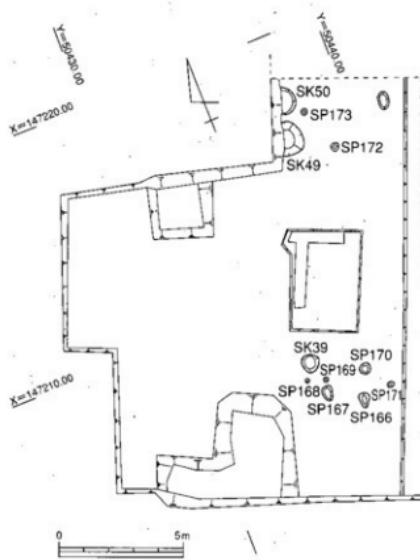
第121図 III区包含層出土遺物実測図⑩



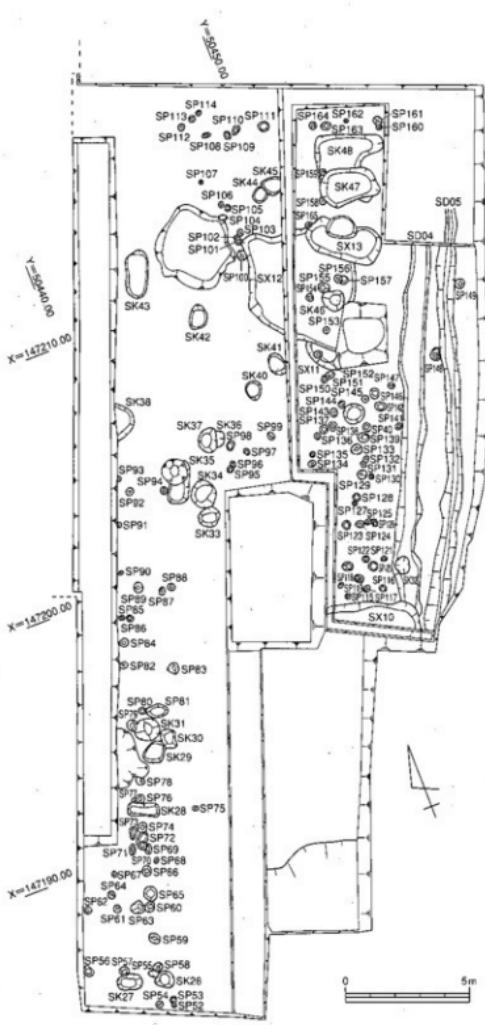
第122図 N-1区造構配置図 (1/200)



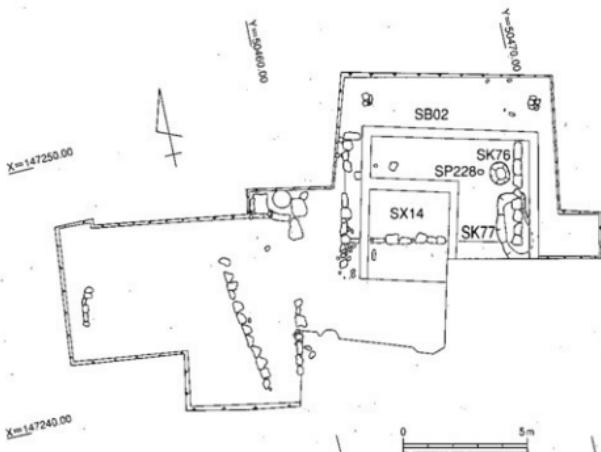
第123図 M-2区造構配置図 (1/200)



第124図 N-3区遺構配置図 (1/200)



第125図 IV-4区遺構配置図 (1/200)



第126図 IV-5区遺構配置図 (1/200)

## 第6節 IV区の調査

IV区は今回の調査範囲のうち、最も大きい面積を占める区域であり、動物園跡地内の北寄りの部分に当り、「栗林分間図」においては「屋敷地」との記載された地区に当る。調査対象面積は2,365m<sup>2</sup>である。

調査範囲が他の地区に比べて広いので、北西部のIV-1区、北東部のIV-2区、南西部のIV-3区、南東部のIV-4区、さらに北端部の旧管理事務所跡地をIV-5区と称し、以下、遺構別の概要を記す。

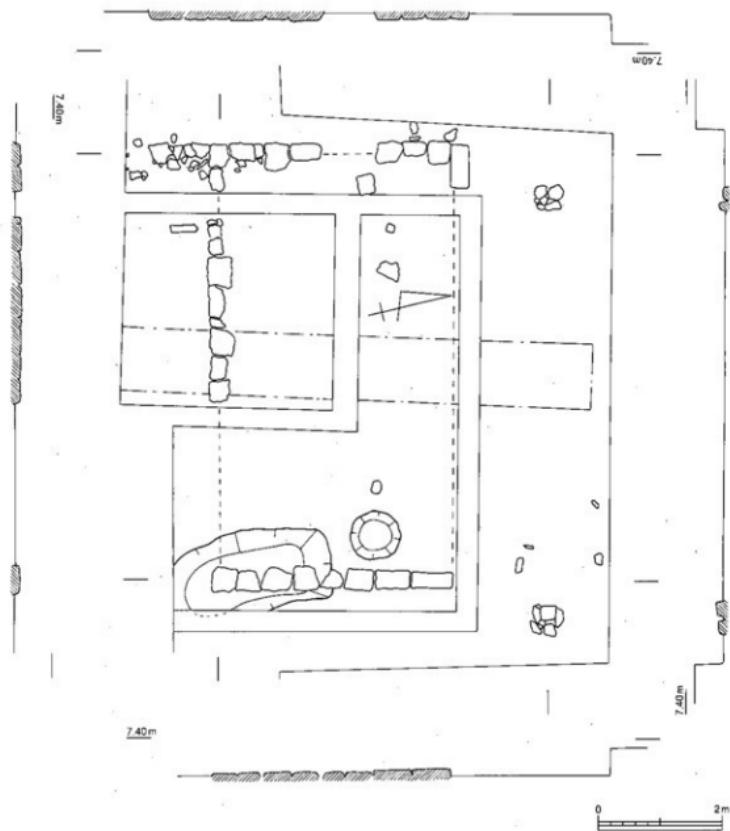
### SB02 (第127・128図)

IV-5区で検出した礎石建物跡である。調査開始以前には旧管理事務所が所在しており、この基礎や浄化槽の埋設等で、大部分が破壊されていた。礎石建物跡は直方体の石材を柱の位置に隙間なく並べたもので布基礎と呼ばれる工法である。石材は花崗岩と安山岩が混在している。安山岩には高松市内で採取できるものと豊島石と呼ばれる風化の著しいものが認められる。建物跡は東西に長く、北側の礎石列はほとんど旧管理事務所の基礎により破壊されていた。南側は旧管理事務所の基礎よりも内側にあったため、残存状況は良好であった。東側と西側についても旧管理事務所の基礎でほとんど破壊されていたが、北西のコーナー部がかろうじて残っていたため、おおよその規模が推定できた。南北3.8m、東西7.2mを測り、さらに西南のコーナーから南側に石列が延びる。この石列は本体部分とは石材の大きさ、加工の度合いに明らかに違いが認められ、増築によるものと考えられる。増築の規模は現代の搅乱によって、大部分が破壊されていたため、明らかにはできなかった。

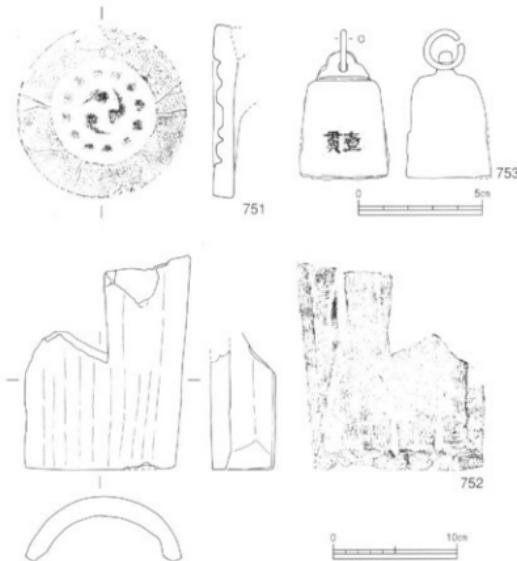
第128図はSB02の礎石周辺から出土した遺物である。751は巴文軒丸瓦、752は丸瓦である。753は鉄製品の分銅である。外面に「毫貫」もしくは「貫毫」と浮き彫りされている。しかしながら、重量は

一貫にはほど遠く、実態は不明である。

これらの遺物は概ね、19世紀後半のものであり、SB02が破壊しているSK77からは19世紀後半以前の遺物が出土しており、これらのことからSB02は少なくとも19世紀後半に建築された建物と考えられる。この時期には「栗林分間図」をはじめ弘化年間の「栗林古図」等いくつかの絵図が伝わっており、そのいずれにも切手御門すぐの南側に東西に長い建物が描かれていることから、この建物である可能性が高い。



第127図 SB02平・断面図（1/80）

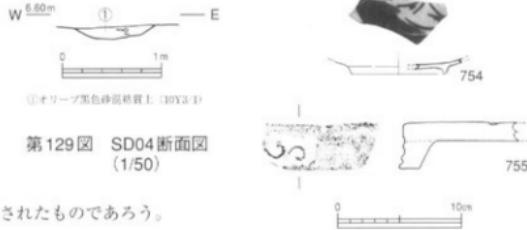


第128図 SB02出土遺物実測図

#### SD04（第129・130図）

IV-4区の東側を南北に流れる溝状遺構である。幅は最大0.8m、深さは10cmを測る。一部旧動物園の搅乱で破壊されている。埋土中からは明治以降の遺物が出上しているため、園地の排水等の目的で掘削されたものであろう。

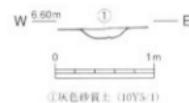
754は染付の皿である。755は唐草文軒平瓦の一部である。



第130図 SD04出土遺物実測図

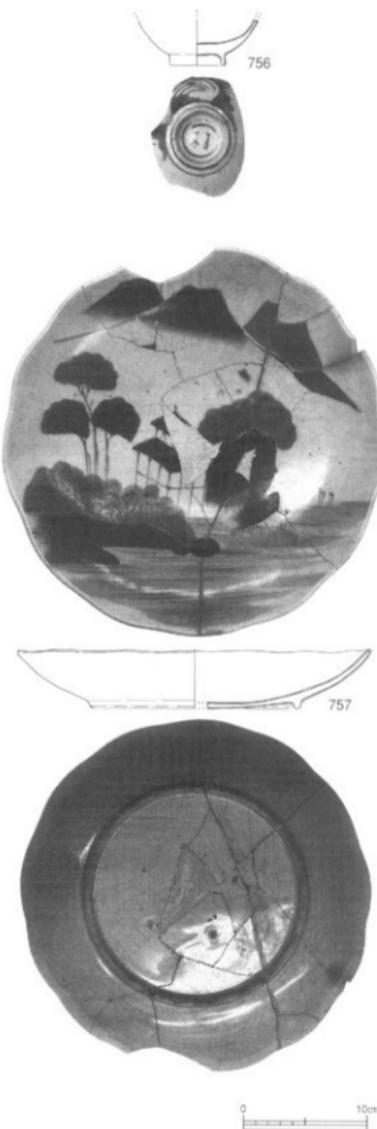
#### SD05（第131～133図）

III区から続く溝状遺構で、III区SD02の北側の延長にあたる。IV-4からIV-2区まで続き、IV-2区北寄りの部分では直角に向きを変え、東へ流れる。おそらく、東側土壌の下層を通り、濠へ続く排水路であると考えられる。IV-4区では最大幅50cm程度で深さも10cm程度と浅いが、IV-2区では幅は1.5m、深さも50cmと規模が格段に大きくなる。しかもIV-2区部分では第132図のように、東側の肩が土壌に取り付き、西側は護岸のための石組となっている。石組ははば直線を呈しながら北流し、





第132図 SD05内石組構造平・断面図  
(1/50)



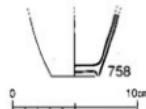
IV-2 区北寄りの部分で弧を描きながら東側の土壘へと続く。土壘上は漆及び保存木等の現状変更ならばに再整備計画等の関係で調査対象外となっていたため、土壘下部の様相は不明である。

756は染付の碗である。高台内部に「大明年製」の銘がある。757は染付の輪花大皿である。直径はおよそ30cm、つまり一尺皿である。外面には文様ではなく、内面には山水文が描かれている。窯道具の痕跡が高台内部に認められる。18世紀後半以降のものと考えられる。

SD05は東側に設けられた土壘の西側に沿うように構築された排水路であると考えられ、東へ屈曲するコーナー部は「栗林分間囲」に土壘のそばに四角い記号で示された枠状の施設に比定できる可能性が高いと考えられる。

#### SK31（第134図）

IV-4 区の南部で検出した土坑である。第134図は土坑SK31から出土した遺物である。758は染付の猪口である。立ち上がりが直線的である。



#### SK34（第135図）

IV-4 区のはば中央部で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径1.1m、深さ30cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。

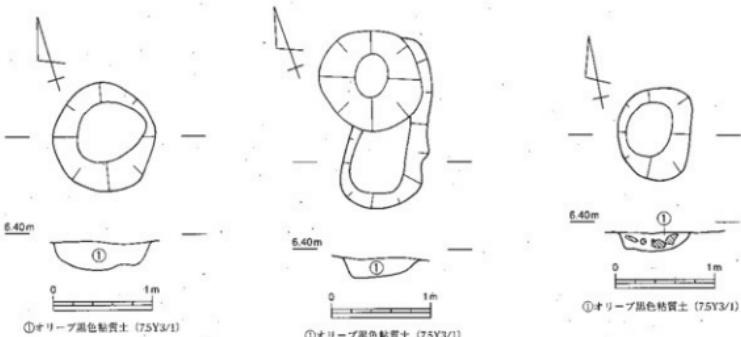
第134図 SK31  
出土遺物実測図

#### SK35（第136図）

IV-4 区のはば中央部SK34の北側で検出した土坑である。歪な長楕円形を呈し、北側を搅乱によって破壊されているため、全体の規模は不明であるが、長径1.8m、短径0.8m、深さ20cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。

#### SK37（第137図）

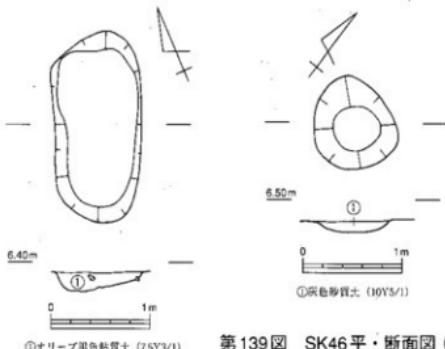
IV-4 区のはば中央部、SK35の北側で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、長径0.9m、短径0.7m、深さ20cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。



第135図 SK34平・断面図(1/50) 第136図 SK35平・断面図(1/50) 第137図 SK37平・断面図(1/50)

**SK43 (第138図)**

IV-4区の北寄りの部分で検出した土坑である。ほぼ楕円形を呈し、長径1.9m、短径0.9m、深さ20cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。



第138図 SK43平・断面図 (1/50)

**SK46 (第139図)**

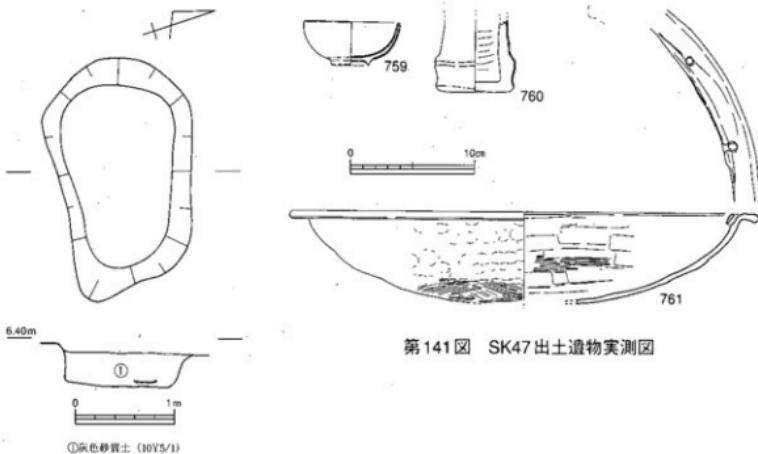
IV-4区の北東寄りの部分で検出した土坑である。やや歪な円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ10cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。

第139図 SK46平・断面図 (1/50)

**SK47 (第140・141図)**

IV-4区の北東部で検出した土坑である。楕円形を呈し、長径2.4m、短径1.4m、深さ40cmを測る。埋土中からは、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。

759は陶器の碗である。761は瓦質土器の鍋、762は瓦類である。



第141図 SK47出土遺物実測図

**第140図 SK47平・断面図 (1/50)**

### SK50 (第142図)

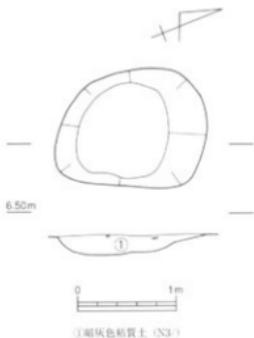
第142図はIV-3区の北端部分で検出した土坑SK50から出土した遺物である。762は陶器の鉢である。



第142図 SK50出土遺物実測図

### SK51 (第143図)

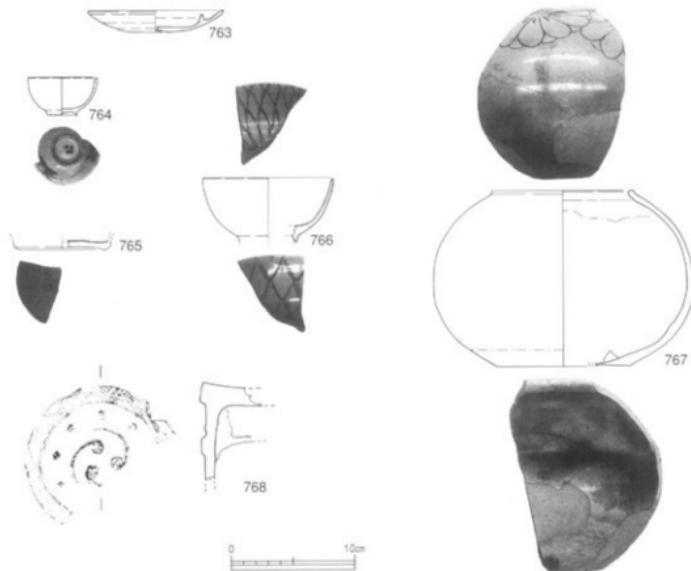
IV-1区の南端部で検出した土坑である。形状はやや歪な楕円形を呈し、長径1.4m、短径1.2m、深さ20cmを測る。埋土中からは、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。



### SK55 (第144図)

第144図はIV-1区の南端で検出した土坑のSK55から出土した遺物である。763は備前産の灯明受皿である。764・766は染付の碗である。766は内外面に網目文が描かれている。767は京都産と考えられる大型の鉢である。口縁部周辺に大きな菊文が線描きされている。茶道に用いる道具と考えられる。768は巴文軒丸瓦である。

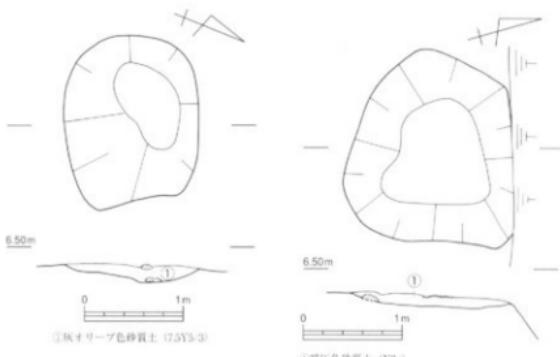
第143図 SK51平・断面図 (1/50)



第144図 SK55出土遺物実測図

SK56 (第145図)

IV-1区の南端で検出した土坑である。形状はやや歪な円形を呈し、長径1.6m、短径1.4m、深さ20cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。



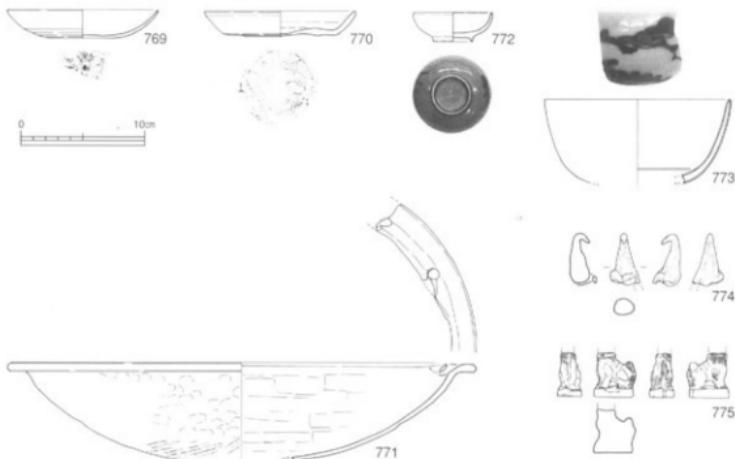
第145図 SK56平・断面図 (1/50)

第146図 SK57平・断面図 (1/50)

SK57 (第146・147図)

IV-1区の南端で検出した土坑である。形状は歪な楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.6m、深さ10cmと浅い。埋土中からは、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。

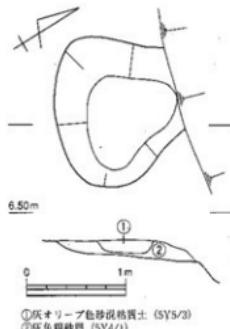
769・770は土師質土器の皿である。770の底部には糸切痕が顕著に認められる。771は瓦質土器の鍋、焰烙である。772は染付の酒盃、773は染付の碗である。774・775は人形である。774は一部なので、全体の様子は不明である。775は頭部が欠損しているが狛犬と考えられる。緑色の釉が一部に掛かる。



第147図 SK57出土遺物実測図

**SK58 (第148図)**

IV-1区の南端で検出した土坑である。やや不定形な梢円形を呈し、長径1.5m、短径1.2m、深さ20cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。



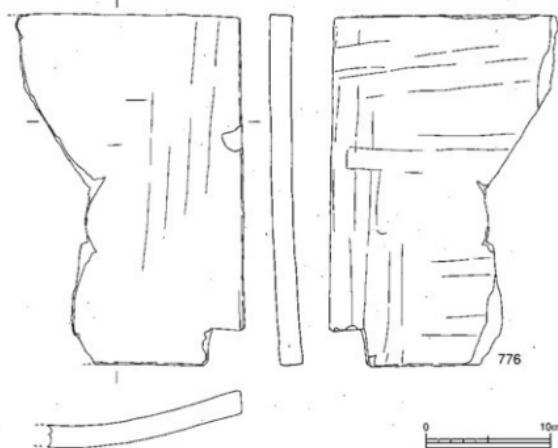
**SK61 (第149図)**

第149図はIV-2区の西側で検出したSK61から出土した遺物である。776は平瓦である。

**SK62 (第150図)**

IV-1区の北東部で検出した土坑である。やや歪な円形を呈し、直径0.8m、深さ10cmを測る。遺物はほとんど出土しなかった。

第148図 SK58 平・断面図 (1/50)



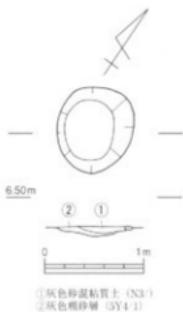
第149図 SK61出土遺物実測図

**SK64 (第151図)**

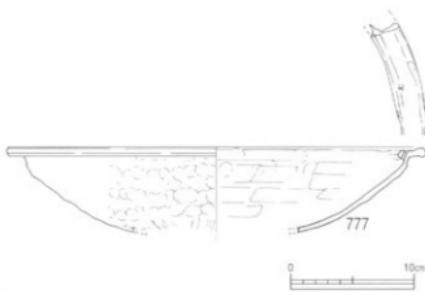
第151図はIV-1区西側で検出したSK64から出土した遺物である。777は瓦質土器の鍋、焰烙である。

**SK65 (第152・153図)**

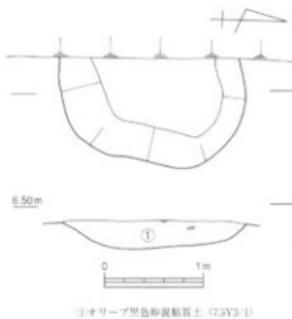
IV-1区のほぼ中央部で検出した土坑である。西側が近現代の搅乱によって破壊されている。長径1.9mを測る。埋土中からは、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。778は染付の鉢である。平面形は多角形を呈する。779は染付の鉢である。780は大棟の飾りに使う小菊文瓦である。



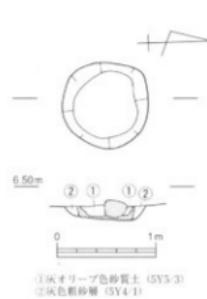
第150図 SK62平・断面図 (1/50)



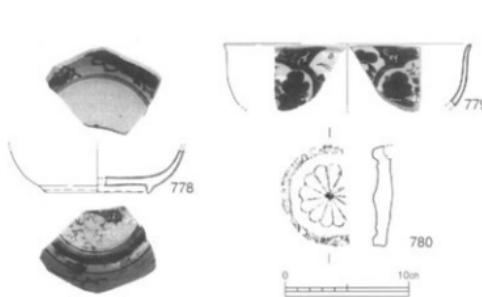
第151図 SK64出土遺物実測図



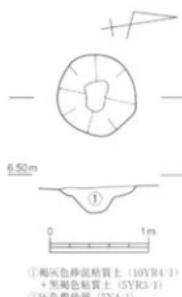
第152図 SK65平・断面図 (1/50)



第154図 SK66平・断面図 (1/50)



第153図 SK65出土遺物実測図



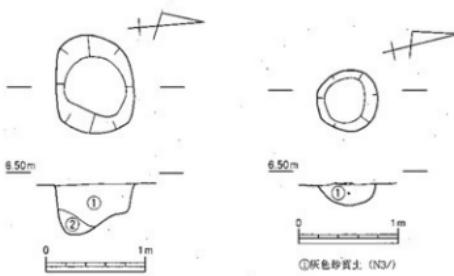
第155図 SK68平・断面図 (1/50)

### SK66 (第154図)

IV-1区のほぼ中央部、SK65のすぐ北東部で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径0.9m、深さ20cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。

### SK68 (第155図)

IV-1区の北西隅で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径0.8m、深さ30cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。



### SK69 (第156図)

IV-1区の北西隅で検出した土坑である。やや歪な椭円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ50cmを測る。

遺物は出土しなかった。

第156図 SK69平・断面図 第157図 SK70平・断面図  
(1/50) (1/50)

### SK70 (第157図)

IV-1区の北東隅で検出した土坑である。ほぼ円形を呈し、直径0.6m、深さ20cmを測る。遺物は細片以外出土しなかった。

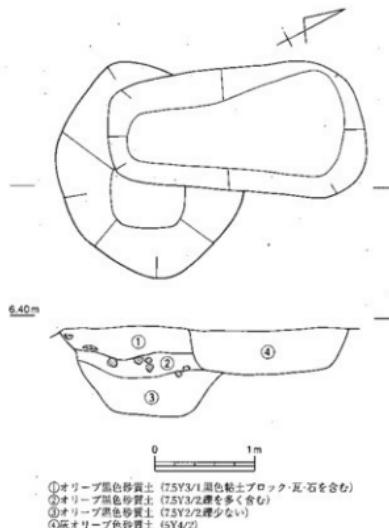
### SK73 (第158図)

IV-2区の東側で検出した土坑である。中央部が近現代の搅乱によって破壊されているため、全体の規模は不明であるが、長径2.2m、短径1.8m以上を測り、深さは90cmを測る。遺物は細片以外、出土しなかった。

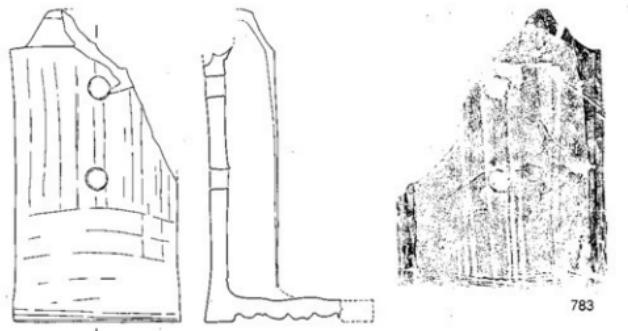
### SK77 (第159図)

IV-5区の東側で検出した土坑である。東半分をSB02並びに旧管理事務所の基礎により破壊されている。このことから、SB02構築以前に掘削された土坑であると考えられる。埋土中からは、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。

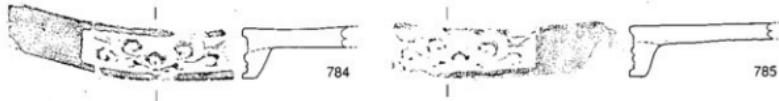
781は陶器の碗である。782は土師質土器の植木鉢である。783は巴文軒丸瓦である。凹面にへらみがきの痕跡が顕著に認められる。784・785は唐草文軒平瓦である。786は有段式の丸瓦である。凹凸面にへらみがきの痕跡が認められる。



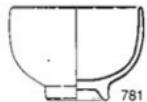
第158図 SK73平・断面図 (1/50)



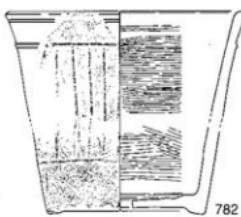
783



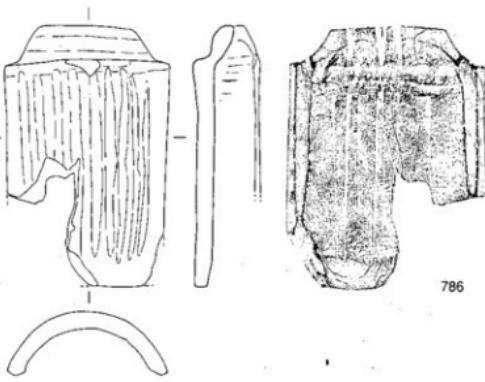
785



786



782



786

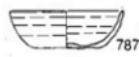


第159図 SK77出土遺物実測図

これらの遺物は概ね19世紀後半以前のものであり、したがって、SK77は19世紀後半以前に掘削されたものと考えられる。

#### SP81 (第160図)

IV-4 区の南側で検出した柱穴跡と考えられる遺構である。第160図はSP81から出土した遺物である。787は土師質土器の杯である。底部には板状圧痕が認められる。

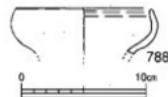


第160図 SP81  
出土遺物実測図

#### SP84 (第161図)

IV-4 区の南側で検出した柱穴跡と考えられる遺構である。第161図はSP84から出土した遺物である。788は陶器である。全体の形状は不明である。

SP81・84のほかに IV-4 区では多くの柱穴跡と考えられる遺構を確認している。明確に建物を構成するには至っていないが、IV-4 区が「果林分間図」では「屋敷地」となっていることから、これらの遺構が「屋敷地」を構成していた建物の遺構である可能性が高い。建物が構成できないのは近代以降の擾乱による破壊に起因するものと思われる。

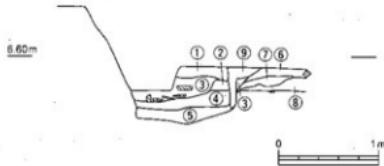
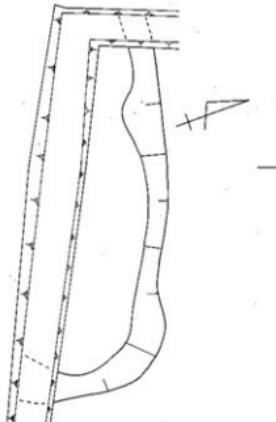


第161図 SP84  
出土遺物実測図

#### SX10 (第162~164図)

IV-4 区の中央東寄りの部分、調査区が鍵状に折れる部分で検出した大型の遺構である。やや歪な円形を呈し、長径3.8m以上、短径1m以上を測り、深さは最深部で60cmを測る。廃棄用に掘削されたものと考えられ、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。

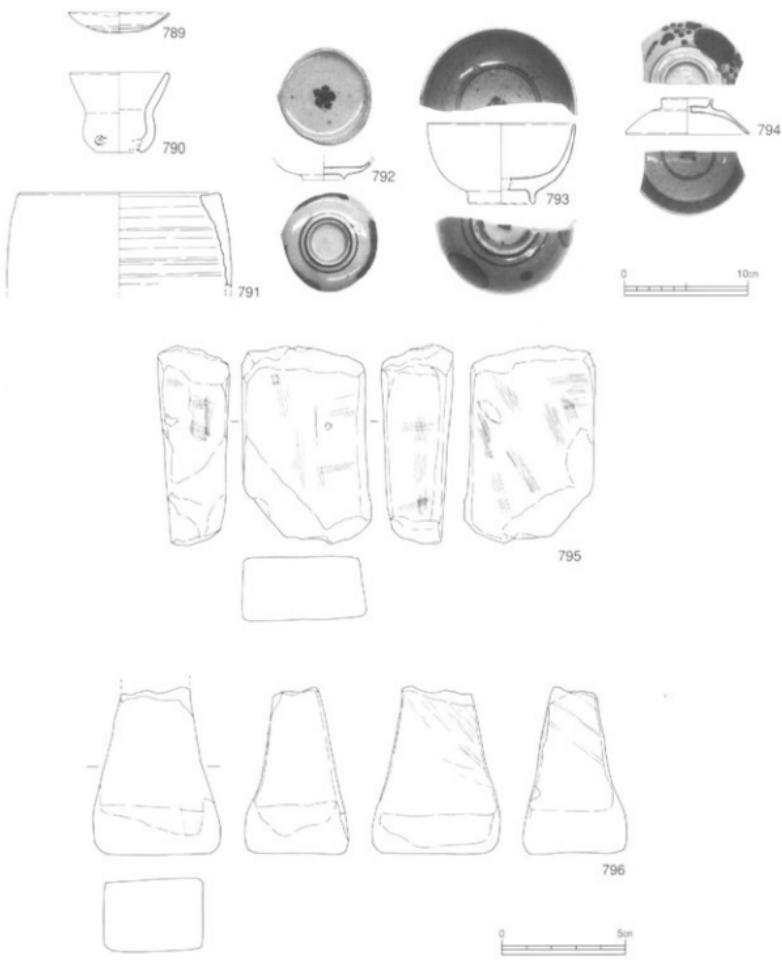
789は備前産の灯明皿である。口縁部に煤が付着している。790は陶器である。壺状を呈するが、小型でミニチュア土器のようである。玩具用に作られた可能性がある。淡い緑色の釉が一部に掛かる。792・793は染付の碗である。792の見込には五弁花文が描かれている。794は染付の蓋である。795・796は砥石と考えられる石製品である。いずれも長期にわたって使用されたと思われ、かなり磨耗している。特に796は砂岩製で磨耗が激しい。797は巴文軒丸瓦である。珠文の数は9個である。また、尾も細く長くなっている。時期的に後出するものと考えられる。799・800は平瓦である。



①灰褐色質土 (7.5Y4/1)  
②灰褐色質土 (10Y4/1)  
③褐色色紹土 (10YR4/1)  
④にい青褐色色紹質粘土 (10YR5/3)  
⑤灰褐色紹砂 (10Y5/1)

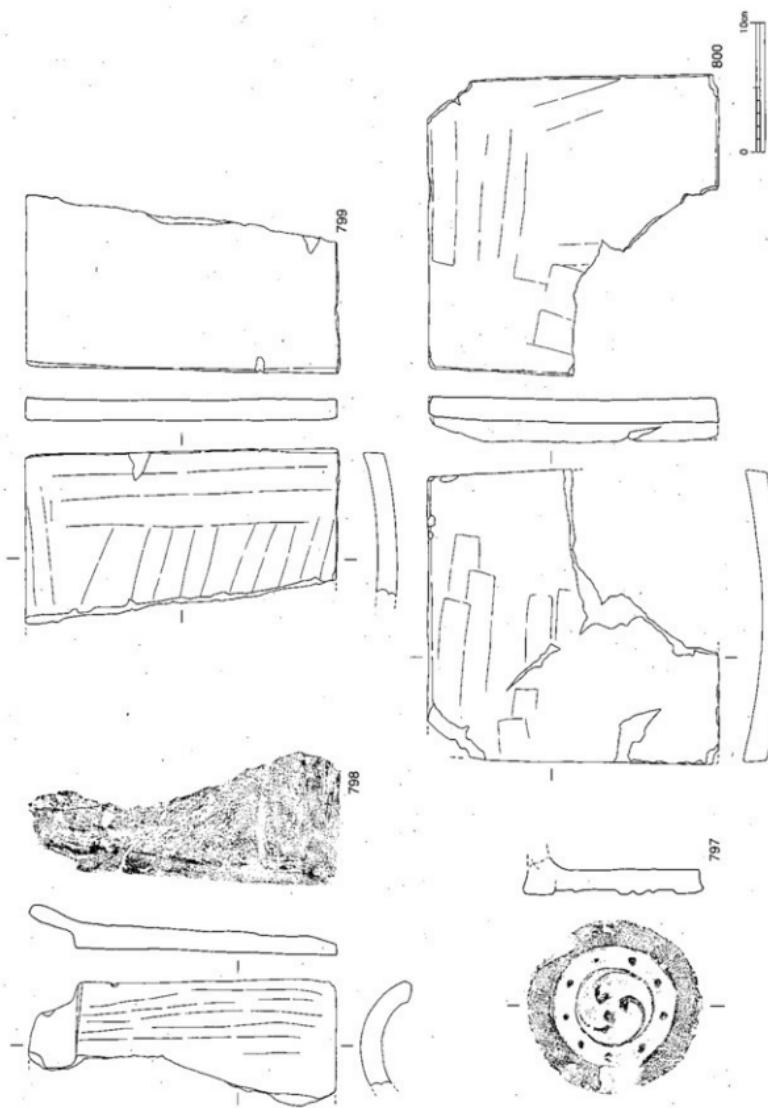
⑥灰褐色紹砂層粗粒砂層 (5Y4/1)  
⑦ホリーブ色紹粗砂層 (5Y5/2)  
⑧青褐色シルト質粗砂層 (2.5Y7/8)  
⑨ホリーブ色紹土 (7.5Y4/8)

第162図 SX10平・断面図 (1/50)



第163図 SX10出土遺物実測図①

第164図 SX10出土遺物実測図②



### SX12（第165図）

同じく、IV-4区の中央やや北寄りの部分で検出したSX12よりもさらに大きく、やはり廃棄用のものであると考えられる。埋土中からは、土師質土器や陶磁器、瓦類が出土している。第165図はSX12から出土した遺物である。801は唐草文軒平瓦である。

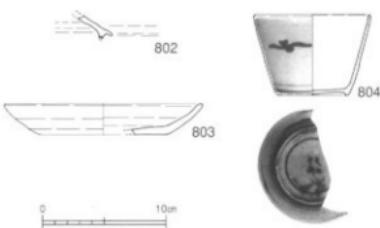


第165図 SX12出土遺物実測図

### 整地層（第166図）

IV-4区にもⅢ区の北側から続く、整地層が認められる。整地層はIV-4区の中央やや南付近まで続く。埋土中からは、土師質土器・陶磁器・瓦類が出土している。

803は陶器の皿である。赤褐色を呈し、器壁が薄い。見込には蜻蛉が陰刻されている。804は染付の猪口である。

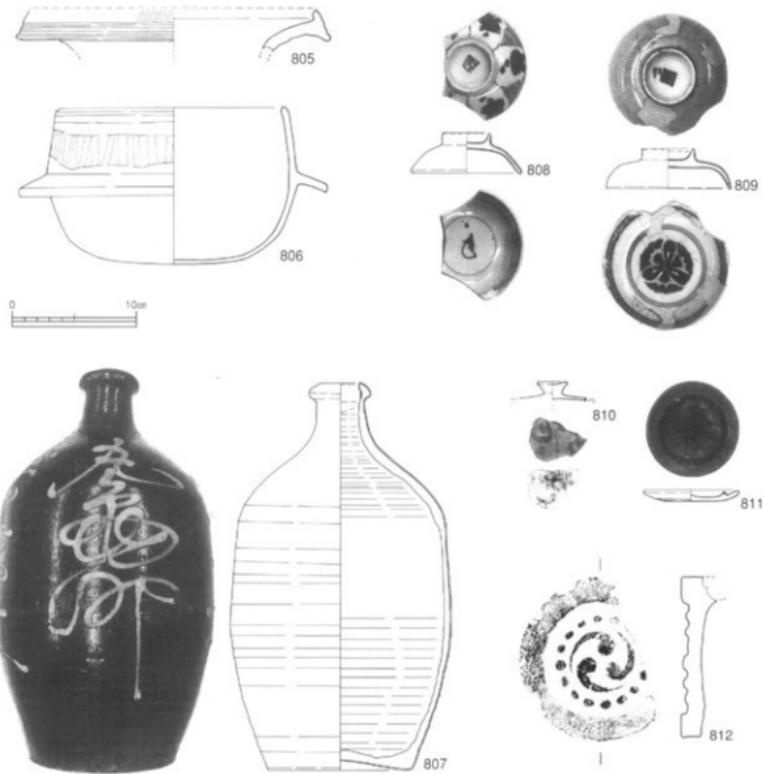


第166図 IV区整地層出土遺物実測図

### その他の遺物（第167図～第173図）

第167・168図はIV-1区の包含層から出土した遺物である。805は弥生土器の壺の口縁部である。摩滅が激しく、上流から運ばれてきたものと考えられる。806は瓦質土器の土釜である。807は陶器の徳利である。いわゆる通い徳利と呼ばれる明治以降のもので、酒や醤油を入れるものである。購入した店が消費者に貸すもので、二回目の購入からは、この徳利を持って店に行くのが通常であった。したがって、通い徳利には店の住所や名称がイッチン掛けにより書かれているものが多く、本例も「丸亀町云々」という住所が書かれている。808は染付の蓋である。外面中央部には崩れた渦福文が認められる。809は青磁の蓋である。内面にはかたばみ文が認められる。811は備前産の灯明受皿である。812は巴文軒丸瓦である。珠文は16個と推定される。813は硯である。上下部分が欠損しているが、中央部には墨を磨った痕跡が顕著である。814は砥石と考えられる石製品である。かなり長期にわたって使用されており、磨耗が著しい。

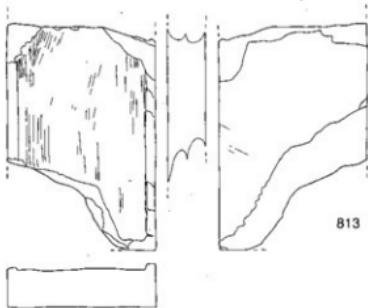
第169・170図はIV-2区の包含層から出土した遺物である。815は七輪である。816は陶器の皿である。803と同様、蜻蛉が陰刻されている。817は土師質土器の小皿である。819は窯道具の一つである。820は土師質土器の焜炉と思われる。821は陶器の急須である。822は擂鉢である。見込部分の鉗目が放射状を呈していることから明石産の可能性が高い。823は染付の小瓶である。花生と考えられる。824～826は染付の碗である。826は広東型碗である。827・828は染付の蓋である。828には持ち手がなく、合子の蓋と考えられる。829は色絵の鉢である。830は染付の皿である。831は瓦を転用した円形の土製品である。玩具の可能性がある。832は陶器の小型の瓶である。実用的ではなく、玩具として使用された可能性が高い。833はやはり、ミニチュアの土製品である。社を象ったもので、屋根とそれ以外に分割されている。一部に淡い緑色の釉がかかる。834は唐草文軒平瓦である。835・836は平瓦である。837は平瓦にしては湾曲の度合いが強く、実態は不明な瓦である。838は砥石と考えられる石製品である。中央部の磨耗が激しい。



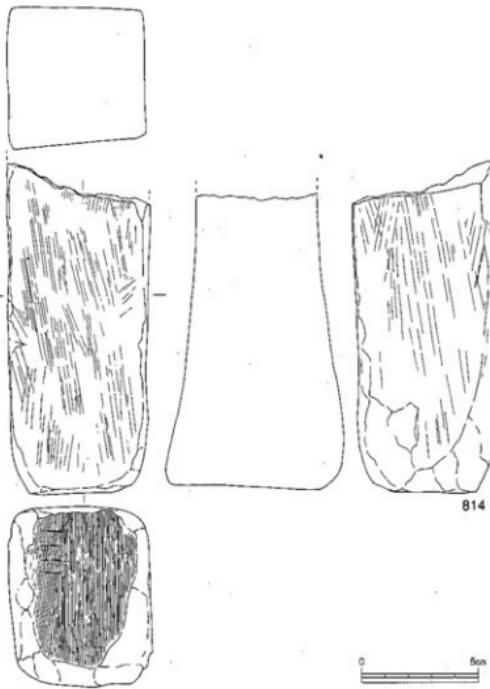
第167図 IV-1区包含層出土遺物実測図①

第171図はIV-3・4区の包含層から出土した遺物である。839は緑や黄色の釉が掛かる、大型の四角い鉢である。釉の状態から珉平焼の可能性が考えられる。840は染付の蓋である。841は染付の碗である。842は染付の皿である。見込に五弁花文が描かれ、高台は蛇の目凹型高台である。843も染付の皿である。844～846は丸瓦である。844には凸面に刻印が認められる。847は唐草文軒平瓦である。848は錢貨である。判読し難いが、寛永通宝である。

第172・173図はIV-5区の包含層から出土した遺物である。849は備前産の灯明受皿である。850は唐津産の碗である。851は染付の碗である。見込に五弁花文が描かれている。852～854は巴文軒丸瓦である。855・856は唐草文軒平瓦である。857・861は平瓦である。858～860は丸瓦である。860は屋根に固定するための孔が2つあいている。

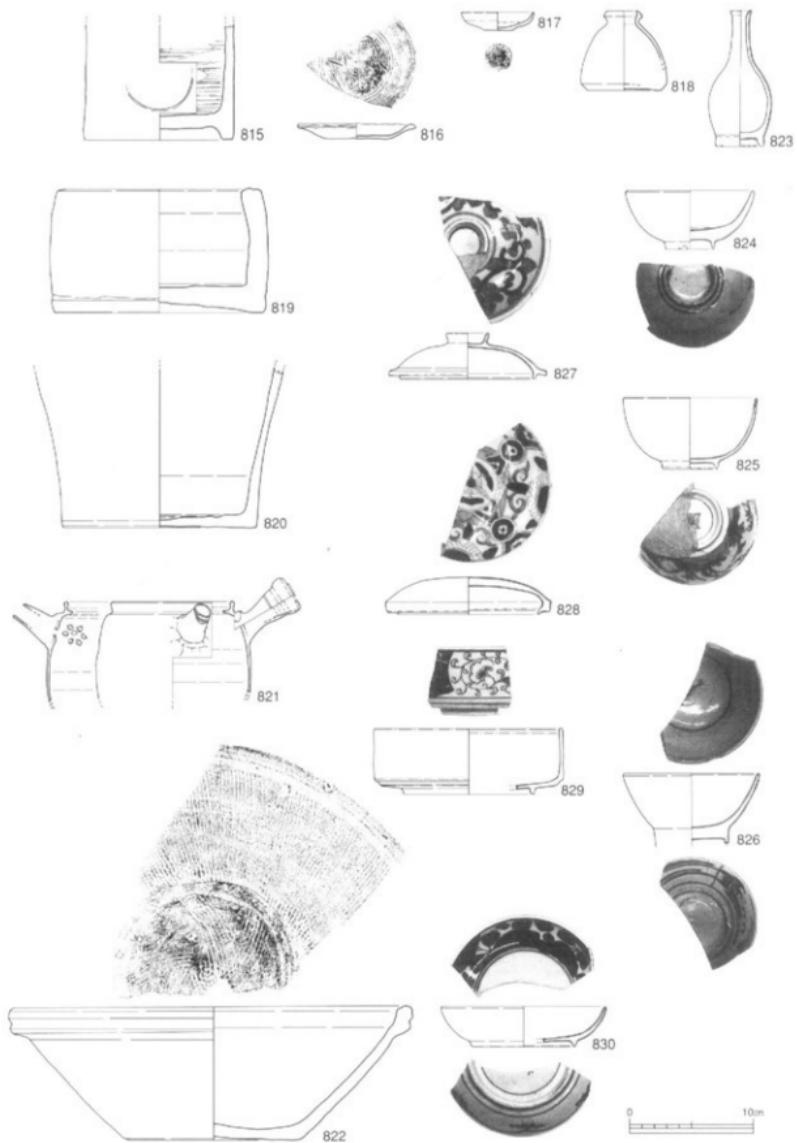


813



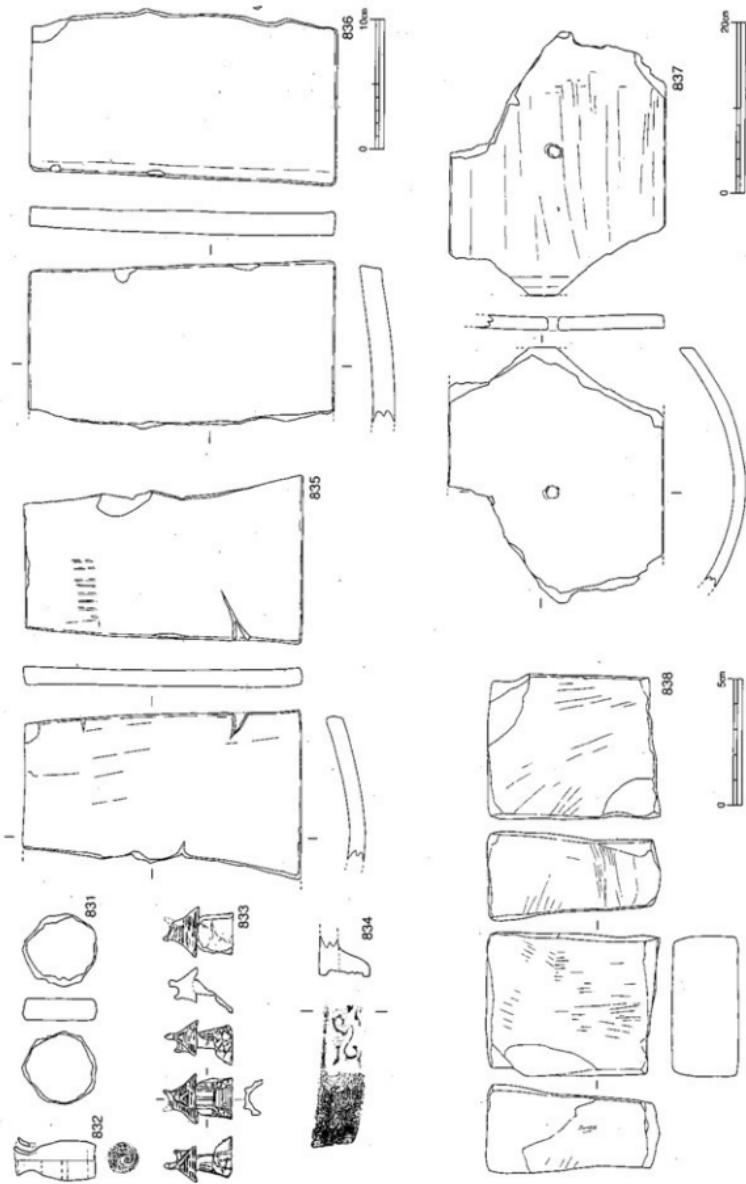
814

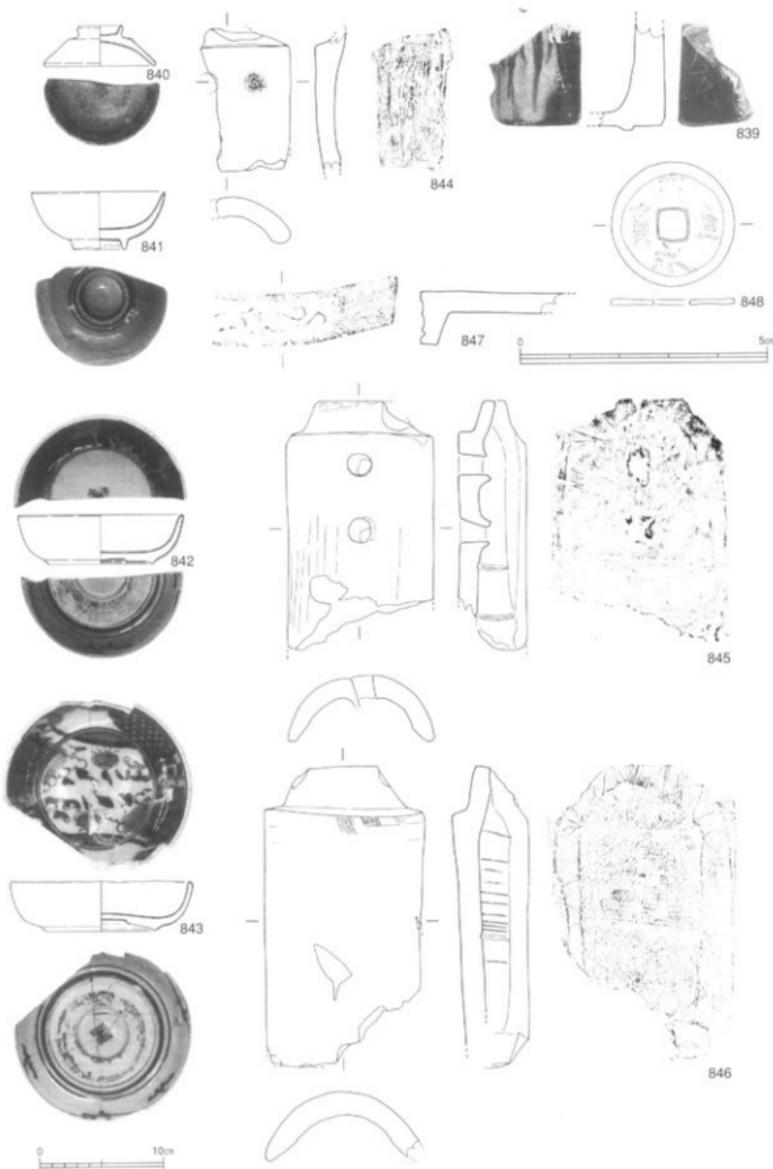
第168図 IV-1区包含層出土遺物実測図②



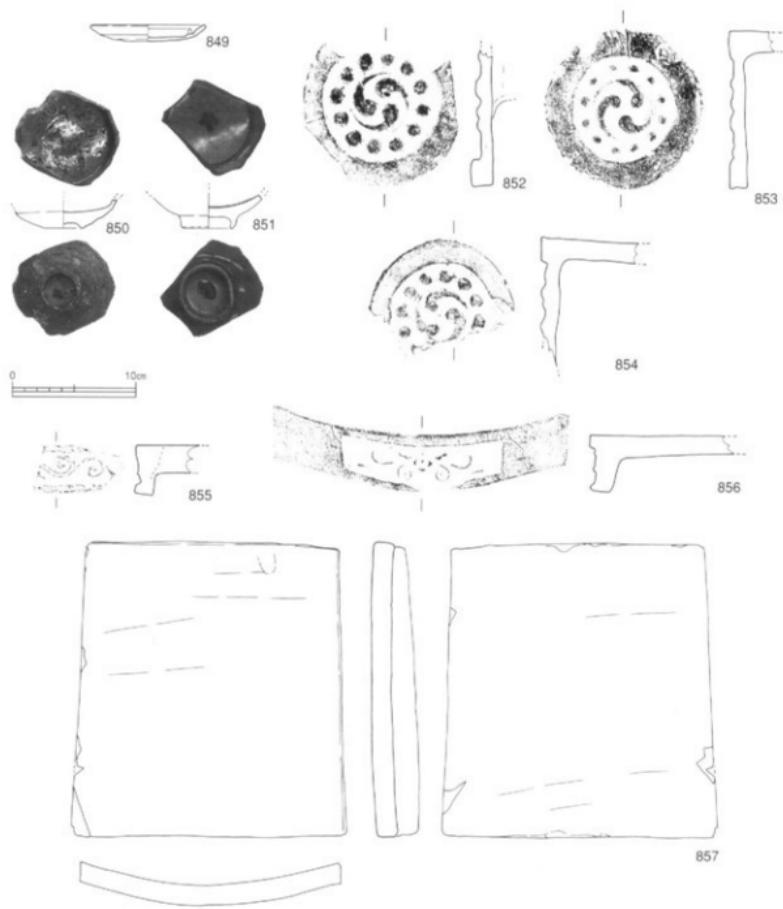
第169図 M-2区包含層出土遺物実測図①

第170圖 N-2區包含層出土遺物實測圖(2)



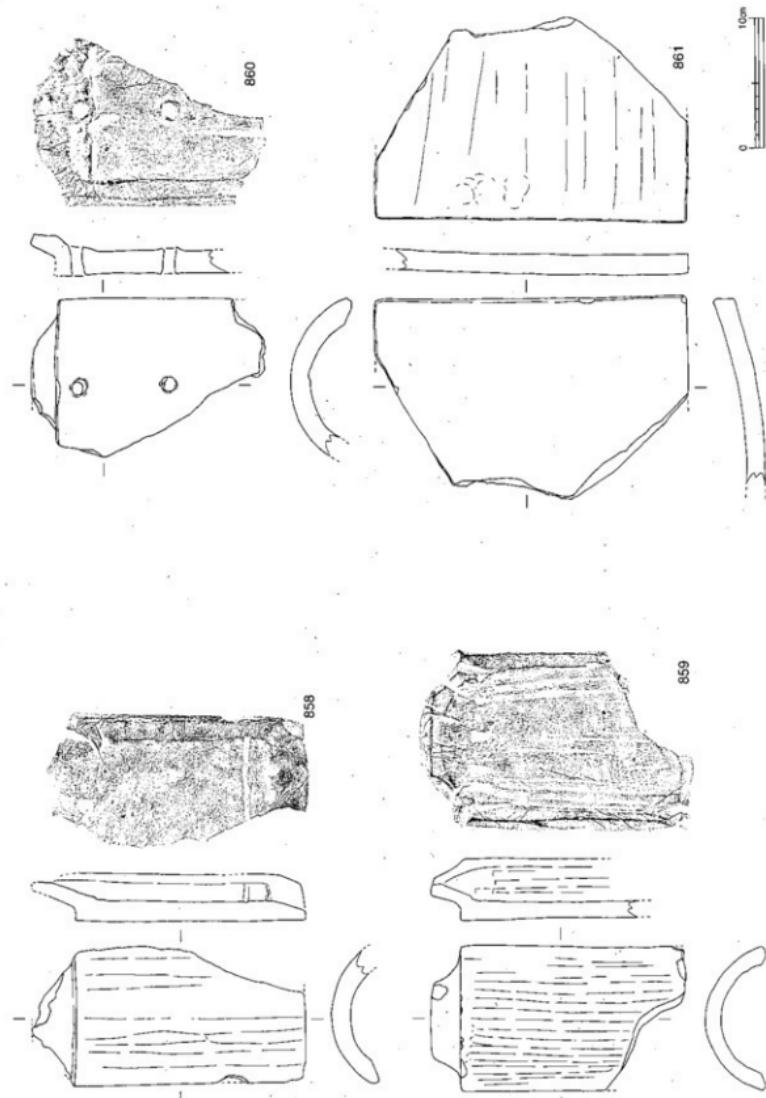


第171図 M-3・4区包含層出土遺物実測図



第172図 IV-5区包含層出土遺物実測図①

第173图 N-5区包含层出土遗物实测图(2)



## 第7節 V区の調査

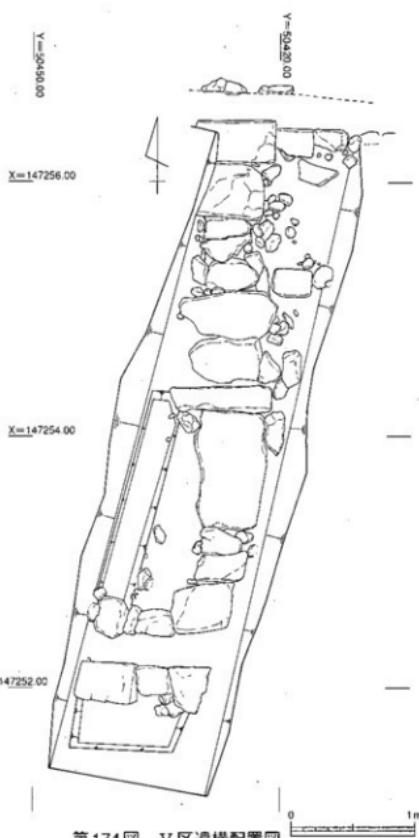
V区は当初、予備調査段階では調査対象地には含まれなかつた部分で、東門を入ってすぐ南側の土塁部分に当る。再整備事業による構造物の一部がこの土塁と重複するため、土塁の構築時期及び下層遺構の有無について、一部トレンチ調査を実施した。便宜上、これをV区と呼ぶこととする。調査対象面積は約20m<sup>2</sup>である。

SX01（第174図）

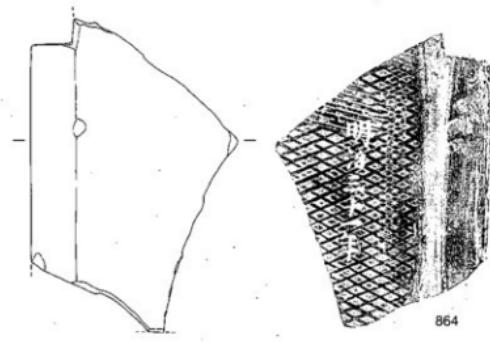
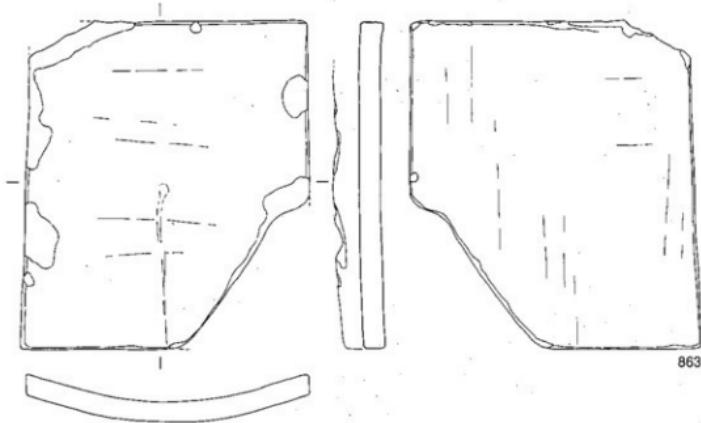
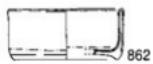
V区で検出した石敷きの遺構である。検出した石敷きは幅1m、長さ5m以上と推定されるもので、大きな平石を並べて構築している。平石はほとんどが安山岩を使用しており、上面を平滑に仕上げている。大きさはいろいろであるが、おむね1辺1m前後のやや長方形に近い四角形を呈するものが多い。並べ方はほぼ一直線に並べているが、隙間なく幾何学的というわけではなく、趣のある庭の飛び石を連想させる並べ方である。注意すべきは、石敷きの中央付近に幅1m前後を隔てて細長い石材が使用されていることである。これらは東西に長い方向に並べられ（石敷きに直交する方向）ており、東西方向へ延長する様相を呈する。つまり、土塁の下部にその延長が残存している可能性が高いと考えられる。V区は「栗林分間図」によれば、土塁もしくは板塀が東西に構築されており、SX01のような石敷きは認められない。しかし、弘化年間の「栗林古図」ではこの塀が東門に入ったところで一部切れていて、南側の区域への切通しのように描かれている。つまり、SX01は19世紀中葉に從来の塀の一部を切断し、新たに構築された切通しの石敷きであり、検出した細長い石材はこの塀の下部の基礎である可能性が高い。このことについては、第5章でも触ることにする。

また、SX01の上部、現在目にする土塁については、掘削中の埋土から「明治三十一年」「博物館」という刻印のある瓦片が出土していることから、明治31年以降に構築された新しいものであることが判明した。

第175・176図はV区の包含層から出土した遺物である。862は陶器の鉢である。863は平瓦である。864は棟瓦である。撫し瓦で凸面には「明治三十一年」の刻印が認められる。



第174図 V区遺構配置図



0 10cm

第175図 V区包含層出土遺物実測図

# 第4章 自然科学的分析

## 第1節 栗林公園から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

栗林公園は、高松平野北部の紫雲山・稻荷山東麓に接する沖積地に位置する。栗林公園は、元亀・天正の頃に佐藤氏によって、築庭されたのに始まるとされる。17世紀に讃岐高松藩の生駒氏により南湖一帯が造園された。生駒氏の後に入封した松平氏は、明治維新に至るまで下屋敷として使用していた。

これまでの発掘調査により、栗林公園を維持・管理する施設と考えられる掘立柱建物跡、礎石建物跡、出水と考えられる石組の遺構などが検出されている。また、木製品等の生活用具も出土している。

本報告では、出土した木製品および箒の毛について、材質を明らかにするための樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、Ⅲ区SX07から出土した箸2点（試料番号1,2）とSX06から出土した箸2点（試料番号3,4）、箒の毛1点（試料番号5）の合計5点である。箸4点については、製品の破損を最小限に抑えるため、木取を確認した上で直接3断面の切片を作成した。箒の毛は、1本を抜き取って試料とした。

### 2. 分析方法

箸4点は、木取を確認した上で、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・桿目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、プラスチック製容器に密閉して持ち帰った後、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとした。箒の毛は実体顕微鏡で観察しながら横断面の切片を作成し、ガム・クロラールで封入してプレパラートとした。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### 3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (Abies) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、水平壁および垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・ソガ属 (Tsuga) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部の年輪界近くに認められる。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

表5表 樹種同定結果

番号	遺構	器種	樹種
1	Ⅲ区SX07	箸(578)	ソガ属
2	Ⅲ区SX07	箸(579)	モミ属
3	Ⅲ区SX06	箸(459)	ソガ属
4	Ⅲ区SX06	箸(460)	モミ属
5	Ⅲ区SX06	箒	シロ

・ シュロ (*Trachycarpus fortunei* (Hook.) H.Wendl.)

ヤシ科シュロ属

毛の直径は約0.5mm。横断面はU字型で、纖維細胞のみで構成され、道管や柔細胞等は認められない。外周部の纖維には一部破損箇所が認められる。

この特徴はシュロの葉柄基部の纖維の構造によく似ている。現生のシュロの横断面をみると、直径は約0.5mmではほぼ同じである。横断面は円形で中心部付近に孔がある点でやや異なるが、今回の箒の毛では、外周部の纖維に破損が認められることから、破損によりU字形を呈している可能性がある。纖維の構造のみで同定することは困難であるが、他に同様の構造を持つ物質がないこと、シュロの纖維がシュロ繩、たわし等に利用されること等からシュロに同定した。

#### 4. 考察

箸は、針葉樹のモミ属とツガ属であった。いずれも木理が直通で割理性が高く、加工は容易である。モミ属にはモミ、ウラジロモミ、オオシラビソ、シラビソ、トドマツの5種があるが、香川県内では中間温帯の構成種であるモミが一般的である（倉田、1971）。また、ツガ属にはツガとコメツガの2種があるが、モミと共に中間温帯に生育するツガが一般的である（倉田、1971）。したがって、箸の木材は香川県内で入手可能であったと考えられる。

箸はいずれも芯持の棒材ではなく、削り出された棒状を呈する。モミやツガは有用材であるが、今回の箸程度の大きさであれば、それほど大きな木片でなくても製作可能であり、加工時に生じた余材等も利用可能であったと考えられる。

一方、箒の毛は組織観察の結果からシュロの葉柄基部の纖維に同定された。シュロの纖維は強く耐水性があり、シュロ繩・敷物・シュロ箒等として利用される（柴田、1957）。シュロは、現在東北地方まで植栽されているが、九州南部のものは自生と考えられている。しかし、当該期のシュロ産地や箒製作の実情については詳細は不明である。また、実際に出土した箒について同定を実施した例も少なく、現状ではどのような素材が利用されていたのかについても十分な資料が蓄積されていない。そのため、箒については利用された素材に関する資料蓄積が今後の課題である。

#### 引用文献

倉田 哲、1971、原色日本林業樹木図鑑 第1巻（改訂版）、地球出版株式会社、331p.

柴田 桂太（編）、1957、資源植物事典（増補改訂版）、北隆館、904p.

## 第5章 まとめ 調査の成果と栗林公園の変遷

第3章に各地区の遺構及び遺物について、その概略を示したが、ここでは主に検出した遺構と栗林公園に関する資料（特に絵画資料）との整合性を検討し、近世の栗林公園内の土地利用の実態に迫ってみたい。

### 1. 現存する絵図について

最初に現存する絵図について、簡単に述べる。栗林公園を描いた絵図は、いくつか現存するが、その数はあまり多くない。年代順に示すと、まず、「御林御庭之図」（『松浦正一文庫』瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）があげられる。掛幅装の縦長の絵図で元禄13年（1700）の年紀があり、現存する栗林公園を描いた絵図としては最も古い。さらに、この絵図には多くの切紙に書かれた加筆があり、これは延享2年（1745）に五代藩主松平頼恭（よりたか）の命により、園内の景勝地の名称を和名から中国風の名称に改められたことを示している。この時に改名された名称は現在も使われ続けている。次にあげられるのが、「栗林分間図」（栗林公園観光事務所蔵）である。「栗林分間図」は当初は横長の一枚物であったが、傷みが激しいので、修理した後、折画帖に表丁し直されている。「栗林分間図」は安政七年（1824）に当時の家老である岸澤元徴の指揮の下、上田資容が測量並びに描画した栗林公園の平面図で、縮尺はほぼ1/650である。建物・道路・池・丘等がそれぞれ色別けされており、当時の園内の状況を知る上で貴重な資料である。さらに「栗林分間図」から20年を経た弘化元年（1844）に描かれた表題のない絵図がある。掛幅装の横長の絵図で園内を俯瞰した構図で描かれている。この絵図とほぼ同じ構図で描かれたものに「栗林古図」「栗林公園全図」（いずれも香川県歴史博物館蔵）があるが、これらには年紀がなく、はっきりとした製作年代は不明であるが、構図が同じであることからほぼ同時期に相次いで描かれたものと考えられる。



「御林御庭之図」（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）



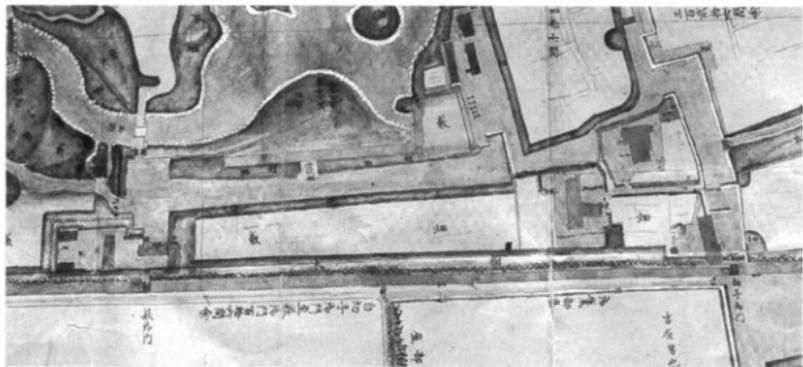
「栗林分間図」（栗林公園観光事務所蔵）



「栗林公園全図」（香川県歴史博物館蔵）



「栗林公園古図」（香川県歴史博物館蔵）



調査対象地部分（「栗林分間図」）

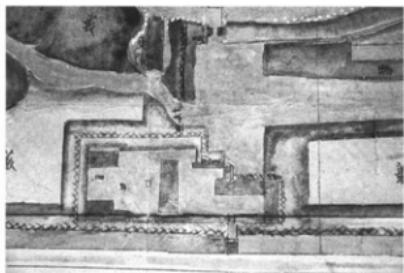
## 2. 調査の成果

I 区—I 区の調査では、多くの土坑のほか、掘立柱建物跡・柱穴跡等を検出した。I 区は、すでに述べたとおり、「栗林分間図」では「萩御門」が所在していた地区に当り、東側の濠に架かる橋とこれに続く「萩御門」、それに門周辺にいくつかの建物や園地との境界が描かれている。「萩御門」については、「栗林分間図」と現在の平面図とを重ね合わせて、「萩御門」が所在していたであろう個所を推定し、その付近を中心として濠に達するトレンチを掘削した。しかしながら、濠に見られる石積みの裏込めにもガラス製品等が含まれており、近代以降大規模に改修された可能性があり、「萩御門」の位置を特定することはできなかった。

南側で検出した掘立柱建物跡 (SB01) については、梁行の柱間 2 m、桁行の柱間 3 m であり、6 m 以上 × 3 m の建物の規模が復元できる。

SB01は「栗林分間図」と平面図とを重ね合わせると、「萩御門」内の南北に長い建物の位置とほぼ一致する。「栗林分間図」に描かれた建物は復元すると 8 m × 3 m であり、規模もほぼ一致する。一方、「御林御庭之図」を見ると、南東の船入の付近に建物と思われる施設が 2 棟並んでいるのが確認される。絵画資料なので根拠には欠けるが、この施設がSB01付近に当るため、SB01がこの施設である可能性も否定できない。

しかしながら、SB01の柱穴跡から出土した遺物は、細片とは言え、土師質土器や陶磁器に 18 世紀以前のものは認められること、周辺の状況や遺構・遺物もほとんどが 19 世紀以降のものと考えられることなどから、ここでは SB01 は「栗林分間図」に描かれた建物である可能性が高いことを指摘してお



I 区付近（「栗林分間図」）



I 区付近（「御林御庭之図」）

きたい。

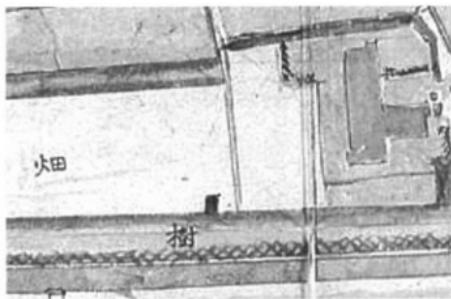
I 区ではその他に多くの素焼きの甕を据え付けていたと考えられる土坑を検出している。時期的には近世末期から明治期にかけてのものと考えられるが、重なり合ったものも多く、ある程度の期間に何度も据え直していた可能性がある。位置的には規則性はなく、ランダムに据え付けられていたものと考えられる。また、北西部で柱穴跡群を確認しているが、明確に建物を構成するには至らなかった。この付近には「栗林分間図」においても建物の記載はなく、鍵状に折れ曲がった帶状の施設が認められる。建物域と「藪・畠」及び園地との境界を示しているものと思われ、検出した柱穴跡群がこの境界に関連する可能性も指摘できる。また、南西部のコンクリート下層の取水施設と考えられる石積造構については、「栗林分間図」にも記載がなく、また、埋土中から出土した遺物もほとんどが明治期以降のものであるため、近代以降に造られた可能性が高いが、III 区の SX06・07 も「栗林分間図」に記載がなく、近世に構築されたものではないと断言はできない。

II 区 II 区の調査では、面積が狭小であったこともあり、また、樹木の根や旧動物園の施設の基礎等の搅乱があり、検出した遺構は決して多くない。II 区は「栗林分間図」においては、「藪・畠」であり、また、園地内との境界に最も近い部分である。そこで、一部園路までトレンチを設定し、園地との境界の確認を試みた。しかしながら、水道や電気の配管等があり、近世以前の遺物は全く出土せず、やはり大規模な改変を受けていることをうかがわせた。

II 区では南北に長大な瓦溜り (SX05) を検出した。平面的な規模の割に浅く、また、土層の堆積も長期間にわたって堆積したような状況も確認できなかったため、ほぼ一時に不要になった廃材を中心に廃棄するため作られたものと考えられる。出土した瓦類や陶磁器には一部 18 世紀代に属するものも認められるが、大部分は 19 世紀代のものである。

III 区 III 区は西南部及び中央部に大きな現代の搅乱があり、層位的に遺構を復元することは困難である。「栗林分間図」においては、この付近はまさに「藪・畠」であり、建物等の記載はない。かろうじて「藪・畠」と建物域との境界と思われる線が認められるのみである。この境界部分については、SX07 の北側で検出した石列遺構がこれに該当するものと考えられる。幅 1 m 弱で平面長方形の石材を 2 列に並べたもので、これを基礎に壠もしくは柵といった簡易な境界が想定される。

III 区では、「栗林分間図」に記載のない SX06・07 という大型の遺構が検出された。SX06 は素掘りで緩やかに落ち込むもので、SX06 を発展的に廃棄し、構築されたものが SX07 である。SX07 は池状に掘削した周間に四角く加工した石材を石垣状に積上げたもので、最下層の細砂層からは現在でも湧水が認められる。SX06・07 ともに「藪・畠」を維持管理していく上での農業用水を確保する施設であったと考えられる。



III・IV 区付近（「栗林分間図」）

また、SX07の北側からIV区にかけて炭化物を多く含む土層が認められる。深いところで20cm、浅いところで数cm、II区では検出しておらず、III区を中心とする範囲に認められる。この土層の上面はほぼ平らであり、この土層は付近を造成する際に使われた整地層であると考えられる。この土層中から多くの陶磁器や瓦類が出土しているが、そのほとんどが18世紀中葉に属するものである。18世紀中葉といえば、五代藩主頼恭による改修がほぼ終了し、ほぼ現在の栗林公園の外観が整った時期であり、平行して、東側の縁辺部についても造成などの普請がなされたものではないだろうか。この観点からみれば、「敷・畠」を維持管理する取水施設であるSX06がこの時期に構築され、その後SX07に改修されたと考えられる。

IV区～V区では、南側で多くの柱穴跡群、北西部で多くの土坑、東側で溝状造構、北側で礎石建物跡等多くの遺構を検出した。「栗林分間図」によれば、IV区は主に建物域に当り、数棟の建物が記載されている。南側で検出した柱穴跡群はこの建物を構成していた可能性があるが、近代以降の搅乱によって、破壊された部分が多く、明確に建物を復元するには至らなかった。一方、北側では礎石建物跡(SB02)

を検出した。SB02はいわゆる布基礎と呼ばれる平面を長方形に加工した切石を隙間なく並べて建物の基礎にする工法で建てられていたものと考えられる。旧管理事務所とはほぼ同じ位置にあったため、かなり破壊を受けていたが、南側の石列等が良好に残っていた。また、南側に一部増築のためと考えられる石列も検出でき、東西方向の建物が復元できる。SB02の位置は「栗林分間図」や「栗林古図」等にも建物が描かれ、少なくとも19世紀中葉には所在していたものと考えられる。

IV区では東側の土塁に沿って溝状造構を検出した。南側は素掘りで簡素であるが、北側には西側を角石を利用して護岸した堅固な作りとなっている。東側は恐らく土塁に接していたものと考えられる。この石列は北側で弧を描いて東へ抜けする様相を呈しており、土塁を暗渠状に抜け、東側の濠へ排水する機能を有していたものと考えられる。このコーナー部分は「栗林分間図」に四角い樹状の施設が土塁に接して描かれており、恐らくこれに相当するものと考えられる。

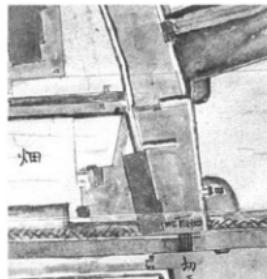
V区～V区は東門を入ってすぐ南側の土塁に当る部分である。園地との境界に当るため、短期間のトレンチによる調査であったが、多くの見知が得られた。まず、土塁の構築時期であるが、土塁の断面を観察すると、版築は見られず、単に盛土を固めて構築したものであることがわかった。盛土中からはいくつかの瓦片が出土したが、「明治三十一年」「博物館」の刻印のある瓦片があり、したがって、この土塁の構築時期が明治三十一年以降であることが判明した。

土塁下層からは南北方向に石が並ぶ石敷きの造構が検出された。いわゆる庭園の飛び石のような様相を呈しているが、隙間なく敷かれている。旧動物園側では検出されなかつたため、土塁の幅あるいはもう少しだけ広い幅であったことがうかがえる。石列は1列のみで東西に拡がることはないが、石列の中ほどに細長い石が約50cmの間隔をおいて土塁と同じ方向に並んでおり、この部分のみ東西へ拡がる。この石列は建物等の基礎になるような配置をしておらず、南側と北側の境界を行き来できる道ではない



IV・V区付近（栗林分間図）

かと考えられる。この観点から「栗林分間図」を見るに、当該部分には白い土塀があり、この土塀に入口のような施設はない。しか



M・V区付近拡大（「栗林分間図」）



M・V区付近（「栗林公園古図」）

しながら弘化元年の「栗林古図」「栗林公園全図」にも土塀は描かれており、さらに一ヶ所、土塀が切れて南側への入口が描かれていることがわかる。このことから、検出した石列は安政7年から弘化元年までの20年間に南側と行き来するために作られた入口であると推定される。

### 3.まとめ

で見てきたように、今回の発掘調査では直接園地に関連するような遺構は検出されなかった。また、「栗林分間図」やその他の絵図を見ても、調査区は庭園を回遊する動線からははずれており、庭園遺構があったが後世に破壊されたのではなく、人々、庭園遺構は存在しなかったものと思われる。

しかしながら、掘立柱建物跡や礎石建物跡等、「栗林分間図」に記載のある施設と考えられる遺構が検出されたことは貴重な知見であると言えよう。特に東側の土塀に沿って検出した石組の排水施設や「蔽・烟」と建物を区画する石列構造等は「栗林分間図」の記載がある程度裏付けるものとして重要な遺構である。さらに、北端の土塀下層から検出された石列は1824～1844年の20年間に作られたと考えられ、「栗林古図」などが当時の様子を表していることがわかり、新たな知見と言えよう。

以上のことから、今回の発掘調査対象地である動物園跡地については、元来、観賞するための庭園ではなく、「蔽・烟」という記載があること、また、石組の取水施設と考えられる遺構があることから、庭園を維持管理する施設であったと考えられる。発掘調査の知見からは証明が難しいが、「栗林分間図」に見える南側の建物群と北側の建物群は維持管理する業務を行っていた人々が常駐していたものと考えられる。

このような庭園を管理する施設の所在については、他の大名庭園にその例を見ない。代表的な大名庭園である備前岡山藩の後楽園や加賀前田藩の兼六園においてもこのような施設は庭園内にはない。また、東京都文京区に所在する水戸徳川家の小石川後楽園においても同様である。現在、庭園自体はほとんど消滅しているが、東京都新宿区に所在する尾張徳川家の戸山邸においても同様である。これらはいずれも藩邸もしくは居城のすぐそばに庭園があり、城内もしくは邸内とも言える場所なので、あえて園内に管理施設を設ける必要はないということであろう。栗林公園の場合、居城である高松城から離れており、園内に管理施設がないと、かえって不便であるとの必要から生じたものと考えられる。

※ 東京都内の大名庭園の状況は東京都文京区教育委員会の加藤元信氏、同千代田区教育委員会の後藤宏樹・厚秀雄氏にご教示いただいた。

## 報告書抄録

ふりがな	りつりんこうえんひがしもんしゅうへんきいびじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこく りつりんこうえん					
書名	栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 栗林公園					
副書名						
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	北山健一郎					
編集機関	香川県埋蔵文化財センター					
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL 0877-48-2191					
発行機関	香川県埋蔵文化財センター					
発行年月日	2006年3月31日					
総ページ数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数
161	16	145	175 (CD-ROM)	2	175	25 (CD-ROM内に1,374枚)
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>
		市町 遺跡番号	。	。	。	。
りつりんこうえん 栗林公園	かがねけんたかまつりつりんこう 香川県高松市栗林町	37210	34°19'30"	134°2'50"	平16.6~ 平16.11	4,000 栗林公園東門周辺 再整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
栗林公園	庭園	江戸時代	礎石建物跡 掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑 柱穴 出土遺構	土師質土器 陶磁器 瓦類 石器 鉄製品 木製品		

栗林公園東門周辺再整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

## 栗林公園

2006年3月31日発行

編集 香川県埋蔵文化財センター  
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4

発行 香川県教育委員会

印刷 太陽印刷株式会社

